

神将御伽草子—パラダイムシフト—

飴玉鉛

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法の血が薄れた現代、歴史と魔法学オタクの少年は、避けようのない魔法災害【神隠し】に被災してしまった。そうして神隠しによる時間逆行で、魔法全盛にして最後の時代にやってきた少年は、戦国三英傑の1人【星章院賦】と邂逅し、怪異と剣と魔法と銃の世を渡っていくことを余儀なくされてしまう。

テーマは【神将】なヒロインと【神算鬼謀】な主人公の御伽草子だ。ただし内約は『三国志と戦国時代と剣と魔法と銃と修羅と英雄』をミキサーにかけてミックスジュースにしたものとする。

目次

一話	【神隠しの招待状（上）】	1
二話	【神隠しの招待状（下）】	11
三話	【鬼眼の九針】	20
四話	【はじめましては戦慄の音】	33
五話	【星の三義姉妹】	47
六話	【八咫】	62
七話	【機械の心を持っている】	78
八話	【出立準備】	89
九話	【魔法解説、葉子の秘奥】	99
十話	【八咫・人形思兼主神】	108
十一話	【外州からの侵略】	118
十二話	【竜気蓋世の戦絵巻（上）】	132

一話 【神隠しの招待状（上）】

需要と供給。求める声があるところに、求められたものを与えれば、与える側も与えられる側もハッピーになれるよ、という意味だ。

承認欲求のない例外的なケースはさておき。基本的に漫画家や小説家がいたとして、彼らは読み手がいなければとても辛い思いをする。

苦勞して作り出した作品に、なんらかのリアクションがなければ寂しい思いに駆られるのだ。プロならもつと切実な事情として、稼ぎがなくなりひもじい思いをする羽目になる。

しかし、作家は与える側だが、読み手側も時間と労力、場合によってはお金を割いて作品に目を通すのである。求めていないものはスルーして当然で、それを責められる謂れはない。

読み手側が与えられる側である。しかし、読み手側も求めているものに関わる義理はない。そういう観点で言えば、与える側——作家もまた需要を考え、歩み寄る努力をするべきだ。

俺こと山場次郎^{やまばじろう}太も、素人ながら小説の書き手だ。中学1年生の頃から駄文を書き続け、高校2年生の現在まで継続している。ついでに無料小説投稿サイトに自作を掲載してもいた。

だから書き手側の気持ちは痛いほどよくわかる。なんせ俺の処女作は文章力も、設定も、キャラクター造形も、シナリオも酷い。何が書きたくて何を伝えたいのか、自分でも全然分らないぐらい酷かった。読者からも酷評されて、そして遂には感想を一つも貰えなくなつてしまった。その時の辛さは、当時好きだったアニメの視聴時にも熱が入らなくなつたほどである。

それでも筆を折ることはなかった。いつか誰をも唸らせ、アンチの一人もつかないような名作を生み出してやるという、現実的でない野望に燃えていたからだ。だから需要^{それ}を考え、供給^{執筆}するのは当然だと考えられるようになったのである。

——こう言うと誤解されるのだが、俺は別にプロになりたいと思っ

ているわけではない。単に物語を作るといふ行為が楽しかったから続けているだけだ。物語を考えて外部に出力する行為に没頭していると、とても自分の心が自由になっている気がするのである。

よってどれだけ厳しいことを言われても、俺のメンタルはブレイクしない。メンヘラつてるぐらいなら、俺は作品作りのための知識の蓄積も兼ね、資料や他人の作品を読み漁っているだろう。

そんなこんなで、俺は作者であると同時に、読者にもなっている。そして読者側に回ってこそ見えてくるものもあった。

俺調べによる分析だが、最近は戦記系、歴史系の作品に関する需要が高まってきている。昨今の作品を見渡すに、異世界ファンタジー系や異世界恋愛系が多く、もう溢れんばかりに氾濫し一部の読者層が辟易しているのだ。硬派で本格的な小説をお手軽に読みたい、そんな一見矛盾している需要があるはずだ、と俺は見ている。よってそちらの需要に供給を試みようと思った。

つまり、戦記系。異世界ではなく現実の歴史。とあるサイトでは魔法がないファンタジー系列が溢れているが、俺は敢えてリアルさを追求し、魔法がある歴史の戦記系を書こう。

魔法がないなんて、そんなファンタジーな歴史を想像するのは無理——とまでは言わないにしろ、とんでもなく労力が掛かる。ニュートンやらエジソンやらアインシュタインやら、現実の著名な発明家達は魔法学の権威であったし、魔法を抜きにした文明なんて荒唐無稽過ぎで、説得力を出すのにとっても苦労するだろう。

しかし世間の作者さん達の気持ちも分かる。現代ではすつかり衰退してしまった魔法を、どこまで描けば現実的になるのか判断に困るのだ。歴史には事実として記される大魔法も、現代では「本当にそんなことできるの？」と首を傾げてしまうものなのである。

故に現実の歴史を舞台にした作品を描こうとするなら、魔法学に関して専攻し、広くて深い専門知識を蓄えないといけない。さもなくれば物語の描写にリアリティがなくなってしまうからだ。そんな事、半端な意気込みで出来ることじゃない。魔法学は難解だからである。

例えば人間なら誰しもが持っている魔力だ、魔力は体内を循環する

血の力。魔力とは血液であり、血の純度が高いほど魔力のエネルギー置換効率は高まる。他には歴史、人体解剖学、遺伝学。そうしたのも魔法学に包括されていた。内容が多岐に亘りすぎて、知識に穴がないように修学するのは難しいだろう。六法全書を一言一句違わず丸暗記するより困難と言われていた。

しかも学んだ知識をフルに活用できるわけではなく、あくまで歴史物の作品を描くにあたっての前提知識にしかない。知識を出し過ぎては冗長だし、出さな過ぎても薄っぺらくなるのだ。なまじ学問としては現代の方が昔より進んでいるから匙加減も難しい。昔の人が知ってるはずがない知識を、物語の登場人物に語らせようものなら、途端に話が破綻してしまう危険性があった。

何より一番大きな要素として、現代人が失ったものを過去の人達は持っている。現代の人達が持っていないものを、文献を紐解いて理解しようとしても、本当に理解できているか判断がつかない。正解がないのだ。そんな無理難題に手を付ける人は本当に少なかった。

では、その失ったものとは何か。答えは簡単だ。

「【三種の人器】の内の2つ、【八咫】と【草薙】です」

黒板の前に立ち、初老の男性教諭が言った。

「みなさんにとっても既知でしょうが、人間には生まれながらにして備わっている器官があります。古の時代に神様が人間に授けたと言われる三種の人器、【勾玉】【八咫】【草薙】です。【勾玉】はみなさんの体のどこかに、くつきり痣のように浮かび上がっているでしょう？

【草薙】はさておくとしても、【勾玉】と【八咫】だけはどんな人間にも必ず備わっているものでした。では【八咫】と【勾玉】とは一体なんなのかな？ ……ええと、山場くん？」

眼鏡の奥に見える目を細め、教諭が指名してくる。教室の一番奥、窓際の最後尾の席に座っていた俺は、椅子から立ち上がって滑らかに答えた。

「【勾玉】は魔力の集積器官。そして【八咫】とは昔の人間が備えてい

た、心を映す鏡のことです。自らの心の形、あるいは性質を自分自身で確かめられるもの。それだけではなく【八咫】と【勾玉】は密接な繋がりがあり、【八咫】が映していたという心の形——多くの場合人間以外の動物だったとされるものが、【勾玉】を通して魔力の働きを大きく高めていたとされます」

「その通り。山場くん、着席してもいいですよ」

満足げな教諭に促されて着席する。隣席の女子が小声で「詳しいね」と褒めてくるのに曖昧な笑顔を返した。もっと愛想を見せてもいいかもしれないが、この教諭は口うるさいので私語は慎む。

三種の人器。人に宿った魔法の力。世界各国で名称こそ異なるものの、人種や国の境なく同様のものはある。西洋でメジャーな名称は無駄に長いので、恐らく今回の講義では触れず、もう少し後の講義で言及されるだろう。テストにも出るはずだ。

俺の友人たちは俺が魔法学オタクだと知っている。そのためテスト対策も兼ねて色々と訊いてくることは容易に予測できた。後で纏めて教えるのは面倒なため、今の内に要点を押さえたノートを作っておこう。自分の復習にも役に立つから迷惑ではないが、これを餌に昼飯ぐらいは奢ってもらおうつもりだ。持ちつ持たれつこそ人間関係の基本だろう、遠慮なんてしてやらない。

「山場くんに答えてもらった通り、【八咫】は【勾玉】を通して魔力の働きを高めていました。しかし今から500年以上昔の西暦1500年代を境に、どうしてか【八咫】は人間の体に現れなくなったといえます。諸説ありますが原因は不明で、結果として魔力の働きは弱まり魔法は衰退してしまったとされていますね」

それにしても、退屈な講義だ。とつくの昔に履修した内容を講義で聞かされていると、眠たくなって仕方がない。教諭はそんな俺の眠そうな顔に気づいているのだろう、ジツとこちらを見ていた。

こっち見んな、見てなくても寝ないっての。そう思いながら目を合わせてしまうと、教諭は再び質問を投げかけてくる。おーい、眠そうにしてる奴は他にもいるぞ。なんで俺ばかり見てんだよ。

「そのため現代の魔法は市販の飲み水やライター、扇風機の代わりぐ

らいにしかなくなり、「草薙」を発現する人間が現れなくなったばかりか、人間の寿命も半分以下に落ち込みました。——山場くん、座ったままで結構。現代人と1500年以前の人の平均寿命は幾つでしょう？」

「現代人が74歳前後、1500年以前の人間は150歳前後です」「素晴らしい、山場くんはきちんと予習をしてきたみたいですね。正解です。ちなみに1500年以前の人類を指して、現在では「魔人」と称しています。テストに出るので押さえしておくように」

につこりと微笑んだ教諭の反応に、俺はまた曖昧な笑みを返す。

【八咫】が人間から失われる前の時代。戦国時代中期から末期を舞台にした物語群【戦国史演義】の大ファンとしては、魔法学オタクでなくてもこれぐらい当たり前に知っていないと恥ずかしいレベルだ。戦国史オタクなら魔法学の初歩的な概要ぐらい知っているものである。

俺は真面目に講義を聞いているふりをしながら、それとなく我が家へ思いを馳せた。正確には我が家にある俺の部屋の本棚に、だ。そこには大衆向けの娯楽として敷衍ふえんされた通俗小説【戦国史演義】の元となった、【キョウト・シガ時代】の史書があった。

最近の俺は演義から正史に転向して沼ハマッている。

演義では不遇だったり、影が薄かったりする人物が、実は誰からも警戒される名将だった……とか。そんな感じの歴史の真実にギャツプを感じて魅了されてしまったのだ。

特に俺が魅力を感じたのは、演義だと清廉な理想家で綺麗事ばかり言って、主人公みたいに扱われていた偉人だ。俺は演義でのその英雄が好きではなかったが、史実に記された姿は冷酷な戦術家で、戦国時代最強の指揮官であったというところに惹きつけられた。

名前は、せいしやういんくぼり星章院賦。

当時の王室の分家筋、星章院の家名を自称し、王室復興の大義を掲げて旗揚げした女英雄である。もしあの裏切りがなければ天下人になっていたかもしれないという、英雄的な悲劇性と歴史のイフを想起させる様に、俺は奥深いロマンを感じてしまっている。

他にもつい100年前まで——300年続いた北条幕府の創始者、
北条収奪^{ほうしやうせしめ}。星章院と北条を相手に渡り合い、北条の最後の大敵とし
て立ち塞がった織豊家信^{しよくほういえのぶ}など、綺羅星の如く英雄豪傑が割拠した
【キョウト・シガ時代】は根強い人気があった。

（演義の方はもう丸暗記したし、正史の方も暗記しとかなきゃなんだよな。でない作品の仕上がりが甘くなる……後2回ぐらい目を通しとかないな。魔法学書の丸暗記に比べたら楽なものだ）

何を隠そうこの俺は、歴史好きが高じて小説を書き始めた身だ。無料小説投稿サイトに投稿予定の新作、【神将戦記】の主人公は星章院賦である。中学1年生の頃から駄文駄作を積み上げてきた今、そこそこ見れるレベルの文章は書けるようになったと自負していた。

これまでの黒歴史作品で散々読者から「駄文過ぎて読むのが苦痛」と叩かれ続けたが、これからはそんなことは言わせない。設定も文章力も煮詰め、渾身の力作を生み出す所存だ。そのためにも戦国時代のことと知らないことがあってはならない。大好きな戦国時代を題材にするということもあり、俺のやる気は未だかつてないほど、天井知らずに高まっている。

（神将戦記の主人公は星章院で決まりなんだけど……どうすっかなあ。普通に書いたんじや史実通りの結末にしかないから、どこかしかで歴史の歯車が狂う要素を入れなきゃなんだが）

正史での星章院賦は北条収奪を後一步のところまで追い詰め、天下人の座に最も早く近づいた。しかし北条家と違って、後世の視点だと星章院家には明確な弱点がある。

星章院家には軍師がいなかったのだ。いや、軍師というより参謀と
言うべきか？ともかく星章院家には名だたる勇将が数多く従っていたが、星章院が頼れる参謀がいなかった故に、軍神とも言われた稀代の名将は北条家に敗れてしまうのである。

だから星章院に勝たせようとするなら、軍神の賦に匹敵する知恵者を他に一人、あるいは複数人加わらせてしまえばいい。それだけで歴史はその姿を変えてしまうという確信がある。というか最後の局面を乗り切るだけで、星章院は大きく躍進してしまうはずだ。

(そこが悩みどころなんだよなあ……北条と織豊のどっちか、もしくは別のところから引き抜くのは違う気がする。オリキャラを入れたりしても最後には影が薄くなりそうだし。どうするよ、俺)

変に架空人物オリキャラは入れたくないが、かといって史上の人物では無理がある。歴史に名を残すレベルの知恵者は軒並み北条か織豊に仕え重用されているのだ。裏切る要素もない。

ヤマト全土で大規模な一揆が発生したのを契機に旗揚げし、各地を転戦して群雄割拠の魔境を生き抜いて、天下まで後一步というところで斃れた英雄。その覇業を助けられるだけの逸材は、そう簡単に現れるものでもないだろう。手っ取り早いのは架空人物をでっち上げることだが、可能ならそれは避けたいというのが俺の考えだった。

だってオリジナルキャラなんて、どう足掻いてもメアリー・スーにしかないそうにないのだ。

「——今日はここまでにしましょう。明日からはもつと巻いて進行していくので、付いて来れるか不安な者は予習と復習を欠かさないと」

物思いに耽っていたら、どうやら講義が終わったらしい。授業の終了に伴って、学級委員長が号令をかける。起立、気をつけ、礼、と。「ありがとうございますでした」の唱和を受け教諭が退室した。

途端喧騒に包まれる教室から、俺はさっさと出ていく。トイレに行きたかったのだ。

最寄りのトイレに向かい、用を足す。手を洗うとハンカチで水気を拭いた。その間もずっと俺の頭には新作のプロットがある。だいたいのシナリオの流れは決まっているのだが、どうしても星章院に相応しい参謀を思いつけない。その配役にはここ一週間ずっと悩んでいた。

「……ん？」

ふと、掌に痺れを感じて声を漏らす。

自分の手を見る。右掌の真ん中に、ビー玉サイズの痣があった。それが俺の【勾玉】だ。

「んー？」

【勾玉】は俺の魔力量を示している。俺に限らず全ての人は、魔力を消費するにつれて【勾玉】の色を黒く変色させていくのだ。真っ黒になったら魔力切れ、つまり死んだ状態を意味する。

【勾玉】の基本色は男が青、女が赤だ。俺の【勾玉】は真っ青で、つまり魔力が満タンの証である。当たり前だ、俺は魔法を使っていない。魔法を使っていないのに魔力を消費する道理はなかった。

というか俺は魔法なんて何も覚えちゃいない。だって現代人の魔力量はカスだ、両手で汲み取れる程度の水を出したり、ライターの火ぐらいの火力しか出せない魔法なんてなんの役にも立たない。そんな役立たずな魔法を苦勞して習得する気にはなれなかったのだ。

魔力は魔法を使うか、体のどこかから出血でもしてない限り減る事はない。——そのはずなのに。俺の【勾玉】は、次第に黒ずんできていた。

「なんだ、これ……」

思わず呟く。使っていないはずの魔力が消費されていく。掌を注視したまま教室に戻りながら、俺はだんだん体がダルくなっていくのを感じていた。

なにか、まずい。そんな気がして、教室の戸を開いて級友に声を掛けようとする。自分の身に起こっている事態を説明して、保健室まで付いてきてもらおうとしたのだ。

だが、それは叶わなかった。俺がインキヤのボツチで級友の誰にも声を掛けられなかった、というわけではない。理由はもっと簡単で、しかし同時に全く以て理解不能な現象が原因だった。

戸を開いたら、そこには誰もいなかったのだ。

「……は？」

教室が無人だったのではない。

むしろ、教室が無かった。

人も、物も、見知ったものが何もない。

あったのは、見知らぬ光景だ。

「いや……はっ？ ……へっ？」

戸を開くと、その先にあったのは箱木屋住宅である。

筵の屋根と土の壁、見るからに近代以前の住まいだ。

時代錯誤云々以前に、こんなものが学校の敷地内にある方がおかしい。

眩しさを感じて、咄嗟に上を見る。

そこに天井はなかった。代わりにあったのは青空で、白い雲が浮かび陽を隠している。校内にいたはずの俺はいつの間にか外に出てしまっていたらしい、混乱しつつ来た道を振り向いて戻ろうとした。

すると、俺が歩いてきた通路が霞のように消えていくではないか。啞然とする俺の目の前で、廊下全てが消えてなくなる。まるで一枚の紙に描かれた景色へ、消しゴムを押し付けたかのように。

残ったのは、外にポツンと立ちすくむ俺だけ。

「……………」

人間、驚き過ぎると言葉を失くしてしまうものらしい。俺は絶句してしまっていた。呆然としたまま、のろのろと辺りを見渡した俺の目に、大きな樹木が飛び込んでくる。

箱木屋住宅に見える古民家。その庭先に、樹齢1000歳を超えていそうな大樹があった。幹周りも20メートルを上回っているだろう。まるで古民家を日差しから守る日傘のようである。

その大樹には見覚えがあった。俺が通っている私立高校の校庭に立っているイチヨウの木だ。日ノ本の巨樹ランキング第3位に位置する、うちの学校の象徴的な存在である。

それが光っている。きらきらと黄金の光の粒子を発して、次第に光が消えていっていた。

「—————」

数秒、その光に魅入られる。だが光が収まるとハッと我に返った。

なんで俺は外にいるんだ？　まるで訳が分からなかった。混乱したまま、しかしこのまま何もしないでいるのもいけない気がして、とにかく人を探そうと思った。

現状が全く理解できない。人と会って、話をして、現状を把握し学校に戻ろう。——愚かにも現実逃避気味にそんなことを考えた時だ。古民家の方から、声を掛けられた。

「やあ、私の家の前に突っ立って、何をしているんだ？」

振り返ると、そこには一人の少女がいた。

魔力量がカスになった現代人には見られなくなった、桃色の髪（桃色：桃色の髪）の持ち主である。

異様な髪色は、魔力量が豊富な中世までの人間に見られる特徴である。浅葱色の小袖を纏い、草鞋を履いた色白の少女が、紺碧の瞳を怪訝そうに眇めて俺を見ていた。

俺は呆気にとられたまま、少女の桃髪と、その顔を見つめる。

少女もまた俺からのレスポンスを待って、俺を見ている。

——それが、出会いだった。

後に王室の分家筋、星章院の家名を自称する戦国三英傑の一人。この時はまだ【九針くはり】とだけ名乗っていた、伝説的な女英雄と。歴史と魔法学オタクである俺、山場次郎太の。

実に不可解極まる邂逅だったのである。

二話 【神隠しの招待状（下）】

黄金比という言葉がある。

人が見た時に最も美しいと感じる比率を指した言葉だ。

しかし人間の造形は左右非対称のいびつなもので、そのルールから抜け出せはしない。それこそ淡麗な容姿を商売に活かすアイドルだって、完璧な黄金比を体現できていないのだ。

だが目の前の少女は見事に整った左右対称の容貌をしている。切れ長の双眸と、伝説の魔眼の如く魔力が漲る紺碧の瞳。涼やかな鼻梁と、小さな鼻孔。果物の実のようにぷるんとした唇、凛々しい眉。定められた黄金比を形成し、完全な左右対称の造形を持った少女は、まるで人間でありながら人間ではない、人間以上の超常生物のような存在感を持っていた。

まるで妖精のようであり、妖刀のようであり、神仏の化身のようである。

妖精の如く美しく、見る者を魅入らせる妖刀の魔性。妖しき化生であるのに拝まれる様が似合うであろう神聖さ。怪傑——と、印象を一言に纏めるとそうなるだろう。

桃色という異色の髪色をしていながら、全く不自然さを感じない。あまりにも美々しい。まだ幼さを残していながら、傾国の美女と形容する他にない。美しすぎて、却って邪念を抱けない。

美々しく、可憐で、魔的である。時の帝を魅了した輝夜姫も斯くやと言えよう。まさしく現実に存在し得ない、人知を超えた美貌を持った人間だ。いつまでも見ていられるほどに綺麗過ぎる——だが時を忘れて見惚れている場合ではなかった。

少女の目が怖いぐらい真剣だったおかげで、自身の置かれた状況を思い出した俺はなんとか喋り出す。少女はこの古民家を、自分の家だと言ったのだ。自分の家の前で突っ立って、何をしているのかと問い掛けてきた。この問いに答えないといけない。何より自分のために。

「……俺は、山場次郎太っていうんだけど……きみは？」

「九針くばりだ。漢数字の九に、縫い針の針と書いて九針と書く」

「そっか……で、九針さん？　って呼んでいいんだよな。九針さんは……」

「——待て」

冷静さは保てているつもりだった。しかし自分で思っているほど冷静ではなかったらしい。人越的な美貌と対面し、我知らず気圧されていたのかもしれない。気の逸るまま名乗り質問しようとする、九針と名乗った少女が待ったを掛けてきた。

口を噤む。今まで出会った事がない、巨大な存在感へ完全に吞まれていた。声まで綺麗で、覇気に満ち溢れているだなんて……まるで自身より数倍も背丈のある巨人を見上げている心地だ。

無論、九針はそんな馬鹿アカくはない。現実の彼女は少し俺より背が低かった。

俺の身長は179cmで、九針は175cmほどだろうか？　東洋の女性としてはかなり高身長の種類に入る。そんな長身の少女、九針は無造作に俺へ歩み寄ってきた。

堪らずたじろぐも、彼女は構わず手を伸ばして俺の着ている服——高校の制服に触れる。

「……」

「あ、あの？　九針……さん？　どうか……したんですか？」

真剣な眼差しで制服を観察してくる少女に、思わず敬語で話しかける。

すると九針はなんらかの確信を得たかのように相好を崩した。

「触ったことのない上等な生地だ。これはなんだ？」

「高校の制服だけど……」

「コウコウ？　……生地は？」

「……たしか、ウール30%混の奴だった気がする、かな……？　親と買いに行った時、店員がそんな感じのことを言っていたような……」

「うる30ぱーせんと……？　なるほど。それと、お前の名前をもう一度聞こう」

「山場次郎太、です」

「苗字があるのか。見た所、貴族や武士ではなさそうなものにな」
「……は？」

貴族？ それに武士だつて？ 何を言ってるんだこの子は。

俺が呆気に取られると、九針は肩を竦めて俺の手を握った。ひんやりとしているのに、微かに暖かく。それでいて少女らしい華奢さと、すらりとした手の感触にドギマギさせられてしまう。

少女はそんな俺の様子なんて歯牙にも掛けず、俺の手を引いて古民家の方に連れて行つた。

「え、ちょ……」なんて意味のない声を漏らしてしまうも、抵抗はできない。女の子相手に乱暴は出来ない、なんて軟な思想があるわけではない。単純に九針の力が俺より遥かに強かったのだ。

（ど、どこからこんなパワー出してんだよ……！ ゴリラかこの子は！）

戦慄する。

そうして古民家の中に連れ込まれると、囲炉裏のある板張りの床に上がるよう促された。抵抗は無意味そうだ。されるがまま、言われるがまま靴を脱いで上がり正座する。そんな俺を尻目に少女は顔を外に出して周囲を見渡し、それから戸を閉めて俺の対面に座った。

囲炉裏に付属している道具——円形の枠を形成する、3本の足が伸びた鉄製の台『五徳』の上に金輪があり、その上にヤカンがある。九針は傍にあつた無骨な茶碗を取るとヤカンから水を注いだ。

所作の一件に品があり、そして美しい。目が眩みそうである。

「白湯だ。飲むといい」

「ど、どうも……」

白湯の注がれた茶碗を渡され、つい受け取ってしまう。

無理やり連れ込んだとはいえ、一応は客人である相手に出したのが、お茶ですらないただの水。違和感を覚えつつ一口飲んで口を潤すと、九針は自然体のまま口火を切った。

「次郎太と呼んでも？」

「え、あ……ええ？ い、いきなり名前呼びつすか。い、いいけど……」

「では次郎太。改めて聞こう、お前は何者だ？ ああ、その前に身分も聞いておこうか。お偉いさんだったら頭を下げて無礼を詫びないといけないからな、はつきりさせておきたい」

「……一般市民ですよ。身分なんて、そんなのがなんだってんです」
「はは。そんなのとききたか」

何がおかしいのか、くすりと笑みを溢した九針の様子を見て、俺はようやく調子を取り戻す。

深呼吸をして、揺らぎつばなしだった心を落ち着かせる。現状を把握するために話をしようと思いを決した。まずは九針の質問に答えよう、その後にこちらからも質問させてもらう。

「スウー……フウー……俺が誰かって言われても、ただの山場次郎太としか答えられないよ。歳は17歳で高校2年生だ。俺みたいな奴なんてどこにでもいるんじゃないかな？」

「どこにでもいる？」
「……」

「没個性を気取るには無理があるぞ、次郎太。だが仕方ないのかもな、お前は特別だ。大体そちらの状況は掴めたよ、お前が何も理解していないなら色々と教えてやれるかもしれない」

事情？ なんのことだ。まさか俺の現状を理解してくれたのだからか？

だとしたら、話を聞かないといけない。逸りそうになる気持ちを抑え、努めて冷静に問う。

「……俺が、何を理解してないって？」

九針はニヤリと骨太な笑みを浮かべる。それは飢えたドラゴンのようにギラついた、野心溢れるエネルギーな笑みだ。気力の総量まで常人離れしている、覇気としか形容できない貌——俺を丸呑みしようとしているかのように、ドラゴンが大きな口を開けている。そんな印象を受けて身体が強張るも、九針の声はいたって優しくだった。

「何もかもだ。そうだな……話をする前に一つ、面白い言い伝えを聞かせてやるとしよう。私の一族に口伝で伝わっている話だ」

「……………」

「竜の血より分化せし血統、天覆う日傘の如きイチョウの木の下、巨樹が金色に光りし時に果ての者と邂逅せん。その者、叡智誇る者なり。星の巡る先にて現れし時、天翔る竜虎の欲する財とならん。巡り悪く現れぬなら、竜虎、道半ばに果てるが天命と知れ」

「……それは？」

「竜の血より分化せし血統とは、我が一族のことだ。竜とは王の暗喩。つまりは王の分家を意味している。天覆う、というのは見たら分かるだろう？ 家の外にある木のことだな。そして果ての者がお前だろう。私が竜虎ということでもある。これはな……次郎太、私の先祖が京から離れる切っ掛けとなった、高名な宮廷魔法師だった阿部晴明の予言だよ」

阿部晴明^{あべのせいめい}。言わずと知れた、1000年以上昔の大魔法使い。その予言。

俺は深呼吸をした。動悸が激しくなってきたのだ。歴史好きとして学んだ知識がある。予言に関しては知らないが、それ以外——例えばあのイチョウの巨樹の件に関しては知っていた。

好きな英雄の故郷が俺の地元なのだ。その英雄とは、時代を代表する英傑の1人に数えられるまでになった、ヤマト史を代表する10人の名将、軍廟十哲^{ぐんびょうじゅうてつ}に加えられた人物である。

それが、星章院賦。

そう、賦^{くぼり}なのだ。

九針^{くばり}と名乗ったこの少女。イチョウの巨樹。それに、俺が目にした異常現象。

パチリ、パチリ、と。一つ一つのピースが頭の中で嵌っていく感覚に、俺は吐きそうになっていた。段々と事の真相、現状に関して悟ってきたから。何よりの説得力は、目の前の少女自身である。

魔力だ。

目の前の少女からは、現代人には有り得ないほど膨大な魔力を感じる。

現代人は総じて魔力量がカスだ。怪我をして出血した際に、傷口から微量の魔力の気配を感じられる程度である。だというのに九針か

らは、現代人と比較し桁外れの魔力の気配が発されていた。

生唾を飲み込む。まさか、という疑惑を飲み込んだ。手に持ったままの茶碗を床に置き、俺はまっすぐに九針の目を見据える。

「教えてくれ、九針さん。俺が……俺は何を理解してないんだ？」

「呼び捨てでいい。お前が17歳なら私と同年だからな」

「……わかった、九針。俺は高校2年生の、普通の男子高校生だ。四限目の授業……2年生になってから初の、魔法学の講義が終わった後、トイレに行って教室に戻つてるところだった。教室に入った途端、急に俺はこの家の外に立たされていたんだよ。いきなり過ぎて、正直混乱してる。現状を正しく把握したい。教えられることがあるなら、是非教えてくれ。頼む」

言つて、頭を下げる。床を見下ろす形になった俺に、九針は楽しげに数秒の沈黙を挟んだ。

頭頂部に視線を感じる。それでも何も言わず頭を下げ続けた。

やがて九針の音がする。彼女の声は、やはり笑っていた。

実に嬉しそうに。感慨深そうでもある。

「おおよそ500年。待ち人来たる、か」

「……………」

「話している言葉は同じ、しかし着ている服の質が違う。身分を気にしていない口ぶり、聞いたことのない言葉……うーる30ぱーせんと、コウコウセイとかいうのだ。……いいか次郎太。お前が私の家の前に現れた時にな、あの巨樹は金色に輝いていた。同時に途方もない魔力も発し、それを感じた私が何事が起きたのか確かめに出たら次郎太がいた。それが何を意味するか分かるか？」

「もったいぶらないでくれよ。分かんないから聞いてるんだ」

「そうか？ なら率直に言おう。私はお前が、天上界の者ではないかと睨んでいる。次郎太は私のいる次元に降臨したんだ」

「は……？ て、天上界……？」

いきなりである。とんでもなくスピリチュアルな超解釈を受けて、俺は頭を上げてしまった。自信満々に持論を語る少女の顔は、俗に言うドヤ顔だった。

「天上界では語弊があるか？ まあどこでもいい。少なくとも地続きの場ではなからうさ。知られざる神木たるイチョウの巨樹がどんな働きをしたにせよ、結果としてお前は現れたんだからな」

「……………」

「端的に、私から見たお前は、お前のいた所とは異なる場、つまりお前を待ち続けていた私のいる所へ現れた。それだけだ。尤も私の主観もつとによる答えに過ぎないがな。次郎太の主観から見える結論はまた別かもしれない。どうだ、納得のいく答えは出せそうか？」

「……………」

水を向けられた俺は沈黙し考えを纏める。

唐突に発生した異常現象。トイレから校舎2階の教室に戻ったと思つたら、外に出ていた。

校舎は影も形もなくなり、代わりに古民家が現れ見ず知らずの少女がいた。

此処にいるのは俺だけで級友達の姿はない。人の魔力そのものが減少した現代、人間一人を全く別の場所に転移させる魔法は使用不能だ。少なくとも個人では。魔法学を下敷きに、魔法の代わりに発展した科学技術でも同様だろう。だとしたら何が起こった？

改めて九針を見る。

人語を絶する美しさだ。あんまりにも綺麗過ぎて、同じ人間とは思えない。不気味であり、神聖さすらある。何より染色しているわけではないなら、異色の髪色は莫大な魔力量に裏付けされるもの。現代人には有り難みのなくなつた魔法だが、もし彼女が魔法を使えばそこそ中世以前の——神話めいた奇跡を起こせるかもしれない。だがこの少女が俺をどうこうしたとも考え辛かった。

もし俺の想像通りのことをしたとするなら、九針が平然とし過ぎている。ポーカーフェイス云々の話ではなく、魔力が全く減っていない。その埒外の魔力で魔法を行使していないのだ。

証拠は目に見えるところにある。九針の着ている浅葱色の小袖はゆったりしていて、鎖骨の真ん中あたりに【勾玉】があるのが見えているのだ。その大きさは親指の先ほどで薄紅色である。色は黒ずん

でない。人間である以上、魔力を使えば【勾玉】の色は黒ずむ。そして体調も悪くなる。顔色のいい九針が何かをしたと考えるのは現実的ではない。

「幾つか、聞きたいことがある。九針の知る限りでいいから答えてくれ」

「いいだろう」

喉がカラカラに乾いている。茶碗を持って、一口白湯を飲んだ。

「今——西暦何年だ？」

「せいれき……？」

「暦のことだよ」

「それなら天秀^{てんしゅう}130年だ」

「——」

天秀130年。それは、戦国時代中期の暦だ。

西暦に換算すると、西暦1550であった。

もしかしたらと、荒唐無稽な予感があった。けどまさか本当にその予感が当たっているとは思ってもみなかった。俺は数瞬の間を空け、顔を青褪めさせたまま矢継ぎ早に問いを投げる。

「朝廷はどこにある？」

「京だ」

「京。地方名は？」

「地方名？ 西ヤマトの中核となるキンキ地方で、京はキョウトだ」

「ここはどこ？」

「トウホク地方のアオモリ県キタカネガザワだな」

「転移魔法……とかを仮に使えたとして。時間とか世界を跨いで、人間一人を連れてきたりとかできる？」

「無理だ。それは人の業ではない。それこそ彼の阿部晴明でも不可能だろうな。仮に転移魔法を私が使えたとしても、精々隣町まで行けるかどうかといったところだ」

「鬼柳……いや、千景^{ちかげ}って人のことは知ってる？」

「鬼柳とやらは知らん。だが千景は私の義妹だよ」

「……最後に。きみってもしかして、星章院？」

「ふ……ふふ。そうだ」

最後の質問を受け、九針は実に蠱惑的な、ゾツとするほど魔的な笑みを頬に刻んだ。

今はまだ星章院と名乗っていない。誰にも言っていないのかもしれない。なのにその名を出された。それがなぜか嬉しいのだろう。

俺は茶碗を置き、細い息を吐きながら天を仰ぐ。顔を片手で覆い、愕然としてしまいそうな心をなんとか落ち着かせようとした。

マジかと小声で呟く。魔法のない異世界ファンタジーと違い、現実には魔法がある。けど、だからって時間逆行タイムリターンなんていう、奇跡の領域の災害「神隠し」を体験するとは夢にも思わなかった。

一応ドツキリの可能性も考えてみたが、それはない。なんで一般市民にドツキリするためだけにこんな大掛かりな真似をする。有り得ない。そもそもカメラとかそういうのも見当たらない。

ことここに至れば、流石に認めざるを得なかった。

——どうやら俺は、時代を逆行してしまっただけらしい。

三話 【鬼眼の九針】

時間遡行。世界線移動。あるいはもつと別の何か。どれでもいい。それっぽい現象の名前は、総括して「神隠し」と魔法学上で定義されている。現代社会で魔法災害と言われているものだ。

生きている人間なら、微量であつても魔力を有する。そして魔力とは血であり、出血に伴い外部へ流出した魔力は霧散することなく、世界中に沈殿していく。個々人で性質の異なる魔力が、外部で無作為に干渉し合うことで、ふとした拍子に人や物、動物などが忽然と姿を消してしまうことがあるのだ。なんの前触れもなくその世界から消えてなくなってしまうのである。

被災地に残されるのは、独特な魔力の残滓だけ。

だからその災害を指して人は神隠しというのだ。

しかし神隠しの被害に遭う確率は、それこそ宝くじで一等賞を10回連続で引くぐらいである。まさか自分が神隠しに遭うだなんて誰も考えない。こんなの青天の霹靂もいいところだろう。

だが——過去神隠しの被害に遭った人の記録はある。それこそ片手で数えられる程度だが、実際に記録があるのだ。

神隠し被害に遭ったと認定された内の2人は二度と帰ってくることはなく、残り2つの事例だと神隠しに被災した時から、それぞれ約10年後と100年後に帰ってきたことが確認されていた。

つまり時間遡行は決して、魔法学上有り得なくはないということ。被災確率は極めて低いが、なくはない。信じられないことに、俺はその神隠しという魔法災害に被災してしまつたらしい。

で。
それが分かつたからって、これからの俺の行動指針になつたりはしない。

「はー……」

呆けたように天井を見上げる。頭では理解しても、心の方が追いついていない。しかし、抱いて然るべきだろう焦りや、元の時代に帰らないといけないといった思いは微塵も湧いてこなかった。

ドツキリだとか、小説のネタに使えとか、現実逃避気味なことを考え浮足立っていないとは言わない。だがそれは抜きにしても、元の時代への未練に執着する気になれないのだ。

なんでだろう。首を傾げて思案しかけて、やめた。

昔さいしょからそうだったからだ。決まったこときまや終わったことわに対して、俺は未練とか不満とか、そういうものを感じたことはない。多分、そういう性分なのだろう。

神隠しは人の力が及ばない災害だ。元の時代に帰れる保証はどこにもない。ならずつぱり諦めて、今ある環境に適応するべく努力した方が建設的だった。

良く言えば前向き、悪く言えば冷徹つめたいとは過去、誰に言われたんだっけ。まあ、それはいい。可能性は皆無だろうが、一応現状を自分の目で確認するべきだ。一般に知られていないとんでもない超科学や、現代人離れた魔力の持ち主が行使した魔法で、俺を錯乱させているかもしれない。普通に考えて有り得ないが、自分で確認することで踏ん切りもつく。

「九針——いや、えっと……様付けした方がいいですか?」

本当に今が天秀130年——ヤマト王室の皇王、正堂院せいどういん靈禪れいぜんが王位を継いでから130年経った時代なら身分制度は厳しい。俺が時間遊行の神隠しに遭ったと想定した場合、郷に入っては郷に従って畏まる必要があるはずだ。

となると王室の傍系ぶんけを自称する九針には、相応の態度を取っていた方がいい。正史で王室ゆかりの者だという証拠は出ていないが、頼れる人間がない現状は下手に出た方が良かった。

ぶつちやけ、目の前の少女が真実、星章院賦だとしたら、俺は大好きな英雄本人と対面していることになる。けど流石に今は興奮なんてしていないし、戸惑いや諦念の方が強かった。

そんな俺からの確認に、九針は肩を竦めて応じる。

「いや、今は必要ない。敬語もだ」

「……今は？」

「私が星章院家の人間だという、身分を証明する品はある。だが私はまだ、ただの『九針』でいた方が都合が良い。いずれ身を立てるまで、変に畏まる必要はないよ」

「分かった。けど俺は未来のお殿様に付いていくから、一応俺が下で九針が上みたいに思つとく」

「……ふうん？」

身分を証明する品がある。そこに内心首を傾げたが、歴史きろくと実際しんじつの齟齬は割とありふれた話だ。特に気にすることはなく、今後のスタンスに関して一言伝えておいた。

魔法災害の時間かみかくし遊行に被災した以上、俺が取るべき行動として最優先にするべきなのは、身の安全と庇護者の確保だ。その両方を一挙に済ませられるなら悩む余地はない。

そんな計算をしていると、九針が感情を窺わせない瞳で見詰めてきた。

「笑わないんだな」

「……なにを？」

「私が星章院であること、いずれ身を立てると言ったことをだ。普通は誇大妄想の類いにしか聞こえないと思うのだが」

探るような目である。認識の相違を悟り、心の中でギクリとした。落ち着け、と自分に言い聞かせる。結末を知っている側の視点でいたのが失態の元だ。当事者であれば未来のことなんて分からない。九針の台詞を受けて困惑すらせず、当たり前前の事として受け止めるのは不自然である。その点を留意して、慎重に返答を紡いだ。

「見ず知らずの他人に、星章院かって聞かれてそうですって答えるよ
うな馬鹿なの、きみ」

「おっと……辛辣だ」

「辛辣にもなるよ。きみがこんなことで嘘を吐く人には見えなかったから信じたんだ。星章院はこの国の王族、それを偽るなんて真似をしたらきみの命はない。まだ信頼関係のない他人の俺に、そんな重すぎ

る名前を冗談で使うような馬鹿なら、俺はここから出ていくよ」

下手な嘘は吐かない。けど情報も出さない。すると九針はますます面白そうに目を細め、口元を緩めた。笑っているらしい。笑ったまま、俺の顔を覗き込んできた。

乗り切れ、と自分に念じる。

星章院賦の人生は知っている。波乱に満ちた英雄の人生だ。である以上、彼女に付き従う選択は過酷なものとなるだろうが、ひとまずは死ななくて済む。なんの伝手も、収入源や雨風を凌ぐ家のあてもないのだから、目先に優良物件があるなら飛びつくしかない。

むしろ英雄である九針は、望み得る限り最高の物件だ。何せ英雄になる未来が確定している。逆説的に英雄になるまでは死なないということ。そして星章院賦といえど、古参の家臣であれば例え無能でも養うぐらいはしてくれる、身内への甘さが史書にて言及されていた。

もしかしたら予期していないバタフライエフェクトで、九針が戦死してしまう可能性も無きにしも非ずだが、今の段階から気にしていても仕方がない。

少なくとも九針に従っているだけで、彼女の勢力が滅亡するまで死のリスクが遠のくのは確かはずだ。過酷な戦場を乗り越える必要があるかも知だが、俺はその未来より誰も頼れない現状を打破することを選んだ。未来の危険より目先の安全の方が優先度は高い。

「——理知的な目だ。次郎太の様子を見るに、私のもとに現れたのは予期していない事態だったのだろう。別の所に行く予定だったようにも見えない。まるで不慮の事故に見舞われたかのようだ」

「……それが？」

「であるのに、貴様は冷静に自らの置かれた状況を、取り乱すことなく把握して、それを打開するための後ろ盾として私に寄り寄ることを決めた。しかも瞬時にだ。簡単に出来ることじゃないぞ」

『お前』呼ばわりから『貴様』呼ばわりに変化した。現代の価値観だと『貴様』と呼ぶのは響きが悪く聞こえるが、昔の価値観だとむしろ『貴様』の方が丁寧で敬意のある第二人称である。

そのことを知っているので、俺は九針に評価されているのだと悟っ

た。素直に喜ぶべきだ。

「冷静さと胆力はある、頭の回転も早そうだ。いいだろう、貴様を我が臣下に加える。次郎太は私にとって三人目の家臣だ」

「そりゃ、どうも」

褒められて、頭を搔く仕草の裏に思惑を隠す。

九針が星章院家の者だと知っていた件に関しては、特に突っ込んでくる気がないらしい。パツと思いつく理由は殆どなく、思い当たる中で有力な説は、九針が俺を誤解しているというもの。

客観的に見て俺は突然現れた不審人物でしかないが、九針の視点だと過去に出現を予言されていた存在だ。秘めていた名を言い当てたのは、俺の特異な能力か何かだと思っただのかもしれない。

そうした誤解があるなら、利用しない手はない。有力者の庇護下に入れるならなんでも利用すべきだ。九針が俺のことを誤解しているなら、俺は歴史知識を武器に誤解を解かないよう立ち回り、彼女の中で俺という存在の価値を確立するのがベストだろう。

騙しているようで気が引けるが、かといってバカ正直に全てを話すのは下策だ。九針の人となりや史書にある通りのものとは限らないため、慎重に九針という人間性を探っていくのが当然の判断。

仮に俺が全部カミングアウトした場合、俺の利用価値は途端にゼロになる。歴史知識を全て吐いてしまえば、後は九針だけで上手くやれるだろう。そうなると、歴史知識を持つ俺は九針にとって邪魔者でしかなくなる。他の奴に話される前に、口封じとして殺すはずだ。

歴史知識を自分だけのアドバンテージとして独占できるなら、そうするのがベストだからである。故に俺は絶対に自分が未来人であり、これからの出来事を知っていることを悟られてはいけない。

さつきは確認のため喋り過ぎた気もするが、まだ誤魔化せる範囲だろう。何せ時間遡行の神隠しに遭った側の俺はともかく、そうではない立場の人間に、目の前の相手が未来人かもしれないなんて発想は湧きにくい。余程のポカをやらかさない限り気づかれないはずだ。

15世紀以前に生まれた人間は150歳前後まで生きていく。俺は現代人であり、仮にこの時代で骨を埋めることになるにしても、九

針の最期の時まで俺が生きていることはない。寿命の関係上、九針が破滅する時まで俺が生きていないなら、天寿を全うすることは可能だ。

15世紀以前の人類は「魔人」と呼ばれている。現代人と魔人は種族は一緒でも、生物としての強度が別次元であることを忘れてはならない。己がそこらの子供にも負ける雑魚だと認識していた方が賢明で、そうであるなら絶対に九針の保護を受けないといけなかった。

纏めると、歴史知識を悟られないまま、保護を受け続ける必要性がある、ということだ。

「私の警護役、財布役はもう他にいる。貴様は私の何になる？」
試すような、からかうような声の響き。

警護役というのは恐らく彼女の妹分だ。こと武力の一点に於いて九針を上回り、「霖鬼角将」と称された戦国時代最強の武人と戦い生き残った剣豪。名は千景。旗揚げした星章院賦の下で与えられた姓は鬼柳。鬼柳千景が警護役だと察せられる。

財布役……随分な言い草だが、こちらにも覚えがある。

星章院賦に、その終局まで仕えた女性大魔法使いだ。謂わば宰相のようなもの。大魔法使いとされているが戦場での活躍はなく、常に後方にいた内政畑の人物と評されている。星章院賦の最古参の家臣であると共に、千景と同じく九針の妹分とされ、星章院の三義姉妹の次女という扱いだ。後に与えられる家名は家持、名は葉子である。

ぶつちやけた話、この二人がいるだけで九針はほぼ無敵だ。後方に葉子がいて、同じ戦場に千景と九針がいて負けたことがない。九針単独でも国士無双の神将なのだから鬼に金棒だろう。

そんな二人と同列に扱われるのは身に余る重責だが、九針が俺に求めている役割は分かっている。先程彼女が話してくれた言い伝えで、俺は【果ての者】【叡智誇る者】と称されていた。

そんな大それた傑物だと自惚れているわけじゃないが、割り振られた役割がそれなら俺の出す答えは決まっている。どれだけハードルが高くても、自らの保全のためには便乗するしかないのだ。

「知恵袋、かな。俺が知らないことは沢山ある、だけど九針の知らない

こと、判断に困ることにはおおよそ答えられるかもしれない。だから俺は九針にとつて欠かせない、最後の判断材料になれる」

「大きく出た……のか？ 微妙に小さいことを言ってる気がするが、貴様は参謀になるわけだ」

つまり、そういうことだ。面白がっている九針に、俺は大真面目に頷いた。

俺の武器は歴史知識だ、それ以外は魔人がそこらを歩いてる時代で通用するとは思えない。武器は使ってこそである。しかも知恵袋なら危険な戦場に連れ出されることはない——ないといいなあ。無理筋だが、たぶん武将として仕えるよりはリスクは低いはずだ。

そんな皮算用をしていると、九針はヤカンの注ぎ口に直接口を付け白湯を飲んだ。人形よりも精巧な美貌の持ち主が、それも豪快に水を飲んでいるのに様になっている。

「ぷはあ……しかし、次郎太は気が早いな」

「どういう意味だよ」

「貴様がどうして私の出自を知っているのかはこの際どうでもいい。次郎太が天上界からの遣いであれば隠しようのないことだからな。だがなぜ貴様は私の配下になる判断を下した？ 私が大成する保証などないのに。如何に貴様を口説き落とすか頭を悩ませていた私からすると、次郎太の即決ぶりは些か腑に落ちない部分がある。まるで私の成功を知っているみたいじゃないか」

「……それは、当然だろ」

「ふうん？」

「俺がいたところが天上界かどうかは分からないけどさ、分かることもある。きみが英雄だったことだ。俺の素性がどうでも、九針が成功することを俺は確信してる。なら身寄りのない俺は、英雄であるきみに賭けるしかないだろ」

「……ぷふっ」

密かに緊張しながら、なんでもないと自然体を装いつつ、言う。全力で持ち上げて、未来人という素性を誤魔化すのだ。全身全霊のキメ顔を晒すのである。

するとそんな俺のキメ顔を見た九針は数秒の沈黙を挟む。しかし、堪えきれずに嘔き出した。

「あはっ！ あはははははは——！ なんだその変顔は——！ あはははははは——！」

なに。俺ってそんな笑えるような顔してた？

九針は堪えようともせず大口を開けて、実に楽しそうに大笑いしている。ゲラ笑いとも言える呵々大笑、しかし聞いててこちらまで楽しくなりそうな、綺麗で明るい笑い声だった。

ひーっ、ひーっ、と腹を抱えて蹲り、バンバンと平手で床を叩く少女。英雄ではなく年相応の少女のような姿に、俺は鳩が豆鉄砲を撃たれたような顔をしてしまった。

ポカンとしていると、やがて笑いを収めた九針が立ち上がった。

「はーっ、笑った。貴様は面白い男だな、気に入ったよ」

「……それは、どうも」

「褒められるのは気分が良い。詳しく話を聞きたいところだが……そんな時間はなさそうだ。もう出よう、そろそろ出ていないとマズイかもしれない」

「……なんで？」

元々外に出て周りを見て回りたかった俺としては望むところだが、ちよつとばかり急な提案に聞こえて反駁した。すると九針は笑顔のまま物騒なことを言い出す。

「イチヨウの神木が発した魔力と光の規模からして、役人がおっとり刀で確認に来るはずだ。そうなるかと私に不都合があるんだよ」

「……なんで？」

「ふうん……う？ 世間知らずな参謀に教えてあげよう。実はな、私はこのキタカネガザワで無頼の輩共の顔役をやっている」

「……はあ？」

知らない話が出て、疑問符が口を衝いて出た。同時にマズった、とも思う。

不可抗力だが不自然な反応をしてしまったのだ。誰にも話していないと思われる、星章院の血を引いていることを知っていたのに、隠

していないらしい素性を知らなかったのである。

幸いにも九針は追求してこなかったが、不審に思われはしただろう。今の内に言い訳でも考えておいた方がいいかもしれない。俺がそう考えている横で、九針は説明を続けた。

「稼業は義賊みたいなものだよ。命のやり取り含めた仇討ち代行、あくどい役人や商人共からの盗みまで。上からの圧力に泣く羽目になった民草は、最後には総じて私へ継る。どこそこのこういう役人にこういうことをされたからやり返してくれ、アコギな商売をしている奴に痛い目を見させてやってくれ、流れの匪賊に娘を攫われた、親を、子を、友を殺されたから報復してくれ、といった具合にな。だからかな、由来は知らんがキタカネガザワの民は私を指して、『鬼眼』なんて呼んでるよ。せこい役人を勢い任せに殺ったこともあるから、こちらの役人に顔を見られると面倒だ」

きがん。祈願？ ……いや、もしかして鬼の眼と書いて鬼眼と読む的なアトモスファイア？

しかも義賊ときた。星章院賦が故郷でそんなことをしていたなんて初耳もいいところである。だが同時に得心のいった面もあった。なるほど道理でと。

星章院賦の旗揚げ時から、彼女は地元で異様な人気があった。その理由が分かったのだ。立場の弱い民衆へ親身に寄り添い、心の支えになっていたから、民衆からの支持が絶大だったのだろう。

「その服は目立つ、こっちに着替えろ。履き物も目立つな……草履の予備をくれてやる。どちらも男の貴様には小さいか？ 後で貴様の着物を用立ててやろう」

「分かった、ありがとう」

九針は隅にある収納棚から黒い小袖を引っ張り出してきた。

彼女の言う通り、流石に高校の制服のまままで外を出歩くのはマズイ。悪目立ちしてしまうだろう。そう思い制服の上着を脱ぐも、はたと九針の目に気づいて手を止めた。

「……そんなまじまじと見られたら着替えにくいんだけど」

「ん？ 気にするな、減るものじゃない」

「神経がすり減るんですけど？」

「男が乙女みたいに可愛いことを言うな。いいから脱げ」

うへえ、と声を漏らす。とんでもない美少女が見ている前で着替えるのは、年頃の男子として気恥ずかしいにもほどがある。が、時間がないらしいので観念し、Tシャツとズボンも脱いでパンツ一丁になった。すると九針が黒い小袖を肩にかけてくれたので袖を通す。

すぐに帯を締めるため、九針が俺の背後に立って両脇に腕を通してきた。突然密着してきた九針の感触にピンと背筋を伸ばし顔を熱くしてしまふ。赤面して振り返った俺が抗議するような目で見ると、とうの九針はまるで意識した様子もなく宣った。

「汚れもなければ傷もない、きめ細かく線の細い体だな。まるで女だ」

「……いきなりなんだよ、こんなの俺一人でも着られるぞ」

「すまん。次郎太の体と魔力がどんなものか、ちよつとばかり確かめたかったんだ。着替えを手伝ったのはついでという奴だな」

「……………」

なんのために確かめたのか、聞く気にはならなかった。嘆息して脱いだ制服とTシャツを畳む。すると風呂敷を差し出されたのでそれに包んだ。持ち歩けということだろうと察し小脇に抱える。

九針はさつさと戸を開けて外に出た。遅れて俺も出ると、彼女は懐から小さな鐘を取り出す。それは水銀で出来ているような、透明感のある白銀の鐘だった。九針がそれを揺らすと、外だというのに反響しているかのような音色を奏でる。

「——魔道具？」

白銀の鐘から発されたのは、波濤のような魔力の波。驚いて目を剥いた。

それはもはや文献にだけ存在を記されている、魔法の力を閉じ込めた魔道具オーパーツだったのだ。

現代に残存する魔道具もあるにはあるが、どれもその機能を失ってしまっている。

力を残した魔道具の存在には、魔法学オタクとして若干以上の興味を惹かれた。

「ご明答。だがそこらのありふれた代物ではないぞ。これは葉子……私の義妹が創った特注品だ。名前なんか付けてないがな」

魔道具はありふれた代物なんかじゃない！ そう叫びそうになるのを抑え、目の前の奇跡を目に焼き付ける。白銀の鐘の音色によってか、あるいはもつと別の何かなのか。仕組みは分からないが、途方もない技術の魔法が行使されているのは分かった。

なぜなら、九針の隣に現れたのだ。青白い魔力の粒子を纏いながら、実体を持った馬が。

光沢のある毛艶を持った、金の鬣と白い馬体。まさに黄金の駿馬と形容するに値するもの。俺はその正体を一目で悟った。星章院賦が生涯に亘って愛したという名馬【鳳翔月影】だろう。

筋肉の盛り上がった馬体は、現代の競走馬が子供に見えるほどの巨体だ。それが鞍や鐙、手綱といった馬具を付けた状態で現れたのである。途方もない魔法技術に感動してしまいそうだ。俺は棒立ちになってそれを見つめるも、九針は労るでもなく身軽に愛馬へ跨る。

小袖姿で跨るものだから、蠱惑的な内腿が曝け出されていた。こちらにも目を奪われそうな男の子の本能に抗えず、ついつい見てしまっている、馬上で体を屈めた少女が手を差し出してくる。

「ほら、手を貸せ」

「え？」

「アホ面を晒すな。時間がない、ケチな役人に見られて追い回されたくはないだろう」

「……もしかして、俺も乗る感じ？」

「当たり前だ」

拒否権はなさそうだ。躊躇するも焦れつたような九針の様子に観念し、彼女の手を取る。するとその細腕からは信じられない力で引っ張り上げられ、九針の後ろに座らされた。

高い。視線が。そして地面が想像以上に遠く感じる。

「腰に腕を回せ。……童貞か貴様。早くしろ、早くしないと玉無しと呼ぶぞ」

「わ、分かった……馬に乗ったことはないんだ、手加減してくれよ」

「善処はしよう」

体が密着してしまうことに腰が引けていると、揶揄しながら急かしてくる。童貞で何が悪い、こちとら清い身を大事にして生きてきたのだ、それを馬鹿にされる謂れはない。

意を決し九針の細い腰に腕を回すと、必然的に彼女の柔らかい感触を感じてしまう。その桃髪からは仄かに良い香りもしてきた。そんな場合じゃないのにドキマギしてしまつて必死に理性を保つ。

少女英雄は手綱を操り鳳翔月影を駆け出させた。疾風となつて大気を切り裂く感覚は、まるで高速道路を走行する車のようで、その風圧で俺の中の邪念は霧散していく。——速すぎて怖いのだ。

例えるならヘルメットも、防護服も着ていないのに、上下に激しく揺れながらバイクで走っているのである。これで恐怖を覚ええないはずもない。しかも馬なんて乗ったこともないのだ、未知の感覚でパニックにならないでいられるだけ上等なはずである。

どれほどの時間を走つていたのか、体感時間が狂つてしまった。悲鳴を押し殺すのに必死で、周りを気にする余裕なんて微塵もない。そんな俺に、九針は呑気な声で話しかけてくる。

「ふふ、体が強張つてるぞ。女の体に触るのは初めてか？ 次郎太はなかなか整つた顔をしているからな、てつきり女の肌には慣れてるものだと思つていたよ……ん？ 次郎太？」

「……………」

「んー……？ なんだ、もしかして怖いのか？ 仕方ない、ちょっと足を緩めよう。ここまで来たら役人共と鉢合わせることもないだろうしな」

九針の気遣いで速度が緩やかになる。そうしてやっと加速の恐怖から解放された俺は、九針の腰にしがみついていた自分に気づき慌てて体を離した。

だが異性に触れたという感覚は綺麗さっぱり消えている。代わりにあるのは背中に張り付く布の感触で、それはひどく冷たい。びっしりと嫌な汗を掻いていたのだ。

そんな俺を笑うでもなしに少女は鳳翔月影を歩ませる。蹄鉄の音

を立てながらゆったりと歩む黄金の駿馬の上で、やっと落ち着いた俺は周囲を見渡した。そして、目を見開く。

見晴らしのいい山の頂上に、俺達はいた。早すぎる——どれほどの速度で駆けてきたのだろう。背後には人の手の入っていないなさそうな原生林があり、鬱蒼として青々とした緑が目にも優しく、空にある太陽の日差しを遮っていた。眼下には険しい山岳、その先に城がある。

周囲を山地に囲まれ、その周辺より低く平らな地形——つまりは盆地に築かれた城だ。積み上げられた石垣と土塁、その外縁を囲う堀には水が満たされていた。

俺の育ったヤマト国の歴史の教科書に載っていた、キョウト・シガ時代にありふれた建築方式の城だ。城の周辺には町があり、そちらの外縁では高い櫓が四方へ建設され、歩哨らしき人影が所定の位置に立っている。櫓からの監視要員は内外を見渡していた。

自然の中にある人の営み、まさに絶景である。

だが、そんなことよりも、俺は別の視点から今日何度目かの驚愕を覚えていて、見惚れる余裕なんてなくなっていた。

なぜなら、俺はアオモリ県民である。生まれも育ちもアオモリで、全体を把握しているわけではないが、それでも断言できることがあった。

それは、アオモリにこんな地形はないということ。

存在しないはずの地形。アオモリの、少なくともキタカナガザワの近隣に、こんな広大な盆地なんて有り得ないと俺は断言できる。だからこそ、啞然としてしまっていたのだ。

そんな俺の反応を背後に感じながらも、九針は俺の驚きを別の意味に解釈したらしい。

なんでもないように、つまらないものを告げるようにして紹介してきた。

「あれはタネサト城だ。あそこの寺町に私の一党が潜んでいる。葉子と千景——私の義妹達もな。早速会いに行くぞ、奴らと次郎太の顔合わせをしないといけない」

四話 【はじめましては戦慄の音】

タネサト城の領主の居城を中心とした城下町に辿り着く。

極東の島国ヤマトの城は独特なもので、町割りは城の中心から順に侍町、足軽町、町人地、寺町などが配されている。町人地と寺町が外郭に位置し、そこは商人や職人の町とされていた。

町人地の住居は街道沿いに隙間なく建ち並び、俺はなんとも言えない面持ちになる。こんなもの時代劇でしか見たことがなかったのだ。現実^{リアル}として見ると外国を目にしている気分になる。

大通りは賑わっていた。老若男女の別なく、ボロの小袖や上等な着物姿の子供がいれば、当然のように老人もいた。中には帯刀したお侍様までいる。その全てが平凡な黒髪であることから、この時代でも高魔力反応の発露である異色の髪は珍しいことが分かった。

自分の目で確かめたタネサト城周辺の地理。城そのもの。そこに住む人々。これで時間遡行現象が現実のものだと確定した、そう判断しても良さそうだ。

元の時代に関して色々と思うことはあるが、意識して思考を逸らす。考えても詮無きことだ。だが最近まで煮詰め、書き出そうとしていた小説は、書いてみたかったなと思ってしまう。

両親や友人に対してよりも、そちらの方を未練がましく感じる自分に、俺は内心失笑した。なんともまあ、冷たいものだ。元々他人に対して関心を持ちづらかったにせよ情が薄いものである。

「ここからは徒歩だ。あんまり見せびらかしたい物じゃないからな」
人目につきそうな寺町付近で鳳翔月影から下ろされると、馬上の九針が再び白銀の鐘を鳴らす。すると鳳翔月影は霞となつて消え去っていった。こうして見ると、やはり凄まじい技術だと思う。

一体全体どんなカラクリで作動しているのか、皆目見当もつかない。若輩の身で魔法学を一定まで修めたオタクとはいえ、オーパーツである魔道具の仕組みを解き明かせはしなかった。

そりやそうだ、こちとら生粋の現代人である。例えば複雑な機械の知識だけはある頭でつかちが、実物を見て即座に設計図を頭の中に描ける道理などありはしない。

馬を召喚する魔道具、それを創ったという家持——いや、今はまだただの葉子だったか。彼女に会えたら魔法学オタクとして、是非とも詳しい話を聞きたいものだ。

そんなふうにも思いつつも、俺の男の子な部分は素直なもので、それとなく九針の方を盗み見てしまっていた。

跨っていた鳳翔月影が消えたことで、空中に取り残されていた九針が音もなく着地した。乱れていた着衣を直しつつ、九針は俺の傍に寄ると囁いてくる。

「どこを見てる？」

「つ……な、何が？」

「下手くそか。とぼけるならもう少し上手くやれ」

「見てねえですよ！ 何が見ていたって証拠だおい！」

逆上して大声を出す俺に呆れ、人越的な美貌を綻ばせて九針は苦笑する。

着衣の乱れで胸元が肌蹴て、晒しの巻かれた谷間が見えていた。おまけに白くて柔らかそうな内腿まで見えていたのである。露骨に見てしまわないように意識できていただけ紳士的だろう。

そんなふうにもキになる俺に、九針は何を思ったのか悪戯っぽい笑みを浮かべた。指先で自らの襟先を開いたのだ。あけつびろげにされた股下に目が吸い寄せられそうになり——白色が視界を掠めた瞬間、咄嗟に顔ごと視線を逸らした。

「そんなに見ても意味なんかないぞ。ほら、私はちゃんと禪を締めて……ん？ どうした？」

「どうしたじゃねえ！ 恥を知りなさいよ恥を！ はしたないでしょ！」

「あっははは！ なんだ、こんなので欲情するのか？ 童貞か？ いや童貞だな貴様」

「童貞童貞うるせえ！ さつきから思ってたんだけどさ、初対面でま

だ半日も過ごしてない相手に距離感おかしいんだよ！ 節度を持ちなさいよ女の子！ みだりに肌を晒すんじゃないやありません！」

「む、確かに。今のは私も悪ノリが過ぎた。だが私も私なりに考えがあったてこんなことをしているんだぞ？ 頭ごなしに否定しないでもらいたいな」

「は……はあ？ 考えってなんの？」

九針の言動を意味不明だと考慮せず、即座に否定しそうになるのを止めて、一応訊ねてみた。

すると桃髪の少女は頷き、紺碧の瞳でこちらを見詰めた。真摯で、誠実そうな目だ。

「うん。私も初対面なりに仲を深めようと思ったんだが、如何せん同い年の男との接し方が分からんでな。もう手っ取り早く、私の色香で誑かした方が確実じゃないかと思っただのさ」

「色香って自分で言っちゃったよこの子……」

「私にとって次郎太は、私の一族が代々待ち続けた予言の者だからな。待ち続けた価値があったかどうか見極めるまで、繋ぎ止めるための努力はする。この努力を継続するかは貴様次第で、私次第でもあるな。無駄な努力でも、しないでする後悔よりは幾分かマシだろう？ だからな、次郎太。互いに後悔しないようにしよう。一度きりの人生、気持ちよく生きていきたいからな」

蓮っ葉な物言いだが、こうもあけすけなのは彼女なりの誠意なのだろう。

物言いの節々に、彼女の性格が滲み出ている。

九針はきつと誠実だが、打算的でもあり、冷静に相手の人となりを見極める質なのだろう。

人を無条件には信じない、仲の浅い相手は尚更だ。かといって信じる努力を怠るわけでもない。今の九針は、予言とやらの通りに現れた俺の真価を見極めようとしている。しかし短時間では判断できないため、見極めるまでの間は繋ぎ止めようとしてくれるようだ。

だから俺の欲するものが分からない以上、色々と手探りで俺の欲望の向き先を見ている。酒か、女か、富か、名誉か、はたまたもつと別

の何かを欲するのか。九針は俺に利する存在だと、俺自身に認識させておきたいらしい。人間関係で最も分かりやすいものは利害関係だからだ。俺が本当の意味で九針の味方になるよう関係を持続させ、やがて情で絡め取り離れられないようにしたい。彼女の思惑は多分そこにあり、そして九針は自身の思惑を隠す気はないと暗に言ってきている。

これはチャンスだが、同時にピンチでもある。俺も九針から離れるわけにはいかないし、歩み寄ってくれるのは大いに助かるが、もし九針が俺に失望してしまったらマズイ。期待通りの能力を示せたらいいが、失望され放逐されたらどこかで野垂れ死ぬ可能性が高いのだ。

故に、俺は密かに緊張する。緊張しながらも、必死に自分のできることを脳裏で纏めた。自らのアピールポイントを、歴史知識を除いて示す必要がある。だがそんなものが俺にあるのか？

「次郎太。貴様は何が欲しい？ 私が与えられるものなら幾らでも、なんでも与えよう」

「……なんでも？」

「そう、なんでもだ。この私に二言はない。だが貴様に与えたものも、貴様にその価値がないと見たなら取り上げるぞ。無論、次郎太も私に付き従う価値がないと思ったら離れて行ってもいい。今の私には貴様に無理強いできる力がないからな」

「いや、力ならあるんじゃないの？ 武力で脅されたらお手上げなんだけど」

「それはしないから安心していい。恨み辛みは後に尾を引く、長い目で見たら下策だ。安易な暴力を振るうのは私の主義でもない。理性的な暴力は好きだが、今はそんな場面じゃないだろう」

「じゃあ……」

九針の言葉を受け、考える。最後の物騒な一言は聞き流すとして、ここで何を要求する？ 何も求めない、それは論外だ。与えて、与えられる。この関係を最初に結ぶことに意義がある。

きみが欲しい！ なんて言うのはどうだろう。ありだとは思う。色んな意味で。だが却下だ。今この時も九針は俺を見ている、評価の

材料を見つけようとしている。下手なことは言えない。

なら答えは1つ……いや2つだ。

「——知識をくれ。それと、衣食住を含めての身の安全を。俺はここの事を全然知らないし、自衛できる自信もない。その2つをくれたら俺は九針に感謝するし、いつか別の形で返せるはずだ」

「担保は？」

「……え、担保って要るの？」

「いや、要らん。言ってみただけだ。しかし知識と身の安全を与える対価が、次郎太からの感謝とはな。ふふ、貴様は随分と自分に自信があるようだな。結構なことだ」

「……………」

揶揄する言い草に眉根を寄せる。すると愉快そうに笑みを溢しながら九針は踵を返した。

「付いて来い。次郎太が欲しているものをくれてやる。まずは衣食住だ」

歩き出した九針の背中を、俺は慌てて追った。

追いながら思う。俺に価値がなかったと思ったら、俺から知識と身の安全をどうやって取り上げるつもりなんだろう、と。首でも刎ねるのか？ それはなんとも、楽しい想像とは言えなかった。

(歩く姿勢までメチャクチャ綺麗だな)

現実逃避気味に内心呟いて、自分の利用価値について思いを馳せた。

† † † † † † †

城下町の外縁に位置し、外敵の襲来時には防衛線として機能する寺町。そこには多くの寺院や墓地が集合して建てられている。

その一角。山の頂上から見た時の記憶を頼りに判ずる限りだと、タネサト城の南西に位置する箇所へ閑散とした廃寺があつた。そこへ九針に連れられて足を踏み入れる。

途端、微かな違和感。

廃寺の敷居を跨いだ瞬間に、何かが体に触れた感覚があつた。全身を薄い膜が包み込み、そのまま溶けて消えたような感じである。気のせいと判じるには無理がある、俺は言葉短く問い掛けた。

「……今のは？」

「ん、感覚は鋭いようだな。今のは結界だよ。侵入者の悪意の有無を判定するだけの。私の魔力反応を登録してあるから、中の葉子あたりは私が戻って来たのを察知しただろうさ」

「感知結界、って奴かあ」

訊ねると九針は感心したように答えてくれた。

感知結界。知識としては知っている。早い話が人感センサーの類いだ。現代では科学技術で再現されているが、悪意なんて曖昧なものを感じるのは流石に無理だ。魔法全盛の時代はやはり凄い。

廃寺の敷地内にある木造の本堂などには苔が生え、如何にも湿つぽく幽霊の出そうな雰囲気醸し出している。九針の後に続いて本堂に上がると床板が軋み、ギシリ、ギシリと音を鳴らした。

薄暗い本堂の中心には等身大の仏像がある。

怒り、喜び、悲しみ、愉悦、4つの顔がそれぞれの表情で前後左右を見据えて、8本の腕にはそれぞれ秤と本、2本の剣と4つの鏡を持つている。そして太い首に雷雲を象った衣を掛けていた。

これは見たことがある、教科書にも載っているのだ。名称は確か――

「――これ、鬪仙裁仏とうせんざいぶつだろ」

概要はざっくり覚えてる。

罪深い罪人を裁き、地の底の地獄界で永遠に殺し合わせる、全く以ておっかない仏様だ。

「なんでこんな所にあるんだ？」

「私の趣味だ。鬼眼としての私を暗喩しているなんて言う輩が大多数を占めてるが、私にそんな意図はない。闘仙裁仏が美しいから彫っているだけだよ」

「彫ってる……？ え、なに。もしかしてこれ、九針が作ったの？」

意外に思い改めて仏像を見るも、その精巧さは現代に残っている高名な仏像に勝るとも劣らないものだ。これを趣味で彫ったと言う九針の腕前は、もはや匠を名乗っても恥ずかしくないものだろう。

感嘆の念を覚えて反駁すると、九針は照れくさそうに頬を桜色に染めた。

「……そうだ。ちよつと作り過ぎたからな、全ての根城に1体ずつ置いてあるよ」

「へえ……するとこの仏像がある所が九針の縄張りなんだ？」

「ああ。お偉いさん達も知っているが、私の活動は概ね黙認されている。大つぴらにはしていないがそこそこの額を献金しているのと、町人地までの治安維持に貢献しているお蔭だな」

さらりと言ったが、とんでもないことだ。丸つきし裏社会の元締めである。

つまり、ここら近辺で九針に睨まれたら生きていけないということだろう。何が無理強いできる力はない、だ。できるだろ、これ。そう思うも藪を突いて蛇を出すのはバカバカしい。黙っておく。

と、その時だった。

「ギイイイヤアアアア!!」

闘仙裁仏の背後に回り込むと、床がひとりでにスライドし、地下へと続く階段が現れる。

そして地下から凄まじい絶叫が轟いた。

「っ……………」

「おっと…………取り込み中らしいな」

悲鳴だ。筆舌に尽くし難い激痛でのた打ち回る叫声。聞いただけ

で耳を塞ぎたくなる、聞く者の心まで傷つける音の出血である。隠し階段とそのカラクリへの驚きよりも、聞く者の心胆を寒からしめる絶叫の方にこそ気を取られた。

堪らず怯み、腰が引けた。身の危険を感じたのだ。しかし九針は戸惑う素振りもなく、何気ない足取りで地下へ入っていく。その途中で振り返り、少女は小首を傾げた。

「どうした？」

「……いや、別に」

「今日は葉子も暇だろうからな、千景共々顔合わせができるぞ。2人とも結構な美人だ、気に入ったら娶ってもいい。それとも私がいいか？ ん？」

冗談めいて軽口を叩く九針に、俺はどうとも応えられず無言で地下へ入る。

つれないなと肩を竦める少女。当たり前だ、あんな叫びを聞いて平静を保てるわけがない。むしろ平然としている九針の方がおかしかつた。あんな……鼓膜に包丁を突き刺され、掻き回されたかのような気分になる悲鳴を聞いているのに、全くの無関心なのは異常だろう。

戦国時代の人間と、平和な現代社会の人間。その価値観や倫理観の差異を、こうも不意打ち気味に突きつけられるとは予想外だった。率直に言って、狂人が目の前にいる気がしてくる。

「先に入れ」

「……分かった」

悲鳴は、止まらない。間近で黒板を爪で引つ掻き、不快な音を奏でられているかのようだ。九針の指示に従おうにも、本能的な忌避感で二の足を踏んでしまう。

しかしこのまま立ち尽くしているわけにもいかないだろう。意を決して隠し階段の奥にあった襖を開き入室する。すると地下には嘘みだいに快適そうな空間が広がっていた。

木製の床と天井で上下を挟まれ、左右の壁も状態のいい木の板が張り巡らされている。

広さは12畳ほどで、襖があることから別室もあるらしいことを察した。

空気は冷たくなく、暑くもない、居心地のいいもの。エアコンなんて見当たらないのに、空調が万全に整えられているかのようだ。これなら家具さえ揃えば、ここに定住しても良いと思える。

——部屋の隅に不自然に設けられた土間さえなければ、だが。

土間とは板を張らずに土足で歩くように作られた、整地された地面の床だ。そこに人間一人を捕らえる鉄製の枷が4つあり、1人の男が両手首と両足首を枷で拘束されていた。

場違いである。

趣のある和室の隅に、拷問のためのスペースと器具があるのだ。おまけに見たくもない肉片が地面へ転がり、辺りに血が飛び散っている。捕らえられている血塗れの男の股からは恐怖、あるいは激痛が原因と思われる失禁の跡があり無惨な様相を呈していた。

頭の芯が痺れる。心が一気に冷え込んだ。表情を固くしてしまいつながらぬ、しかし虜囚である男の有様から目を背けられない。吸い寄せられるように見てしまった。

「……………」

男には、頭皮がなかった。頭蓋骨の頭頂部が剥き出しになっている。刃物で綺麗に剥ぎ取られた、髪の毛つきの頭皮が傍に落ちていた。

元は精悍だっただろう顔には目玉が1つしかなく、瞼と鼻は削がれ眼窩が晒されている。体はなぜか無傷のままだったが、手足の指は1本も残されていなかった。指を切り落とす前に剥がれたと思いき20個の爪が土間に散乱し、その分の指も散らばっている。

血と尿の匂いが、見ただけで伝わってきそうな凄惨な光景が作り出されていた。

しかし、異臭はしない。まるで画面の向こう側で起こった惨劇フィクションみたいで現実感がなかった。吐きそうにもならなかったのは、きつと目の前のものを俺の心が受け止めきれなかったからだろう。胸の中心に風穴を空けられた心地で、聞こえた声の意味を解する。

「——おかえりなさいませ、お姉さま。そちらの殿方はどちら様かしら？」

「客だ」

「まあ。お客様をお連れなら先に仰ってくださいればよかつたのに。おもてなしの準備なんてしていませんよ？」

板の間には一人の少女がいた。

九針以上に魔力が漲る亜麻色の長髪と、深淵のように深い翡翠の瞳の持ち主である。

前髪を綺麗に切り揃えたその髪型は、現代だと姫カットと呼ばれるものだ。眦の下がった柔和な面持ちをしていて、そこに在るだけで気品を醸し出している。

纏っているのは百合の花が刺繍された白い着物で、水色の帯を締めていた。こんな所にいなければ、良家のお嬢様にしか見えなかつただろう。黒猫を膝に乗せ、座布団の上に正座したまま書物に目を通して、いる姿はのんびりとしていて、虫も殺せなさそうな印象を受ける。

九針をお姉さまと呼んだ彼女もまた、九針ほどではないにしても淑やかな美少女だ。だが完璧過ぎる容姿の九針よりも、この少女の容貌の方が人間的で、魅力的なものに見えるだろう。

——繰り返そう。こんな所にいなければ、と。

亜麻色の髪の毛、白い着物の少女の背後に、拷問にかけられている男がいる。なのに彼女は平然としていて、呑気に黒猫を膝に乗せ読書しているのだ。異様な絵面である。

九針はその少女に微笑みかける。俺は完全に場の流れに取り残されていた。

「客を招いているのは貴様もだろう。下郎を部屋に上げるとは何事だ、葉子」

「あら。確かにお目汚しでしたわね。お客様も、見苦しいものを見せてくださいませ」

葉子と、この少女は呼ばれた。どうやらこの少女が、鳳翔月影を召喚した白銀の鐘の製作者であり、後の星章院家の家臣団にて纏め役となつた筆頭家老『家持葉子』その人らしい。

九針からの反駁に、葉子はほんわかとした微笑を溢し、膝の上から黒猫を退けた。にやあ、と不満げな声を上げた黒猫の頭を優しく撫でてから、葉子はこちらに向き直ってくる。

葉子は静々と頭を下げ、礼儀を尽くして挨拶を——
「う、うああああああ……ご、殺じで……殺じでぐれえ……だ、頼む。ぜぜ、ぜつ、全部、喋つた、も、もう何も知らねえよおお……」
「チツ。五月蠅いお猿さんですわね。お客様の前で汚い声を出すだなんて御里が知れますわ」

苦悶に満ちた、涙声の懇願が挨拶を遮る。それが不快だったのだろう、頭を上げて背後を見た葉子が舌打ちする。小声での悪態なのに、いやに大きく聞こえた。

苛立った様子の葉子が後ろ手に腕を振る。すると部屋の隅にあつた土間が、その空間ごとパタリと閉ざされてしまう。まるで本のページを一枚捲つたかのように畳まれたのだ。

そうして土間は夢幻の如く消える。代わって現れたのは、板の間。何の変哲もない、凄惨な拷問の跡など影も形もない光景だ。我が目を疑う現象であるのに、葉子は気にせず改まって頭を下げた。

「お客様、ようこそいらつしやいました。わたくしは九針お姉さまと義姉妹の盃を交わし、恐れ多くも妹分を名乗らせていただいている葉子と申します。何卒よしなにお願ひしますわ」

「あ……はい。こちらこそ。俺は——」
「葉子は私の妹だ、畏まる必要はないぞ。それと苗字も伏せなくていい」

「——分かった。俺は、山場次郎太だ。九針に拾われて付いて来た。こちらこそよろしく。今は立場が不透明だけど、俺も一応は九針の手下つてことになってる。きみのことは……葉子つて呼び捨てにしてもいいのか?」

「山場、次郎太さま……」

何事もなかったかのように、穏やかで丁寧な挨拶をされたものだから動揺してしまつたが、九針の声を聞いて我に返る。機械的に挨拶を返すと、葉子は探るような目を九針に向けた。

「お姉さま……彼はお姉さまの配下に加わるようですが、どのように遇しますの？」

問われた九針は履いていた草履を脱ぎ板の間にかかる。

視線で促され、葉子を気にしつつ俺も続いた。

「今は測りかねている。場合によっては葉子と同等の扱いをするつもりだ」

「——あら。あらあらあら。うふふふ……お姉さまがそこまで高く買っついていらつしやるだなんて……チカの時以来かしらね？　なんにせよ有望な兄を迎えられるだなんて望外の喜びですよ？」

「……兄？　なんで？　なんで兄？　え？　こわい。やめてくれよ葉子さん。猟奇的な魔法使いにいきなり妹面されるとか、新手の恐怖体験でしかないんですけど」

九針の返答を受けて、葉子は心底愉しそうな笑い声を上げた。口元を着物の裾で隠し、楚々とした所作で上品に微笑んでいる。それがとても透明で、俺は恐ろしいものを見た心地になった。

兄呼ばわりされたことも意味が分からなさ過ぎて怖い。電波系の天然娘なのか？　ギャルゲーならまだしも、リアルでこんな子と対面すると無邪気に喜べなかった。

普通に不気味である。

例え相手がトップアイドルも斯くやといった超弩級の美少女でもだ。

葉子はたしか、星章院賦より1つ年下だ。だったら九針と同一年らしい俺を弟ではなく兄だと見做すのも分からなくは——いや分からん。猟奇的な拷問を他者に施せるような妹とか嫌過ぎる。俺が心底嫌そうにしなから聞き返すと、葉子はころころと可憐に笑った。

「わたくしのごとは呼び捨てでも構いませんわ、お兄さま。どうか末永く、わたくし共と仲良しさんでいてくださいね？」

「……だから、なんで俺をお兄さまって呼ぶんだよ」

「お姉さまが以前仰ってましたの。旗を掲げ、乱世の平定に乗り出すまでに迎えた臣は皆肉親みなと思えと。お姉さまに従う者の中で、これはと思う者はわたくしとチカしかいませんでした……そこに加わる

なら、お姉さまを呼び捨てにするのが許されている、次郎太さまがわたくしの兄になるのではなくて？ わたくしはそう判断したままですが、如何でしょうかお姉さま」

「私を呼び捨てにする許しは一時のものだが、今はその解釈でいい。理解が早くて助かるよ」

「……理解が爆速すぎて俺が置き去りにされてるんですけど？」

理解不能な理屈がメチャクチャおつかない。俺は葉子に潜在的な恐怖心を覚えていた。

だってさつきの男を拷問していたのは、明らかに葉子だったから。

多分魔法でやったはずだが、あれだけ惨い真似をしているのに全く気にした素振りが無いし、これまた理解不能な魔法で空間を畳み男を処理してしまった。なんだかよく分からんがとにかく怖い。可能ならお近づきになりたいくない人種だと感じる。

だがそういうわけにはいかない。九針の下にいる限り、葉子との接点はなくならないだろう。どこかで折り合いをつけて付き合っていくしかないかった。

しかし、大丈夫か？ ここまでの流れで、九針は星章院家の者だということも伏せているのは分かっている。つまり今の九針は単なる町人だ。そして葉子はあからさまに良家のお嬢様である。なのに葉子は明らかに九針に心酔して、彼女に従うのは当然といった様子だ。もし九針が俺を無価値と断じたら、この子は間違いなく掌を返す。そんな確信があった。

端的に一言で形容するなら、狂信者だ。葉子は九針を絶対視する宗教の、熱烈な司祭か何かに見える。危険人物の香りがプンプンしている、控えめに言っておヤベエ奴だと見て取れた。

「次郎太。葉子は可愛いだろうか？」

ドヤ顔で言ってくる九針の神経を疑う。九針は俺が大好きな英雄なのかもしれないが、あくまで歴史上の人物として好きだったただけだ。実際に対面して付き合いを持つと、彼我の間に横たわる大規模なジエネレーションギャップに頭がクラクラしてしまいそうである。

「可愛い。可愛いけど、あれだ。『遠きにおいて思ふもの』って感じの

距離感が望ましいかな」

「あら」

「……ふふ。ふふふ。あはははは！なるほど、私も時々葉子が怖くなる時がある。コイツは遠巻きにして愛でるのが大吉だよ。誇っていいぞ次郎太、貴様の人を見る目は確かだ」

「酷いわ。お姉さまも、お兄さまも。わたくしをなんだと思ってるのかしら」

サイコパスだろ、とは言わない。というか九針も俺と同じ感想を持ってたのかよ。

「ところで葉子。さっきのあの男は、どこの誰だ？」

高笑いしていた九針だが、ややあつて落ち着くと今更のように訊ねた。すると葉子は着物の裾から扇子を取り出し、パツと開く。その紫の扇子には雄々しい一角馬が描かれていた。

彼女は心酔する姉貴分の問いに、さりと答える。

「タネサト城に潜入しようとしていた、【旭日党】の者でしたわ。イジメた後に脳味噌を弄り、気持ちよくして差し上げたなら快く教えてくれましたもの。まず間違いないと断言いたしますわ」

——それは。ヤマト史上最大の百姓一揆とされる乱の首領、旭藤きよくみという男の一党である。

戦国時代中期。星章院賦が旗揚げする切っ掛けとなった百姓一揆、その中核となる大軍勢を率いた旭藤。朝廷の権威を地の底に叩き落とし、混迷の時代を加速させた梟雄。

その一党の名を聞いた瞬間、九針は先程とは別種の色を以て嗤った。

五話 【星の三義姉妹】

後世、数多の創作物の題材となった戦国時代。それは西暦1336年の【芦澤の変】を契機に始まりを告げ、実に314年もの間ヤマト国の世情を掻き回す災禍となった。

芦澤の変とは、当時の朝廷の保守派、改革派、そして宮廷魔法使いを元凶とする大事件である。

保守派とは読んで字の如く、既得権益を守り変化を厭う派閥だ。そして改革派は長らく保たれてきた権益が汚職の温床になっていることを悟り、圧政により百姓らが虐げられている国情をよしとせず、朝廷の奸臣を除き政治の正常化を図ろうとしていた派閥である。

両派閥の権力闘争は次第に過激化し、キョウトでは暗殺に次ぐ暗殺、冤罪による投獄などが相次ぎ、やがては血が流れない日がなくなるほど凄惨な暗闘が繰り広げられたという。

このままではキョウトは荒廃し、朝廷の権威は失墜する。心ある者がそう懸念し始めた時だった。これまでに類を見ない規模の——それこそヤマト全土を席卷する、全国的な大飢饉が発生した。

それにより百姓たちの生活は立ち行かなくなり、やむにやまれず匪賊と化すか、散発的に一揆を起こす者たちが続出した。その影響は物流と商業の中心地であった天下の台所、オオサカ市にも現れており、オオサカ市へ視察に赴いた役人が百姓の窮状を目にすることになる。

役人の名は塩田平八。

飢えで喘ぎ苦しむ百姓を見て心を痛めた平八は、朝廷へ救援を求めたものの拒否されてしまい、やむなく自らの私財を売り払い救済に当たった。しかし腐敗していた朝廷はこの行為を邪推し、政敵に対抗するために百姓らを手懐け、武装勢力を築こうとしていると見做した。そしてあるうことか平八に切腹を命じてしまう。

この勅令を政敵の一派が強行した。

保守派の刺客が勅使を装って平八の屋敷に入り、平八の首を刎ねて

しまったのだ。

平八は朝廷の改革派に属し、同派閥の長が信頼する義弟だったのである。故に保守派の面々は、平八という改革派の有力者に難癖をつけて葬ったのだ。

政界は生き馬の目も抜く、魑魅魍魎の生息地帯である。隙を見せた方が悪いのが道理だ。とはいえ余りに無体であり、理不尽だった。果たして平八の訃報を聞いた改革派は激発する。

特に改革派の長である大田竜治郎の怒りは激しかった。平八は彼が信頼する腹心だったが、同時に血を分けた親兄弟よりも深い情を交わした親友であり、愛する妻の弟だったのだ。

竜治郎は制止する家臣を振り切り、怒りに任せ門下の者に号令をかける。保守派の面々を襲撃し次々と血祭りに上げていった。保守派もまさか相手がこうも直接的な報復に打って出るとは思っていなかったのだろう、対抗するための手勢を動かすのが遅れてしまった。

だが、所詮は計画性の欠片もない凶行である。竜治郎らは駆けつけた多数の武士らに撫で切りにされ、無惨にも首を晒されてしまうことになる。——それでもちろん、余りに短絡的で計画性のない蛮行が、途中までは上手くいってしまったのには訳があった。

元凶は当時の宮廷魔法使いだった芦澤道摩だ。彼は保守派の長に一人娘を人質にされており、怨みを持っていたという。故にこれ幸いと竜治郎一派に接近し、彼らの理性が歯止めをなくす魔法を掛けた。竜治郎一派が道摩に掛けられた魔法は狂奔の呪いでもあり、理性的な判断力を喪失した竜治郎一派は後先考えない蛮行に手を染めたのだ。斯くして道摩は変事のどさくさに紛れて娘を取り戻したが——話はそのままで終わらない。このままであれば残存する改革派は皇王直属の近衛団により捕らえられ、この変事は終結していただろう。

だがそうはならなかった。

事態がより深刻化した原因は、改革派の後ろ盾だった王弟の存在である。

王弟は朝廷の権力を私する^{わたくし}廷臣を肅清し、暗愚な兄王を退位させて

自らが皇王となつて、揺らいでいた朝廷の権威を回復させたいと思つていた。故に改革派の蛮行を知つた彼は、以前から親密な関係を築いていたシガ県の守護大名を京に招き入れ、その軍勢を以て一挙に朝廷に巢食う奸臣を一掃してのけたのだ。

ややこしいのはここからである。王弟の手引きで京入りした大名が野心に駆られた。この政変を利用すれば、自分こそが天下を差配する支配者になれると思つたのだ。

シガ大名【赤石専一郎】あかし・せんいちろうは皇王を王弟の言うままに退位させると、王弟を登極させ皇王にした途端に裏切り軟禁してしまう。短慮な赤石は自らを将軍と称し、赤石家による幕府の開闢を宣言してしまった。幾らなんでも短慮が過ぎる。

赤石が仮に将軍となり幕府を開く野心を持ったとしても、行動に移るまでが早すぎるのだ。

後に明らかとなつたのは京に残つていた芦澤道摩により、赤石専一郎とその家臣団が誑かされてしまったという事実である。だが真相がなんであれ、各地の守護大名が赤石専一郎の愚挙を肯んずるはずもなかつた。各地の大名らは赤石將軍家の命令を全て無視し、張りぼての幕府に良いようにされている朝廷の権威は失墜してしまう。多発する百姓一揆を鎮圧するため、あるいは懐柔するために各地の大名は独自路線を取るようになり、全国の大名の間に独立独歩の風潮が蔓延していったのだ。

そうなると世情が不安定になるのは避けられない。様々な思惑が入り乱れると、領地の拡大を目論んで他領へ攻め込む者が現れ出した。そうして300年以上続く戦国時代が幕を上げたのである。

(――で。その芦澤道摩あしざわ・どうまの末裔が旭日党の首魁なんだよな)

旭藤と名乗るヤマト史上最大の百姓一揆【旭日の乱】の首魁。史料では明らかになつていないが、恐らく決起時で70歳だと推測されている男だ。現代人からすると老齡だが、平均寿命が150歳である魔人からすると――現代人換算で30代半ばの――若者だろう。

その旭藤は、一時は大魔法使いと謳われた男、芦澤道摩の末裔を自称している。というのも道摩は芦澤の変の後、ヤマト最北の地である

ホツカイドウに逃れ余生を過ごしたらしい。道摩は未開の地だったホツカイドウを開拓し、現地の民草から神のように敬われたというのだ。

ホツカイドウ出身の旭藤が、地元での道摩の人気に肖って自称していたに過ぎないのか、はたまた本当に道摩の末裔なのかは定かではない。しかし少なくともホツカイドウの民はそれを信じ、旭藤のもと国軍に勝る士気の高さと団結力を誇った。

「またか。連中も懲りないな」

葉子が捕らえ、拷問にかけていた男の正体を聞いた九針が、邪悪に嗤いながら吐き捨てる。凶悪な面相をしているのに、彼女の纏う佇まいはあくまで神聖さを損なわない。

見ると、葉子は恍惚とした表情で九針を見詰めていた。

ギョツとする。病的な眼差しに、そこまで見惚れるほどかと疑問を覚えた。確かに九針は人間離れして美しい容姿をしているが……葉子の様子はまるで本物の狂信者のようである。

俺は意識して葉子から目を逸らす。以後の接点はなくせないまでも、可能な限り減らしたいという思いが芽生えていた。魔道具の件で色々教えてもらいたいことはあつたが、この際それは忘れよう。

君子危うきに近寄らず、だ。九針の物言いに含むものを感じた俺は、そちらへと注意を向ける。

「また？　これが初めてなんじゃないの？」

まるで、さつきの男のように拷問に掛けられた人が、他にもいるみたいな台詞である。

嫌な想像だ。しかし想像上の出来事とも思えない。

答えの見えるている疑問を投げ掛けると、紺碧の瞳が俺を見据えた。「無論初めてじゃない。私がここらで無頼の頭を張っているからだろうな、連中は私を配下にしたかったらしい。1年ほど前にわざわざ密使を送りつけ、同志になれと勧誘して来たのさ」

「無礼にも上から目線でしたわ。無論そんな下郎の囀りに耳を貸すお

姉さまではありません。お姉さまは即座に塵屑共をブチ殺してしまわれました。報復のためか、お姉さまを狙った刺客が放たれて来るようにはなりませんが……今回はどうにも趣が異なりましたわね」

葉子がそこまで言うと、桃髪の少女は義妹を一瞥する。まるでそれ以上は言うなとばかりに視線で制したのだ。口をつぐんだ葉子は亜麻色の髪を揺らし、興味深げに俺と九針を見比べる。

その視線のやり取りの意図を汲み取れるほど、俺と彼女達の仲は深くない。この一件に関しては深く考えたくなかった。だが……そういうわけにもいかないだろう。

九針が葉子を制したのは、俺の反応が不快そうだったからかもしれない。現に今、桃髪の少女は俺の顔色を窺っている。

見られていることに気づき齒を食い縛った。感じていた気分の悪さ、葉子の惨たらしい行為への嫌悪感、そうしたものので性格を押し量られている。俺がどんな人間なのかを探っているのだろう。

失望されるわけにはいかない。感じる気持ち悪さを内面に深く押し込める。果たして九針は俺から目を逸らし、何事もなかったかのよう^にに葉子へ訊ねた。

「——どうでもいいな。それより千景はどこにいる？　次郎太と会わせたい」

「チ力なら隣のお部屋で休んでいますわ。あの子も帰ってきたばかりで疲れているようでしたし。なんでしたら呼び寄せて参りましょうか？」

「いや、いい。そろそろ忙しくなるかもしれないからな、今は葉子も休んでいるといいさ」

「畏まりました。ではお姉さま、それからお兄さまも、また後ほどお会いしましょう」

にこにこしながら手を振ってくる葉子へ曖昧な笑みを返し、隣室に足を向けた九針へと付いていく。九針はともかく葉子は恐ろしく^{おっかな}苦手だが、高名な三義姉妹の末女、千景はどうだろう。

名将言行録などの史料においては『色白く痩せしなり、目大きく睫毛長し、花も実もある麗人なり。鬼の如き戦働きを思わせぬ』と称さ

れるように、容貌の美しさは歴史に残るほどだった。

だが、今はそんなことなんてどうでもいい。

可愛いとか、綺麗とか、そういうのはいらぬ。ただただ千景がまともな人柄であることを祈る。特に葉子からサイコパスじみた印象を受けたせいで、俺の祈りの深度は増していた。

九針が襖を開ける。隣室は家具が一つもない、殺風景な畳の間だった。

6畳ほどの広さの和室で、一人の少女が寝ている。布団を敷かず、横にもならず、壁に背を預けて座り込み、紅色の鞆に収まった刀を抱いていた。そのまま顔を伏せ、静かな寝息を立てている。

九針が歩み寄るのにピクリともしない。しかし長姉が一声掛けるとすぐに目を覚ました。

「千景」

「んあ……？」

顔を上げた少女は、史料に記されている通り可憐だった。色素の薄い金色の髪をハーフアップの形に結び、寝起き故か青い目を細めている。可愛さの奥へガラス工芸品めいた透明感があった。

少女の佇まいに禍々しさは一片もない。

華奢な体躯に水色の胴衣と紺色の袴を纏った少女は、愛嬌のある幼い顔立ちへ弛緩した笑みを浮かべる。それはまるで、幼子が庇護者を見つけた時のように無垢な表情だった。

しかし無防備だった表情は掻き消える。見知らぬ他人である俺に気づいたのだ。不審そうな顔をした少女が、俺と九針を交互に見比べる。

「……姉上？ あのアバラ家から帰ってたんですね。そちらの男性は誰でござる？」

「客だ。今はな。近い内に貴様の兄になるかもしれない男だぞ」
「え？ ……ええ？」

声は、甘い。秋風のように耳朵を擦り、なんとも気の抜ける優しい声音だ。

語尾にござると付ける奴はリアルだと初めて見るが……滑稽さよ

りあざとい印象を抱いた。率直に言って可愛い。そんな可愛い女の子は、九針から珍妙な台詞をぶつけられて困惑していた。

そりやそうだ。俺だつて意味が分からん。葉子の言い分からして、古参面子は兄弟姉妹のように団結しようね、という九針の提案なのは分かるけども、本当に兄だの姉だのと呼び合うのはどうなのって思う。俺が一人っ子だからそう思うだけか？ いやそんな訳ないか。

千景と呼ばれた少女に分からないなら、他人の俺に分かるわけもない。眠そうにしつつも体勢を変え、刀を横に置いて正座した千景が俺たちを見上げる。一瞬九針の意図を考えようとしたみたいだが、すぐに思考を放棄したらしい。些か呆れたように苦笑いを浮かべた。

「……姉上つてば頭でも打ちました？ 赤の他人がイ口の兄になるとか意味が分かんないんですけど。事情があるならですね、寝起きのイ口にも分かるように言つてほしいでござる」

やはり彼女にも理解できなかったらしい。至極尤もな言い分である。これに九針がどう反応するのか横目に確かめてみると、今までの印象を裏切るものを見てしまった。

笑っていたのだ。挙措の一々が自信に満ち、覇気に溢れ、竜のように巨大な存在感を所構わず放射していた九針が。普通の女の子みたいに、柔らかく微笑んでいた。

不覚にも見惚れてしまう。

不意に顔を覗かせた素の少女の部分が、これまでに見ていた九針の比じゃないほど魅力的で。これが作っていない素の表情なのだろうか、表情だけで義妹へ懐く情の深さが伺い知れた。

「今は分からなくてもいいさ。それより千景、客を迎えたらすることがあるよと教えただろう？」

「ええー？ なんでござるか？」

「挨拶だ。挨拶をしろ」

「挨拶！ そうですね、挨拶は大事です！」

いつそ微笑ましくなるやり取りは、姉妹というより母娘のようだった。

おかしな話だ。千景は年相応の容姿をしていて、決して幼女には見

えないのに母娘みたいなんて印象を覚えるのは。それだけ千景が幼く見えるのだろうか。

色素の薄い金髪を揺らし、千景は正座したまま折り目正しくお辞儀をした。

「お客人、イロは千景でござる。姉上のお客人とあつては仁義を切りたく存じますが、イロは生憎と粗忽者ですので、長つたらしい口上は覚えてません。格好良くキメられなくてごめんね?」

「あ、ああ……謝らないでいいよ、むしろ九針達よりだいたいぶ取っ付きやすそうで安心したから。俺は山場次郎太だ、よろしく千景さん」

「ん? 私は取っ付きにくいのか?」

首を捻る九針に、そうだよと言う代わりに無言で頷いた。

何気に衝撃を受けたみたいな顔をする九針を尻目に、千景が目に見えて慌てふためく。それを見た九針は気を持ち直したのか、楽しげに義妹をからかい出した。

「山場……様? え? 苗字がある? もしかしてお侍様なんですか? あわわ……姉上え! イロつてばやっぱり仁義を切るべきじゃないの!」

「そうだなあ……頑張つて覚えないと無礼打ちされるかもなあ……」

「そんな! 助けて姉上! イロはまだ死にたくないでござる!」

「うんうん、だが慌てるな、死にたくないならやることがあるだろう?」

「やること? ……ハッ!? そっか、ここで口を封じてしまえば……!」

「判断が早い!」

刀を持って片膝立ちになった千景に驚愕する。

俺は慌てて両手を前に突き出し『待て話し合おう』のポーズを取つた。

「待った待った待ってください千景さん! 俺サムライじゃないから! 九針も見えてないで止めてくれよ! 身の安全を保証してくれるんじゃないの!」

「ああ、うん。しょうがないな」

なぜか面白そうに静観しそうだった九針に水を向けると、彼女は思
い出したようにパチンと指を鳴らした。すると襖がひとりでに開き、
隣室で読書に戻っていた葉子が黒猫に何事かを囁く。

葉子の膝の上にいた黒猫が億劫そうに立ち上がった。面倒臭そう
な顔のままのそりと駆けてくる。そのまま黒猫は千景の顔へと飛び
かかり、自らの腹部を押し付けた。死角からの奇襲だったのだろう、
千景は慌てて刀を落とし黒猫を引き剥がそうとする。猫が苦手なの
かあからさまに嫌がっていた。犬と猫なら猫派の俺からすると羨ま
しく、嫌がるなんて信じられない。

「うわわ、やめるでござる黒助！ やめろー！ ちよ、やめつ、やめ
てって言ってるでしょブツ殺すぞ！」

「猫様相手にメチャクチャ敵つい台詞吐くじゃん……」

黒猫の首根っこを掴んだ千景が、息を乱しながら放り捨てる。黒猫
は空中で体勢を整えて綺麗に着地すると、やれやれとばかりに一鳴き
して葉子の許へと戻っていった。

黒猫が通過すると、襖が自動ドアの如く勝手に閉まる。

葉子の魔法だろう。だがやはり何をどうやっているのか見当がつか
ない。好奇心が疼くが、問いただきたい気持ちグツと堪える。で
きれば葉子以外の魔法使いから話を聞きたかった。

「毎度黒助をけしかけるのはやめてほしいでござるよ。葉子の猫だか
ら殺すに殺せないですし、対処に困るじゃないですか」

千景が愚痴る。どうやら同じ義姉でも、葉子の方は呼び捨てにして
いるらしい。

「次郎太」

「……なに？」

「これが葉子と千景だ。可愛い奴らだろう？」

「……まあ、外見上はね」

九針から自慢げに言われても、俺には苦笑いしか出来なかった。

義姉妹の長女の九針は言うに及ばず。次女の葉子を見た目に反し
て拷問慣れしている感じがして恐ろしいし、末女の千景は猫様でも
ぶつ殺せるっぽいほど殺生に慣れてる臭くてヤバい気がする。

しかも千景は秒で俺を殺そうとするほど判断が早いときた。どちらともこれから友好的に接しないとイケないとなると、些か気が重くなるというもの。現状は九針が一番まともに見える。

「でも俺的に、今んところは九針がナンバーワンだよ……」

本音を率直に伝えると、九針は首を傾げた。

「なんばあわん……？ 天上界の言葉か？」

「あ？ ……まあ、そんな感じ。一番って意味だよ」

「ふうん……一番、一番か。次郎太は私が好みなんだな。ふふん、異性に好意を持たれるのは悪くない気分だ」

「どういう意味だ。……そのままの意味なのか？ 九針ほどの容姿なら、それこそカルト的な人気が出てもおかしくはなさそうなのに。現代なら間違いなく世界一の美少女だと評判になるだろう。」

ちよつと第一印象が神聖な生物っぽくて腰が引けるし、別に好意を持って居るわけでもないが、誤解を解く必要性を感じないので黙っておくことにする。くどいようだが、俺が好きなのはあくまで歴史上の星章院賦であつて、実人物の九針ではないのだ。これが現実である以上、そこらへんの線引きはきっちりしておかないとイケない。記録と現実とは別物なのだから。

「約束通り、衣食住を提供しよう。次郎太はここに住め。私もあの家を引き払い、以後はここを寢床にする。美少女3人との同棲だ、昂ぶるだろう？」

「……まあ、落ち着かないって気分ではあるね。それで身の安全の方は？」

「身の安全に関しては、私が常に共にいるとは限らないから千景に任せろ。いいな」

「——イロがこの方を？ 護衛？ 護衛するでござるか？」

「ああ。私もういいと言うまで、貴様自身と同等に大事にして守れ。この件で拒否は許さん」

「……はあい。山場様を守れば良いんですね。分かったでござる」

あからさまに嫌そうだが千景の反応は理解できる。俺だつて見ず知らずの少女を、自分と同じぐらい大事に守れと言われても納得でき

ない。絶対に嫌だと拒絶されなかつただけ有り難いと思おう。

その千景に対して微笑を浮かべた九針が手を伸ばし、義妹の頭を優しく撫でてやった。不満そうな表情を崩さなかつたが、千景は気持ち良さそうに目を細めている。まるで子犬だった。

これでいい。一先ずは、これで。

居場所がなく、戸籍がなく、職能がなく、伝手もない。知識はあっても活かせるあてはなく、展望もなかつた。だがこれでお先真っ暗だった状況から、一旦抜け出せたと考えていいだろう。

落ち着いて今後について考えられるし、なんなら自身を襲った魔法災害についても考察できるようになった。住む場所は少しアレだが、身の安全に関しては九針が後ろ盾になってくれたし、直接的な暴力への盾として、これ以上は望めないだろう千景という大剣豪を得た。

俺はちらりと自分の左掌を見る。そこには俺の【勾玉】があつた。魔法災害【神隠し】の時間遡行に見舞われる直前、なぜか俺の魔力が減少して【勾玉】が黒ずんでいたのに、今は魔力が回復して元の青さを取り戻していた。魔力とは血だ、血を流していないのに魔力が減少していったのはなぜだ？ 原因を突き止められたら、きっと根本的な問題を解決できる気がする。

根本的な問題。それは、俺の生活基盤がある現代への帰還だ。

現代と過去の時代を比べると、やはり安全面は現代の方が遙かに上である。身の安全の確保を図るなら、現代に帰ってしまった方が良い。無理なら無理で諦めるが、可能性があるなら模索する。

例え無理だと判明しても、別に絶望はしないだろう。そういうものだと割り切れる。薄情かもしれないが、そういう価値観でいるのが俺という人間だ。

——そこまで考えていると、不意に千景が興味深げに俺を見ているのに気づいた。

「……千景さん。俺が何か？」

「イロのことは呼び捨てでいいでござるよ、山場様」

「……じゃあ、俺も名前と呼んでくれ。山場様って呼ばれると背中がむず痒くなるし、これからはもう山場って苗字は捨てるからさ」

「どうしてでござる?」

「悪目立ちしたくないんだ。ただの次郎太でいた方が、これから色々都合がいいはずだと思う」

「なるほど……? では、次郎太殿と。次郎太殿は、随分と面白い特技を持つているようですね」

「……特技? 何が? 俺……何かしてた?」

突然指摘されて困惑する。特技と言われても、俺は今何もしていないかった。強いて言えば今後の展望や、自身を取り巻く諸々に思いを馳せていただけだ。

千景の言葉を聞いて、九針が興味深そうに未来の大剣豪へ問いかけた。

「千景、次郎太の特技とはなんだ?」

「えっと……多分ですけど、次郎太殿は今、姉上の命令にイロが返事をして、次郎太殿がイロの視線に気づくまでの……ザツと2秒ほどの間かな? それぐらいで姉上の3倍以上の早さで思考してたでござる。頭の回転が早いなんてものじゃない、化け物でござるな」

「……え?」

「ふうん……?」

俺が、九針より3倍以上の早さで思考していた? なんだそれは。困惑して九針の方を見ると、彼女は実に骨太な笑みを浮かべていた。

「どうやら俺の疑問には答えてくれなさそうだ。率直に千景へ訊ねたほうが良い。」

「……なんで俺の、その……思考速度? みたいなのが分かるんだ?」
問うと、千景は自らの左目を指した。……目? もしかして【魔眼】か?

魔法学の定義する魔眼とは、魔力の働きにより常人とは異なる視界を宿すものだ。

例えば数字が色に見えるとか、人間の心が見えるとか、未来や過去を視たり幽霊を視認したりできるものを魔眼と定義している。無論、現代だと魔眼持ちなんて1人もいない。

千景はすっかり伝説上のものでしかなかった魔眼を持っているのか。だとすればそれはどんなものが視えている？ 安直に考えるなら人の心を視る魔眼といったところだが、まずそれはない。人の心を視て取れるなら、俺の思考から類推して俺の素性が露呈しているはずだ。

現に今の千景は感心している顔をしているだけで驚いた様子がない。俺が未来人だと知れば少なからず驚くはずなのにである。であれば、千景の魔眼が映す視界は――

「ほら」

千景が笑う。

「また目まぐるしく考えてる。車輪がくるくる高速で回っているでござるよ」

「車輪？」

「はい。イロの左目は魔眼でござる。視えるのは【知性の輪】ですね。くるくるくるーっていっぱい車輪を回せる人が頭の良い人でござる。この魔眼で視たら、イロはその人の頭の良し悪しが分かるでござるよ。車輪の色も判断材料になりますね」

「色。俺とか九針は……何色が聞いてもいいの？」

「構わないですよ。次郎太殿は黒色ですね。姉上が赤色で、葉子が黄色、イロは白でござる」

俺が黒。九針が赤。葉子が黄色。千景が白。レベルは『千景が九針を引き合いに出した』という事実があれば判断できる。千景は目に見えて九針を慕っているし、見たところ彼女は素直な性格だ。なら心理上、比較対象を出すなら一番上を持つてくると推測できる。

恐らく三義姉妹の内でも知力が高いのは九針だ。なら黒がこの中で最上位、次に赤、黄色、白という順だろう。それを考えると……九針よりも思考速度だけは倍以上早いことは十分な能力証明だと言える。千景の言うことが本当なら誇れる力だ。

だが図に乗ってはいけない。思考速度がイコールで知力に繋がるわけではないのだ。いくら愚者がゴチャゴチャ考えたところで、賢者の閃きには到底及ばないだろう。

それに……俺の思考速度が早いだって？ 現代にいた頃はそんな自覚は持っていなかった。

元々そうだったから気づかなかっただけか？ それとも……時間遡行を境にこうなったのか？

好奇心が疼く。解明したい。自身の状態を克明にして把握したくなかった。

「——なるほど。千景が言うなら信用できるな。元々頭の回転が早いとは思っていたが、そこまでとは思っていなかった。どうやら私は、本当に頼れる知恵袋を手に入れられたのかもな」

満足げに九針が言う。もしかして彼女は、千景と俺を引き合わせることで【知性の輪】とかいうのを視させ、評価基準の1つにしようとしていたのか。抜け目がないな、と思う。

「顔合わせは済んだ。次だ」

「次？」

「次郎太がどの程度、武芸の才を持っているか確かめるのさ。私も腕に自信はあるが、私より千景の方が精度は高いからな。武芸の試験をした後は、葉子に魔法の才を見てもらうつもりだ」

それが終わったら飯にしようと言九針は言うが、俺は露骨に顔を顰めてしまった。

運動能力に自信はある、限界も把握していた。だが魔人からすると極めて低レベルなものに見えるだろう。九針からの評価を落としたくない俺は、試験を拒否できるか探りを入れてみる。

「……俺、魔法も武芸もからつきしなだけだ」

「今はそうでも、これからもそうだとは限らないだろう。物は試しだ、四の五の言わずにやれ」

拒否権はなし、と。素人だと主張しても意味がなかったということ。は、恒常的に俺を鍛えるつもりなのかもしれない。有り難いことなのだろう、しかしはつきり言っただけだった。

だって現代人が魔人に勝てる要素なんて皆無なのだ。それだけ魔力量の差は決定的な戦力の格差に繋がる。例え俺が一生を捧げて武芸を磨いても、魔人の達人相手には一太刀で斬り殺される程度にしか

ならないと思う。なら、どれだけ俺を鍛えても無駄骨を折ることになる。鍛えられる過程で辛い思いをするのに、成果もなく喜んで修行するようなマゾヒストにはなれない。

ゴネるのもいいが、それだと情けなさが前面に出る。仕方ないから大人しく試験を受けて、首から下は役立たずな奴だと思われた方がいい。評価点は下がるかもしれないが、千景のお蔭で九針からの評価は高まっている。これぐらいなら収支はプラスのままだろう。

そう思っただ観念する。——しかし、試験は実施されなかった。

「お姉さま、ご歓談の最中に失礼致しますわ」

隣室から、今度は自身の手で襖を開き、葉子がやって来たのである。

その表情は先程の柔和なものから、真剣なものへと置き換わっていた。

「繁信が境内の結界を越え、こちらに向かっています。依頼人を連れてくるようですわね」

それを聞いた俺は思った。

（——小説だったら、俺は『風雲急を告げる』とでも書いてる場面だな）

六話 【八咫】

「姐御ッ！」

九針に伴われて本堂の外に出ると、彼女の顔を見た黒髪黒目の男が躊躇なく跪いた。

芦毛の馬がいる。九針の鳳翔月影ほどではないが、こちらも現代馬なんて目じゃないほど立派な体軀を誇っていた。この芦毛の馬を駆って男はやって来たようだ。

話には聞いていたが、どうやら本当に九針は無頼の頭であり、姐御と呼ばれているらしい。鬼の眼と書いて「鬼眼きがん」と称される、義侠の一党。それは史料には載っていないものである。

魔人基準だと17歳の九針は小娘どころか少女とも言えよう。にも関わらず大の大人が傳えているのだ、九針のカリスマ性の高さは証明されたと言っている。何が起こるのか、きちんと見ていよう。

「どうした、シゲノブ。随分な慌てようだな」

「すまねえ。けど姐御にどうしてもこの婆さんを会わせなきゃなんねえって、おれ……」

「ふうん……おや、誰かと思えばフカウラ町のチヨ婆じゃないか」

男の名前はシゲノブというらしい。シゲノブは1人の老婆を伴っている。幾つかの衣服を継ぎ接ぎしたのだろう、粗い生地 of 襦袢の袖を着ていた。積年の辛苦によつてか全身に刻まれた皺は深く、頭髪の色は抜け落ち、浅黒く日焼けした肌にシミのない箇所は見当たらない。チヨというらしい老婆は珠が幾つも抜けた数珠を手に、九針の顔を見た途端にほろほろと滂沱の涙を流した。

よたついた足取りで本堂の階段前まで歩き、跪いた老婆が謔言のように九針の異名を呼び、両手を合わせて拝む。その様はまるで、本物の仏を前にした敬虔な信徒のようであった。

「き、鬼眼しやまさま……鬼眼しやまさま……」

歯が抜けているらしい。発音が悪く、滑舌も同様。跪いて嗚咽する

老婆の傍に歩み寄った九針が、老婆の背中に手を回し優しく抱き起こす。ただならぬ様子だ。堪らず、固唾をのんだ。

「どうした、チヨ婆。何か辛いことでもあったのか？ 私に訴えたいことがあるんだろう、なんでも言ってくれ」

「き、鬼眼しやま……あ、アタシや、アタシや……もう、もお生きひひやおれん……」

「おいおい。老いぼれるにはまだ早いぞ。私が婿を捕まえて、子供を拵えたら産婆になるんだと言ってくれていただろう？ 私の子を一番に抱き上げるのは自分だとな。なのに生きていられないなんて、悲しいことを言うんじゃない」

「でも、でもなあ……鬼眼しやま、聞いておひゆれよ……アタシの、アタシの倅が、倅がな」

「文太がどうした」

——そこには歴史に記された英雄の姿がある。誰よりも民衆に親身になり、慈悲深く寄り添った、大徳とも謳われる人格者〔星章院賦〕が。

史料では彼女が旗揚げする以前の記述はほぼない。あつてもどこそこの生まれで、いつ頃に義妹達と出会ったという程度だ。

しかし民話、伝承などには語られている場合がある。その殆どが眉唾ものの伝説だったり、神話めいたこじつけだったりするのだが——もしかしたら俺は今、歴史に埋もれた九針の足跡を目にしているのだろうか。数多い伝説、そのいずれかの光景を。

「アタシの倅が……土豪の手のモンに、連れてかれしようだった孫を、助けようとな、してな。き、斬られてしもおたんよ……ああ、ああ、アタシの倅が死んで、死んでな。孫は連れて行かれて、もうアタシの、アタシの全て、無くなって……うう、ううあああ」

「文太の娘の楓が連れ去られたと。それで？ チヨ婆、お前は私にどうしてほしい？」

「……お願ねがえします、お願ねがえします……鬼眼しやま……孫を助けておくれ……文太を、文太を殺したモンを、あの鬼畜を……！ こ、殺しておくれ……！ これで……これで、どうか……！」

なけなしの財貨を全て持ってきたのだろう。老婆は懐から銅製銭貸を掴み出し、皺だらけの両手で捧げた。

その銅製銭貸は、今から300年先まで流通していた永銭と呼ばれる物だ。価値は非常に低く永銭では取引に応じない商家が多かつたらしい。その永銭が8枚……たつたの8枚である。

老婆の財産はそれしかないようだった。

どうするつもりだ。そう思い九針を見る。すると、彼女は老婆の両手を押しやり、永銭の受け取りを拒絶した。絶望したように顔を上げた老婆に、竜虎の如き少女英雄が微笑みかける。

「チヨ婆の怨嗟、確かに聞き届けた。任せておけ、文太の仇は取ってやる。楓も助けよう」

「鬼眼しやま……」

「銭は要らん。何を勘違いしているかは知らんが、私は怨嗟を汲み取るのに銭を取りはしない」

「う、うう、ううううう」

感激したように嗚咽する老婆を助け起こし、九針の傍らにいた葉子へと預ける。葉子は心得たように老婆を連れ、本堂の中へと入って行った。

後に残ったのは、能面のような無表情と化していた千景と九針、俺とシゲノブだけである。

跪いたままのシゲノブへ一瞥を向けると、九針は慈愛に溢れた声音から一変して、酷薄な声音で問いを投げる。ぶるりと背中を震えさせたシゲノブが、下げていた頭を更に低くした。

「——繁信。なぜあんな婆さんを連れてきた？ あの婆さんは偏屈で有名だ、人望も横の繋がりもない。米の蓄えは雀の涙、おまけに銭すら持っていないんだぞ」

おや、と思う。

たつた今的一幕は、まるで戦国史演義の主人公っぽいオーラを出していたのに、急に正史の計算高い一面が現れた。てつきり任侠映画みたいなノリなのかと思ったが違うようだ。

九針は淡々と、シゲノブを詰問する。

「これでは稼ぎにならん。フカウラ町は閉鎖的な所だ、外部に今回の美談を広める役がない。これではなけなしの風評を得るのにも、自分で噂を流さねばならなくなる。お前、まさか私にタダで働けと言うのか？ あまつさえ声望を高めるために自分で噂を広める手間をかけるか？ 一度タダで働いてしまえばな、以後の仕事でも足元を見られてしまうんだぞ。飯の種を潰す気か？」

「そんなっ！ そんな滅相もない！」

平身低頭した男が焦ったように弁解しようとする。しかしそれを切り捨てるように、冷淡な貌をしている千景が刀の鯉口を切つていった。

いや、だから判断が早いんだって。なんでキルしそうな雰囲気なの？ シゲノブさんが何か言いたそうなんだから聞いてやれよ——俺はそう思い、若干呆れムードを漂わせてしまう。

そんな俺の空気を切り裂くように進み出た千景が、絶対零度の眼差しでシゲノブを見下ろした。刀に置いた手が、今にも刃を引き出しそうである。

「姉上の言う通りでござる。タダ働きはよくないですよ。おまんまを食いつばぐれると辛い思いをするんですから。繁信さん……ケジメ、つけるべきなんじゃないですか？」

「千景の姉貴……！ 後生でさあ、どうかおれつちの話を聞いてくれ！ 斬るならその後でもいいはずでさー！」

「とか言ってますけど、どうします？ 姉上」

「……あはっ！ 冗談、冗談だよ繁信。お前は馬鹿じゃない。訳があることぐらい察しているとも。だからそう怯えないでくれ、きつと大事な話があると信じているから。さ、話してみるといい」

「じよ、冗談ですかい……やめてくれよ姐御、心臓に悪いぜ」

すまんなと軽く謝った九針の横顔を見る。その顔色や今までの言動から読み取れる性格上、かなり真面目に不機嫌なのが伝わってきた。下らない理由だったら冗談が冗談でなくなりそうである。

おっかないな、とは思わない。話に聞いた彼女の稼業的に、面子や信用は大事なものだというのは分かっていた。その面子に関わる事

態を引き起こしたなら、シゲノブは責められて当然だろう。

だがそうはならない。冗談は冗談のまままで終わる予感がした。

九針がシゲノブは馬鹿ではないと言うなら、なんらかの理由があつてしかるべきだろう。見た感じ、本当に大変な報せを運んできた雰囲気がある。頭を上げて額に浮かんでいた汗を拭ったシゲノブが、一瞬俺の方を見た。誰だコイツという疑念が顔に出ていたが、それより九針への報告を優先することにしたらしい。彼は勿体ぶらずに告げた。「姐御も聞いてると思うんですがね、ここら近隣に「鬼」が棲みついたって噂があるじゃねえですか」

「ああ、それが？」

鬼？ 現代から遡って200年前に姿を消し、絶滅したと認定されているあの妖怪の？

好奇心が湧いてくる。鬼といえば、強力な個体だと名のある剣豪をも葬り去れる、「魔法生物」の中でも特に臂力と魔法抵抗力に優れた存在だ。一部の超抜級の個体では、伝説上でも討伐されたという記述がない鬼神、朱天童子が有名だろう。その鬼がアオモリ県に棲みついていたなんて話、聞いたことがない。ガセネタか、あるいは単に歴史に残っていないかっただけか？

シゲノブはまた額に浮いた汗を袖で拭い、九針を見上げながら続ける。

「おれあてつきり、あのババアの孫娘は、その鬼への生贄にするために連れて行かれたんだと思つてたんですがね、一応おれらのシマが荒らされねえか確認ぐれえはしようとしたんです」

「殊勝な心掛けだな。だが鬼にかかずらうほど私達は暇じゃない。城主に報せて討伐隊を編成させればいいだろう。まあ……ねぐらをこちらで見つけておけば恩は売れるか。ご苦労だった」

「恐縮でさ。そんで、鬼のねぐらが何処にあんのかつてのを、あそこの土豪の……確か貝塚つて奴の用心棒の後を尾行けて、探つてみたんですがね。そこでおれあ見ちまつたんです」

「ふうん？ 想定外のものでも見つけたのか。何を見つけた？」

九針の機嫌が僅かに直る。配下らしきシゲノブが無駄骨を折り、考

えなしにチヨ婆を連れてきたわけではないと察したのだろう。声音からそれを察したらしいシゲノブは安堵したように言った。

「遠目でもはつきり見えやしたぜ。ありやあ……【リュウ】でした」
「リュウ？」

男の報せに鬼眼と称される少女が目を見開く。リュウだつて？と俺も呟いてしまった。

信じられない。鬼だけではなく、自然の一部とまで言われる龍まで現れているのか。

何かを思案しだした九針を尻目に、訝しげに千景が問い掛けた。

「リュウというと、龍神の眷属ですか？」

「いえ、ありやあ多分、【外州】^{がいしゅう}から流れてきた奴なんじゃねえかって思いやす。龍神の眷属つてのは蛇を巨大化したみてえな外見^{なり}をしてるじゃねえですか。おれが見た奴は……どでけえ頭にぶつとい角を2本生やして、メチャクチャ鋭そうな爪を持った手と、蝙蝠みてえな翼を持ってやした。尻尾は筋肉がみっちり詰まってる……えつと……」

「——横から失礼」

【外州】とかいう聞き覚えのない単語を一旦スルーして、見たままの外見を説明しようとするシゲノブを制する。

俺を見たシゲノブの顔は戸惑いを表していた。畏怖しているらしい親分の九針の横に、俺みたいなガキがいたらどう接したらいいか分からないだろう。俺は会釈をして自己紹介する。

「シゲノブさん、俺は次郎太つていいいます。こっちの九針の客人です」
「……！ あ、姐御のお客人でしたか、これは挨拶しねえで失礼しやした！」

「こちらこそ。それよりシゲノブさんの見た奴つて、もしかしてトカゲに似てたりしますか？」

「へ？ あ、ああ……言われてみりや、確かに似てたよう……？」

「次郎太、貴様は知っているのか？」

紛らわしい。【リュウ】は龍ではなく、竜だったようだ。

片眉を跳ね上げた九針が声を掛けてくるのに振り返り、俺は小さく

領きながら片膝をつく。

地面に指を沿わせて簡単な絵を描いて、どんな奴なのかを説明するためだ。美術の授業以外で絵を描いたことはないが、デフォルメされたドラゴンを描くぐらいならなんとかあった。

「たぶん、シゲノブさんが見たのはこんな感じの外來種——西洋の竜なんじゃないかな。蝙蝠の翼とトカゲに似た外見ときたら、そうしか思えない。西洋の竜だとドラゴンって言った方がいつか」

「セイヨウ……とはなんだ」

「え？ あー……南蛮って言えば伝わる？」

「南蛮？ ふうん……外州を越えてヤマト本州にまで辿り着いたのか。その【どらごん】とやらは手強そうだな」

「……ちなみに話に出てる、その外州ってのはなんなのさ？」

訊ねると、こいつマジかつて目で見られた。主にシゲノブと千景から。

九針は特に驚くことはなく、苦笑混じりに桃色の髪を掻き上げる。

「南蛮や【どらごん】は知っているのに、外州を知らないとはな。知識の偏りが酷いぞ」

「……しようがないだろ」

「もう何を知っていて何を知らないのか分からんから、1から10まで懇切丁寧に教えてやる。いいか、これがヤマト本州で——」

片膝を地面につけていた俺の隣に、同じ姿勢で屈んだ九針が白魚のような指で地図を描く。それは人工衛星で捉えたマップのように精巧な、ヤマト列島の形だった。

ヤマト列島の地図が最初に作成されたのは西暦900年代である。自身の生きている国の正確な形を、どうしても知りたくなった時の皇王が作ったのだ。該当する史料が紛失しているため詳細は不明だが、土地そのものをサーチする魔法を、国土全体を覆う規模で発動したらしい。全く以て意味不明なほど規格外な大魔法だが、お蔭でヤマト地図は完成したという。

恐らく九針は寺小屋で、知識人である学問の師からヤマト地図に関して学んでいる。でないとな九針が知っているわけがない。大昔から

地図があつたとはいえ、貧しいと学問に触れる機会はないのだ。

これぐらいは知ってるよと、俺は言いそうになった。だが、九針が続け様に昼栓半島や大華大陸を描くのを見て口をつぐんだ。

なぜヤマト列島を描いているのに、そんなところまで描くのだろうか？ 俺の疑問を晴らすかのように、九針は昼栓半島とヤマト列島の間にあるヤマト海の地点と、ヤマトのキュウシユウ地方と大華大陸の間にある東ナシ海の地点、それから太平洋の3分の1の面積を、その指先で雑に塗り潰した。そうして塗り潰した地点を指差して彼女は言う。

「……ここが外州だ」

「……え？」

「人間の生息不能地点、いわゆる化外の楽園という奴だな。ここには鬼をはじめ数多くの妖が棲んでいる。コイツらは縄張り意識が強くてな、余所者が通るのを断固として認めない。どらごとやらが本当に南蛮から来たとすると、奴さんは態々この海洋を越えた後、外州を突つ切つて来たことになる。道中で邪魔する妖を蹴散らしながらな。とすると、割と真面目に脅威になるぞ」

九針は太平洋の方を指差しながら言い、手を叩いて指先の砂を払った。

食い入るように地図を見る。信じられない思いのまま、地面に描かれた地図を見て訊ねた。

「……もしかしてなんだけど、この塗り潰した箇所って……地続きの土地だったりする？」

「当たり前だろう」

「……海、とか。そういうのは？」

「ない。太平洋から南蛮までは海に面しているが、見ての通りアオモリ県は外州に面している」

「……」

ヤマト海、東ナシ海が無い。太平洋も3分の1ほど陸地としてヤマト列島に組み込まれている。

海があつたはずの箇所が、地続きの土地で繋がっている？

なんだそれ、と思う。やめてくれとも思った。

今まで俺は、自分が時間を遡ってしまったのだと考えていた。だが九針の言が本当なら、俺が思い違いをしている可能性が出てくるのだ。時間を遡っただけではなく、よく似た平行世界に跳んでしまったという、考えたくもない可能性が。

そうなると俺の歴史知識が全く役に立たない。——いや、九針や千景、葉子の存在を鑑みるに、完全に役立たずとまでは言わないかもしれない。だが価値そのものは暴落してしまう。

もしかすると、かなりヤバイ状況なのかもしれない。早めに気づけてよかった。今後は時間遡行の他にも、世界線移動が起こった可能性も考慮に入れておこう。歴史知識という事前情報はあくまで参考程度に留めておく、変な先入観を持っていたら命取りになりかねない。「繁信、よく報せてくれた。お前の働きぶりは賞するに足る……コイツをくれてやろう」

「へへえ！　ありがとうござえやす！」

「銘は【一鬼】だ。一度抜けば誰かを殺めない限り鞘に収まらず、何も殺めないまま一昼夜を明かせば抜刀した者を呪い殺す妖刀だよ。その代わり鋼も豆腐のように切り裂ける。慎重に、ここぞというところを使え。鬼共のねぐらに關しては後で聞く。下がっていいぞ」

桃髪の少女が懐から短刀を取り出してシゲノブに放り投げる。慌てて妖刀を受け取り、シゲノブは畏まりながら芦毛の駿馬に飛び乗ると、馬蹄の音を立ててこの場から去って行った。

妖刀をあんな惜しげもなく与えた九針の様子に、なんとも言えない気分になる。妖刀も魔道具の一種だ、どんな呪いや曰くがあるろうと現代では貴重極まる代物である。なのに九針にとっては躊躇なく配下に与えられる程度の物なのだろう。嘆息して意識を切り替えた。

悩ましい問題を発見してしまったが、今はそれよりも気に掛けるべき点がある。そちらに思考のリソースを割いた方が建設的だろう。ニヤリと骨太な笑みを浮かべる九針に視線を向けた。

「次郎太が私の許に来て半日未満。早くも楽しいことになってきたな？」

「ぜんっぜん楽しくない。それよりさ、ちよつと確認したいんだけど」
「ああ……鬼と【どらごん】とやらに関してだろうか？」

「そ。俺の知ってる奴と知識の差異があるのか確認したいんだ」

流石に察しがいい。一連の話を聞いていて不可解に感じたのだ。

「俺の知ってる一般的な鬼ってのは、特異な能力はない代わりに、とにかく力が強くて生命力も高い、剛力無双の妖あやかしって認識なんだけど。その認識に誤りはある？」

「ないな」

「で、ドラゴンに関してなんだけど、ドラゴンってのはヤマトの龍とは似てるようで全く別の生物だ。ドラゴンは南蛮だと悪魔っていう、神様の敵対者と同じ視されることもある怪物なんだよ。龍は自然現象と同じ視されることもある存在だけど、ドラゴンは財宝を好んで溜め込む性質も含めて俗物的で、人の想像する邪悪の化身に近い。悪意を持った災害って感じかな」

「お高く纏まってる龍より親近感湧くが……次郎太はこう訊きたいわけだ。どらごんとやらは私も知らんが、鬼は他の種と群れになるのを良しとするのか、とな」

「うん。実際どうなの？」

「無論答えは否だ。仮に鬼が何かと争い敗れたとしても、同じ鬼以外に服従することはない。奴らの自尊心の高さは筋金入りだからな、同胞以外に服従するぐらいなら死を選ぶだろうよ。逆に鬼がどらごとやらを打ち負かしたら、普通は即座に食っているはずだ」

「わーお……」

どうやら文献に残っている鬼と、現実の鬼に相違点はないらしい。すると、嫌な可能性が浮上してきてしまう。もはやそれしか考えられないほどだ。

俺は手で額を押さえ、天を仰ぐ。

「シゲノブさんの話を聞いた感じ、鬼とドラゴンは一緒にいる。近場にいるらしいその鬼ってば十中八九、特異な能力を持った超抜級の怪物だよ。ドラゴンをどうやってか使役してるんだろうね。九針が言うには外州つてのを越えてくるぐらい強力な奴を」

「想定される中で一等楽しい想像だな？　なあ、千景」

「楽しくないですけど？　次郎太殿の言う超抜級の鬼っていうのは、イロと姉上がいたらなんとかなるでしょうけど……他にどらごん？　とかいうのがあるとなったら、葉子を連れて行っても無事で済むか怪しいでござるよ。面倒なんでアオモリの大名に投げちやいましてよ。これ絶対、大名が対応すべき案件ですって。手に負えませんってば」

「駄目だ。鬼とどらごん、どちらも私達で始末するぞ」

覇気を露わに拒否する九針ヘギョツとする。千景は常識的な判断を下しているのに、なんで道理に逆らうのか。いや千景も鬼を相手になんとかなると言う神経を疑うけども。

俺は正直、鬼やらドラゴンやらの脅威は文献でしか知らない。現代でも再現VTRを見たことがあるぐらいなものだ。だからいまいち危機意識は湧かないものの、危険生物であることぐらい分かる。

大名が軍を動かして当たる案件が、鬼退治、ドラゴン殺しの基本である。個人で倒そうとしても神話級の豪傑じゃないと無理だ。

「……ん？」

神話級の豪傑。現代から見た神話って、つい数百年前までのことだ。

戦国時代なんかもろに神話で。鬼柳千景は、戦国時代でも指折りの大剣豪。星章院賦……九針も千景には劣るものの、宿敵の北条収奪の配下、四天王の一人と互角に渡り合える猛者だ。葉子はよく分からないが、大魔法使いと謳われているのだから相応の戦力にはなるはず。なんだかイケる気がしてきたぞ？　いやいや、それでも危険だ。歴史の表舞台に立って、名を上げ初めてもないのだ。経験不足の若輩が粹がって、結果として死んでしまったら元も子もない。

本音を言うと生のドラゴンや鬼をこの目で見たい欲はあるが、触らぬ神に祟りなしである。みだりに命を危険に晒すのはナンセンスだろう。イケるかもと思いかけたのを考え直す。

「次郎太。貴様はどう思う？」

あ、だめだこれ。

九針が意見を聞いてきた時、その目を見た瞬間に俺は悟った。

是が非でもドラゴンと鬼を退治に行く、と。そんな決意が漲っている。同意しか求められていない。俺は嘆息して思案した。参謀役なら止めるべきだ、諫言も仕事の内だろう。が、討伐の作戦を考え、下準備をするのも仕事だ。今の俺の立場で止めるのは難しい。

「一応聞いておきたいんだけど、もしかして俺も行く感じ？」

「当たり前だ。どらごんと超抜級の鬼が相手なら、私と葉子、千景の3人では正直厳しいかもしれない。手の者を動かしてもいいが確実に足手纏いになる。ただの餌を提供しに行くだけの結果になるなら、最初から連れて行かない方がいいだろう。だが……貴様がいるだろう？」

「え？」

「私達3人だけでは、諦めた方が賢明だと私も思う。しかし4人なら？ 案外イケそうだとは思わないか？」

「……ちよつと意味が分かんないんだけど。俺の身の安全はどうなるんだよ」

真面目に分からない。魔人の中でも最高峰の3人と、なんで現代人であるクソザコナメクジな俺を含めるのか。「予言の存在」のフィルターが掛かり過ぎじゃない？ 目ん玉曇ってたりする？

心底意味不明なんですけど、みたいな顔をしていたのだろう。九針は苦笑した。

「謙遜はよせ。次郎太の力はもう分かっている」

「いやいや、なら俺が足手纏いにしかならないのは分かりきってるだろ？」

「ん……？ 本心で言っただけだ。自覚がないのか？ なら、気づかせてやる」

言っただけ、九針が無造作に手を伸ばした。その手は俺の頭部に向かい、彼女の指が俺の髪を掴む。

そして、怪訝な顔をする俺に構わず、

「いてっ」

ブチッ、と。髪の毛を2本か3本を抜いた。

何すんだこの野郎と文句を言いそうになる。だが言えなかった。九針は抜いた俺の髪の毛を、俺の目の前に差し出してきたのだ。

「……青い？」

そう、青かった。黒髪黒目であるはずの、俺の髪が、青い。

それは高魔力反応の発露。我が目を疑う色彩。啞然とする俺に、九針は言った。

「ヤマト人は黒髪黒目。だが私達のように【八咫】を目覚めさせた者は人の域を逸脱する。その証が髪や瞳、肌の変色だ。次郎太、貴様も【八咫】に目覚めている。つまりは私達の同類だよ」

「次郎太殿の魔力は、葉子級とは言わないまでも、姉上に匹敵していませんね。だからなんだという話ではありませんが、我々【超人】の中でも頭一つ抜けているのは確かでございます」

超人。つまり魔人……俺が？ しかも、現代人が失った八咫まで、俺が目覚めてる？

そんな馬鹿などは言えなかった。確かに俺の髪が青色に変色しているのだ。実際に目にしたことを否定は出来ない。だがそれでも信じ難かった。俺が魔人に……当世だと超人というらしいモノに変じ、九針と同等の魔力を宿しているだなんて……。

しかし、言われてみれば心の何処かで納得してしまう。

最初に九針と出会った時。葉子や千景と会った時。彼女達の魔力に驚きはしたものの、特に身の危険を感じたりしなかったのだ。現代人が超人級の魔力保有者に出会った場合、魔力酔いを起こして昏倒してしまうだろうと言われているにも関わらず。

九針は俺の魔力量を、あのイチヨウの木の下にあった古民家で、手段は不明だが確かめている。千景は魔眼保有者だ、物言いからして俺にはまだ言っていない力があり、それで魔力量を識別できるのだろう。となると、本当に——俺は超人なのか。

「で。貴様の【八咫】は何を映している？ よければ見せてくれないか？」

「ちよつと姉上！ 不躰すぎますよー！」

呆然としている俺に構わず、何気ない調子で訊ねてくる九針と、な

ぜかそれを咎める千景。

のろのろと視線を向けると、何やら誤解したらしい千景が焦ったように九針の袖を掴んだ。

「ほら、謝ってください！ 次郎太殿が怒っちゃってますって！」

「……いや、別に怒ってないけど。なんで俺が怒ってるって思ったんだ？」

「え？ だ、だって【八咫】は心の形を映すんですよ？ そんなの自分の最も本質的なもので、他人に知られたくないものだと思うんですけど……」

「あー……なるほど、言われてみればそう捉えられなくもない、かあ」
俺の反応に困惑している千景の言葉に納得する。確かに人に知られたくないと思う人はいるだろう。俺自身は別に見られて困ると思わないが積極的に見せたいとも思わない。

思わないが、九針達には見せておいた方が得策だろう。そうした心の形で、信用を得られるなら安いものだと思う。だが、

「俺は見せてもいいけどさ、問題があるんだ」

「なんだ？ 自分の心を見せる代わりに私の【八咫】も見せると？ 私は別にいいぞ」

「そうじゃなくて。いや見せてくれるなら見たいけど、その、あれだよ。【八咫】って……どうやって出すものなんだ？」

そう。それが問題だ。現代人は【八咫】を失っている。何がどうなって俺が【八咫】を目覚めさせたのか、皆目見当もつかないが、肝心要の出し方が分からないとどうしようもない。

「んー？ そんなの簡単に出せるだろう？」

「生まれた時から超人だったら怖い姉上と一緒にしないであげてください。いいですか、次郎太殿。基本的に【八咫】は後天的に覚醒するものです。例えるなら体にもう1つ余分に腕が生えるようなもので、有るのが当たり前みたいな感覚で出せるようになります。次郎太殿もその気になったら簡単に出せるはずですよ。……はずでござるよ」

言われ、首を傾げながら目を閉じる。するとあっさり見つけられた。

今までどうして気づかなかったのかと思うほど自然に、有るのが分かる。言語化して説明しろと言われたら難しいが、まるで……俺の【勾玉】に張り付いているみたいだ。

シールが貼られている感覚？ 敢えて言ったらそれが近い気がする。

俺は左掌を上向きに開き、今までもろくに使った試しもない魔力を、慣れないながらも噴出させた。すると【勾玉】のある俺の左掌から、一枚の鏡が出現する。

「ホントに出た……」

愕然とした調子で呟く。左掌の上に浮遊する、半透明の銅鏡に似た鏡だ。これが俺の……現代人が失くしてしまっていた【八咫】なのか。なんとも言えない、感動めいた解放感がある。ずっと傍にあつた探し物が、やっと見つけられたかのような安堵の念にも似ていた。

なぜ俺は——当世風に倣って言うところの——超人に変じているのだろうか。なぜ【八咫】を出せるようになっていたのだろうか。やはり、俺を襲った魔法災害以外が原因なのか……？

「見せてみる。私のも見せてやるから」

「あ、ああ……」

九針が自らの鎖骨に触れる。彼女の【勾玉】はそこにあるのだ。九針もまた【勾玉】から【八咫】を剥がすようにして出現させ、それを俺の方へと差し出してきた。

千景が憐れむような目で俺を見てくるのが気にはなったが、俺は吸い寄せられるように自分の物より先に彼女の【八咫】を見る。そこに映し出されている神話生物の威容に、俺は純粹に感嘆した。

九針の【八咫】は、一匹の狐を映し出していたのだ。

無論、単なる狐ではない。九本の尾を具え、桃色の毛並みに金色の瞳を有した、見るも鮮やかな大妖である。

金眼桃毛の天狐。これが九針の心の形。歴史に燦然と煌めく英名を刻んだ、稀代の大英雄の魂の姿。これを見れば、紛れもなく彼女が傑物であると確信するだろう。

「ん……んんう？ なんだこれは……なあ、次郎太。貴様のコレは、な

んだ……?」

魅了されてしまいそうな輝きを秘めた【八咫】だ。危険な香りがする。だが目を逸らそうという気にもならない。俺が九針の魂に見惚れていると、とうの九針が当惑して訊ねてきた。

どうやら俺の【八咫】に映った物を見て、正体が判別できなかったのかもしれない。もしかしたら俺の魂の姿は、当世のヤマトだと見聞きすることが出来ない動物なのかもしれない。なかった。

なんとなく、自分では見たくない。自分の魂がみすぼらしい姿だったら嫌である。だが見たくはなくても気にはなった。恐る恐る自身の【八咫】へ視線を向けて——俺もまた、困惑した。

「……ろ、ロボ?」

俺の【八咫】に映ったもの。

それは、青い装甲を有する、人型ロボットだったのだ。

七話 【機械の心を持っている】

子供の頃の俺の渾名はロボ君だ。命名の理由は、笑わないし怒らないから、らしい。

周りの子供達が喜び、楽しみ、怒り、悲しんでいても、まるで共感できずに一歩引いた場所にいた。勉強も、運動も、パソコンにデータを打ち込むみたいに簡単に出来たし、出来ない人の気持ちがるで理解できなかった。また、理解する気もなかった。

いつしかロボ君という渾名は、ロボ野郎と乱暴な呼び方に変わり、陰湿なイジメへと発展していく。子供は聡い生き物だ、自分達の中に異物が混じっていることに、無意識に気づいたのだろう。

イジメを受けたからといって、別段気に病むようなことなんてなく。ただ、イジメを受けるようになってしまった原因を探し、周りを観察して、人は自分と違うモノを迫害する傾向にあるのだと学習した。だからどうしたとは思ったが、俺の両親所有者が随分と気に病んでいるようだったので、イジメられないようにするにはどうしたらいいのかと解決策を練り、結論を出した。

環境の修正は困難。河岸を変えるべし。

俺は親に訴えて転校した。そして転校先では別人みたいによく笑い、よく喋り、積極的に周囲と関わる人物を演じてみたのだ。モデルは転校前のクラスの人気者である。すると、転校先で俺はイジメられず、むしろ多くの人から好意的に接して貰えた。

なるほどと思ったものである。人はこういう人が好きなんだなと思った。悪くない成果だが、このキャラ付けはカローリ消費が激しい。小学校卒業後は低燃費のキャラクターでいこうと考えた。

中学生になってからは、明るいキャラクター性を残しつつ、インドア派な印象を付けるために、敢えて自身の運動性能を抑えて生活した。病弱なイメージを周囲に植え付けたのだ。

するとイジメは受けず、またカロリーの消費も抑えて生活できるようになった。今後はこのキャラ付けでいこうと決定し、それからの俺はガリ勉少年へと変貌していったのである。

それでも時々、勘の良い人から指摘を受けることはあった。きみって冷たいね、と。顔は笑ってても目が笑ってなくて気持ち悪い、と。感情がなさそうだななんて揶揄されたこともある。

酷い言い草だ。

確かに俺は他人に共感できなかった試しがないし、深い仲になろうとしたこともない。それでも快不快の感性はあるし、好きなものだったであつた。特に俺が好んだのは、^{データ}歴史だ。

数学なども好みの部類だったが、過去に残されたデータの蓄積という、人の文明の足跡に強い関心を持っているのである。そこから発展して論理の組み立てを行なう小説の作成にも楽しさを見い出せるようになった。作成した作品を酷評されたら人並みに傷つく心もある。それなのに感情がないだなんて、あんまりにもあんまりな物言いだろう。

とはいえ。

正直に告白すると、俺は他人への関心が皆無だ。好ましいデータを収集すること、収集したデータを活用した小説を作成すること、この2点ぐらいにしか興味がなかったのである。

魔法災害により過去、あるいは別世界線に跳ばされてしまった今は、データという形でしか知らなかった人物、魔法などのロストテクノロジーに強い関心を懐いてはいる。が、それだってデータ収集の一环でしかない。自分でもどこか他人とはズレていると思っていたが、自らは人間であるという自意識は常にあった。だってある意味俺より人間らしい人間はいないと思っていたから。

友人はいた。1人や2人ではなく、複数人も。円滑な人間関係を構築する術を学び、好かれはしても嫌われはしない、最適の人物像を自身に投影して生きてきたが、こんなの誰だって少なからず意識しているはずだと思っていた。だというのに——ほとんどのケースに於いて、なんらかの動物を心の形として映し出すという【八咫】が、

完全無欠の無機物を映すだなんて。

こんなの、想定外にも程があった。

まるで、お前は人ではなく機械なのだ、自分自身に示されたかのように。

驚愕している表層人格と共に、バックグラウンド深層心理内の俺もちよつとだけ衝撃を覚える。

「ろぼ？　ろぼとはなんだ？」

興味深げに俺の「八咫」に映った人型ロボットを見ながら、九針が訊ねてくる。千景は気を遣っているのか、こちらを見ないようにしてくれているのに、九針に遠慮する様子は全然ない。

俺は失笑しながら応じた。なんとなく、自嘲するような気分だった。

「正確にはロボットだよ。ロボは略称。ロボットは機械……つて言っても通じないかな。カラクリ人形みたいに組み立てられて、人に類似した色んな動作機能を発揮する奴だ。早い話、無機物だよ。生き物じゃなくて、道具の一種だ」

「ふうん？　ムキブツというのも初めて聞くが……なるほどな」

俺は改めて自身の魂の姿を見る。

半透明の銅鏡の中に、スリムなフォルムの青い装甲を纏った、単眼のモノアイを赤く光らせる機体がある。人型だが、人間味は欠片もなく、マネキンに近い印象を受けた。

装甲も薄い。機能的と言えば聞こえはいいが、随分と貧相である。装備品もなく、格納庫の中に死蔵されているロボットの素体と表現するのが的確かもしれない。こんなものが、俺の魂の姿なのか。下手に人型なせいで、却って滑稽に見える。きつと九針の目にもみすぼらしく見えているだろう——そう思ったのに、彼女は蕩けるような笑顔で言った。

「つまり次郎太の魂は神様なんだな。凄いいじゃないか」

「……はあ？」

素っ頓狂な台詞に聞こえて顔をしかめる。

俺が、神様？　意味不明だ。何が言いたい？　皮肉にしても笑えな

い。

そんな俺の反応が新鮮で堪らないとばかりに、九針は目を細めて俺の顔を見つめた。

なんらかの確信を得た顔。

熱の籠もった紺碧の瞳。

なんだ、と思う。なんで俺をそんな目で見る。

千景もだ、こちらは虚を突かれたような表情をしていた。

なぜ俺の反応一つで、そんな大袈裟なりアクションをする？

訝しむ俺をよそに、熱に浮かされたように九針は唱えた。

「人の自意識を『精神』というように、万物に神は宿る。道具にだってな。道具に宿る神は付喪神だと決まっているだろう？ 貴様は道具なんかじゃあない。付喪神の転生体たる人間だよ」

「……なんだよ、いきなり優しい台詞なんか掛けちゃってさ。もしかして俺を口説いてんの？」

「その通り。落ち込んでいるようだったから慰めてやったんだ。是非とも惚れてくれ」

「……………」

あけすけに言われ、無言でそっぽを向く。

少女は声を上げて笑った。俺の反応が愉快で仕方ないと。心の底から嬉しそうに——道に迷った幼子が、探し求めた人を見つけられたかのような安堵と、深い歓喜を滲ませた声音で。

何がそんなに嬉しいのだろう。

惚れてくれと言った声と目に、嘘や冗談は一寸たりとも混じっていないように見受けられたが……九針のことを考えると、どうも脳にノイズが走る気がする。それに関係しているのだろうか。

ん……ノイズ？ そういえば、と。今更な疑問が過ぎる。九針と出会ってからずっと、自分らしくない情動を覚えていたような……。

「きみさ……」

過ぎった閃きに、俺はじとりとした視線を桃髪の少女へ向けた。

「まさかとは思うけど、俺に魅了の魔法とか掛けてたりしない？」

問うと、九針は満面の笑みを消すことなく頷いた。

その動作の意味は否定ではなく、肯定。俺は苦い顔をしてしまう。ずっと何かがおかしい気はしていたのだ。イチョウの木の下にあった古民家で出会った時から、他人に対して全く魅力を感じたことがない俺が、九針に対しては惹かれるものを覚えていた。

葉子も、千景も、容姿端麗で魅力的だとは思う。しかしそれは客観的な評価であって、俺個人の主観による評価ではない。だが九針にだけはこれまでにない魅力を感じ、流石は未来の英雄だと感心していたのに。それがまさか、魔法によるものだったなんて……。

俺の内心を誤解したらしい九針が、ハツとして慌てながら弁解した。

「あ……ち、違う、違うぞ？ 早とちりはするな。私は魔法なんか使っていない。この私がそんなものを使うような卑劣な女に見えるか？

見えないよな？ 見えないって言え！」

「……………」

「私は生まれながらの超人だ。そのせいかは知らないが、私は無意識に他者を惹きつける性質を持っているらしい。誰からも好感を持たれ易いんだ。特に私の【八咫】を見た奴は、全員が私に魅了された。分かりやすいのが葉子だよ、アイツは私の魂を見たばかりに、私に全てを捧げると言ってきた。受け入れてくれないと死ぬとも。影響が薄かったのは、千景だけなんだよ」

「その話が本当だとして。きみ、明らかに自分から【八咫】を見せてきたじゃないか」

反駁すると、九針は動揺して言葉に詰まる。

一拍の間を置いて、彼女はしどろもどろに弁解を続けた。

「ま、待ってくれ。悪かった、悪気はなかったんだ。本当だぞ。だって、だってだ、初対面の時からこれまで、次郎太は私に傅かなかったんだ。もしかしたら……もしかしたら、私の魂を見ても魅了なんかされないんじゃないかって、期待してしまっただけ……」

「ああ、うん。勘違いさせてごめんだけど、別に気にしてないよ。うん、どんな力が作用したとしても、人に好意を感じるのには悪くない感覚だった。責める気はないから安心してくれ」

「そ、そうか……？」

「そうだよ」

顔を窺ってくる少女に、微苦笑して肩を竦める。もし彼女の言葉が本当なら、幼少期から身の回りにイエスマンしかいなかったのかもしれない。推察できる境遇や、その心情を想えば、九針がどうして俺のリアクションに一々嬉しそだったのか理解できる。

同情はしない。しかし本当に、悪くない気分だった。まるで俺が、普通の少年になれたみたいで、『普通の』というのに関心はないが、あれが一般的な青少年の情動なのだとしたら、貴重な体験をさせてもらえたことに感謝したい。

というか九針の発する魅了の力が、俺に通じていないわけじゃないから。寧ろガッツリ通じてる。俺の魂の形が無機物で、生物じゃないから他人に比べて効き目が薄いのもかもしれないが、俺らしくない情緒を得てしまう程度には効果が出ている。流星に全てを捧げる気になんてならないけども、もし九針と彼女以外のどちらを助けるかと問われたら、俺は迷わず九針を助けるだろう。

それぐらい魅了はされている。されているのだが、そこは黙っていいよ。何やら俺に魅了の魔力が効いていないと勘違いして、勝手に好感を持たれる分には好都合だからだ。

「次郎太殿」

安堵の息を吐く義姉を見たからか。

鈴を鳴らしたような美声で、千景が俺に呼びかけてくる。

振り向くと、薄い金色の髪の毛の少女は微笑を湛えていた。

「どうやら貴方は、姉上にとって無二の存在に成り得る御方のようにですね。どうか姉上のこと、よろしくお願いします」

「よろしくって言われてもね……こちらこそとしか返しようがないよ」

何せ現状唯一の生命線だ。よろしくしてもいいが、それ以上にきたい。機械っぽい魂をしても生き物としての本能はあるのだ、でないと異性の体に興味を持ったり、あけすけな九針の振る舞いに羞恥を感じたりしない。自らの保全の為に妥協するつもりはなかった。

頭を搔きながら視線を逸らす、典型的なお困りポーズを取って間を外した。逸れに逸れて脱線した話の流れを元に戻すために。俺にとって【八咫】の件は確かに大変な発見だったが、より重大な話が片付いていないのだ。個人的な問題は山積みでも、それより優先するべき案件を解決するのが先決だろう。お困りポーズを取った後は、溜め息を吐きながら九針と千景の顔を交互に見る。

「で、話を戻すわけなんだけどさ。結局のところどうすんの？」

「……………？ 何を、でござるか？」

「何をって……………そんなの決まってるだろ。鬼退治、ドラゴン殺し、どっちもやるみたいな話の流れだったけどさ、俺としてはぶっちゃけ反対なんだよね」

九針の中では怪異退治は決定事項らしいし、反対意見なんて求めていないのは分かっているが、この際はつきりと自分の意見を述べる。何も言わずに流されるのは御免だからだ。

すると若干居たまれなさそうな顔をしていた九針の目が、真剣な色へと染め上げられる。

「……………なぜだ？」

「なぜは俺の台詞でもあるんだけどね。なんで個人での討伐に拘ってるかは知らないし、なんなら拘る理由を教えてもらいたいんだけど……………それより気になることがあるんだ。ほら、さつき葉子さん……………葉子のところにグロ画像みたいな男が居ただろ？」

「ぐるガゾウ……………？」

「ぐるガゾウというのがどういう意味かは知らないが……………誰のことか言っているかは分かるよ。それがどうか——ああ、なるほどな。言われてみたら確かに気になるな」

千景は首を傾げるも、九針は俺の懸念に気づいたらしい。流石に部外者の俺が気づくぐらいだから、捕らえた当事者側の九針は察しが良かった。

「旭日党のことだろう、次郎太」

「そう。丁度タネサト城に旭日党の奴が潜入して来た時に、鬼とドラゴンが近場に現れるだなんて、幾らなんでも時期が重なり過ぎじゃない

いか？ 偶然ならいいけど、裏がありそうな気がしない？」

「例えば？」

「……そうだね。完全に想像だけで言わせてもらうと、例えば旭日党は、怪異の出現を予め知っていて、それを何かに利用しようとしている、とか？ そこらへんの事実関係を掴まない限り、不用意な行動は慎むべきだよ」

「ふうん……うん、一理ある。尤もな意見だ、熟慮するに値する諫言だよ」

ラノベの読み過ぎだと思うような展開予想だが、如何せん判断材料が少なすぎる。説得力に欠けるかなとは思ったが、どうやら聞く耳は持ってくれるらしい。九針は上機嫌に頷いた。

「私の身近には知恵の回る奴が葉子ぐらいしかいないから……その葉子も私の言うことを為すこと肯定しかしない。だからか、真正面から反対意見を出されるのは新鮮な気分だよ」

「あー……魅了系パッシブスキル持ちの悲哀だね。で、それよりこれからどうするんだ？」

につこりと微笑んだ桃髪の少女が、寸毫ほどの悲愴さを滲ませるのに取り合わず、早く決めろとばかりに結論を急かす。すると九針は自らの形のいい頰に指を添え、思案しながら訊ねてきた。

傍らで物言いたげな千景を無視して。

「次郎太はどうしたらいいと思う」

「俺に聞く？ さつきも言ったけど個人的には反対だよ。行かない方がいい。君子危うきに近寄らずってね」

「確かに不安要素はある。だが知らないようだから教えておこうか」

さつき言外にイロのこと馬鹿って言ってませんでした？ なんて小声で呟いている千景の頭に手を置いて、九針は俺の目を見据えながら告げる。

「怪異退治は分かりやすい勲功になる。武家の者も、そうでない者も、危険な妖を討つことで名を上げられるんだ。これぐらいは言われなくても想像がつくだろう？」

「まあね」

怪物を倒して英雄としての名声を得るのは神話の常だ。ありがたい話で、特に意外でもない。

「だが今の私達にとつて大事なのは、名よりも実だ。怪異退治の武勇伝なんざ興味はない。いいか次郎太、高位の怪異を討つとな、私達人間は自身の妖力を高められるんだよ」

「……へえ。そいつは、クレイジーだ」

「……へえ。そいつは、クレイジーだ」と首を傾げる千景をよそに、俺もまた思索する。

高位の怪異生物を殺めることで、妖力——恐らく現代で言う魔力を高められる。全く聞いた覚えのない未知の情報だ、俄には信じがたい話だった。しかしもしもその話が本当なら、九針が積極的に討ち取りに向かいたがる理由も納得がいく。

気になるのは、仮に万事上手くいったとして、どの程度の魔力の向上が望めるか、だが。そちらは口頭で聞かされて理解できるとも思えない。他の気掛かりを解消しよう。

「本来は鬼とかドラゴンに対応するのは大名なんだよね。先んじて九針が退治に行つて、首尾よく目的を果たせたとする。その場合、勝手に退治したことを咎められたり罰せられたりとかする？」

問うと、九針は端的に答えた。

「仕官を強要される可能性はある。だが私達が鬼や南蛮の龍を殺したと名乗り出なければ、怪異退治の莫大な恩賞が出ない代わりに、罰則が課せられることもない」

「じゃあ、俺を戦力として計上しなかった場合……じゃないな。俺がもしいなかったとして、九針なら鬼退治に出掛けてたと思う？」

「ん……？ んー……そうだな、もし次郎太がいなくても、私は千景達を連れて連中を殺しに行つていただろう。自分達の【草薙】の妖力を高めるためだ、危険を犯すだけの価値はある」

今【草薙】って言った。言ったよな。妖力つてもしかして魔力じゃなくて、現代人にはない【草薙】の動力、エネルギー源なのだろうか。気になるが……聞き出すのは後回しにしよう。

九針は俺がいなかったとしても行つていたと言う。その言葉が本

当なら、もしここが別世界線ではなく過去だった場合、九針達の生還は約束されているようなものだ。

それにキタカネガザワの裏の顔を担っており、星章院家の血を引いているとはいえ、今の九針の身分はあくまで町人。タネサト城にどんな被害が出たとしても責任は負わされない。なら、

「九針は旭日党の件を城主に報告して、対応を丸投げしつつ恩を着せるつもり、と。そんで鬼とかドラゴンは九針達が勝手に片付けて、後は知らぬ存ぜぬを通すつもりか」

「おっと、次郎太も乗り気になつたか？」

「俺は戦闘経験がないから、単なるお荷物にしかならないと思うんだけど。見学だけしてたらいいなら付いて行きたいかな」

自分から危険に近寄るのはナンセンスだが、生の鬼とドラゴンを見れるなら見たいという欲はある。完全に興味本位だし、身の安全に比べたら些細なものだけでも。

それに、俺自身の性能を把握したいという考えもあった。自覚はなにももの俺は当世風で言うところの超人になっているらしい、なら魔力がどの程度の働きをして、俺に何が出来るのかは理解しておきたい。折角ここには先人がいるのだ、是非指導してもらいたいところだ。

九針は俺の返答を聞いて満足げに頷いた。

「決まりだな。うちの仏様が繁信からの報告を受けているだろう。標的のねぐらを特定したら殴り込みを仕掛ける。早速支度をするぞ、千景、次郎太」

仏様ってなんの隠語だよ、というツツコミは呑み込む。

代わりに彼女が忘れているかもしれない案件を指摘した。

「さっきのお婆さんの依頼はどうするんだ？」

失笑が返ってくる。忘れていなかったらしいが、九針の返答は冷淡だった。

「旭日党と鬼、どらごんの情報を提供したら大名も大喜びさ。私が怪異共を殺したことを報せたら、これ幸いと積もった不祥事の数々を、邪魔な奴に押し付けて人柱にするだろう。大名も手頃に目障りな奴

を消せる、私は仇を取ったという名分を報酬としてもらえる、どちらにとつても得しかない」

ん……？ 自分達は怪異退治の武勲を秘匿するつもりなのに、大名には報せるのか？ それは……アオモリの大名と個人的なパイプがあると言っているように聞こえる。聞こえるが……深く聞いても面白くはなさそうなので肩を竦めるに留めた。

婆さんは可哀想だが、仇を取ってもらえたと思わせてもらえるだけ幸運だ。後は楓とかいう孫娘を助けてもらえたら万々歳なのだろうが、この分だと九針に救出へ労力を割くつもりはなさそうだ。

実に効率的な対処案である。しかしそんな後ろ暗いことをして九針は大丈夫なのだろうか。いつか足を掬われ、繋がりがあられるしい大名側から切り捨てられたりする恐れがありそうだが……いや、心配は無用だろう。

だって今は天秀130年だ。つまり九針は、1年後には旗揚げしキタカネガザワを離れる。

ヤマト史上最大の百姓一揆〔旭日の乱〕が発生する年だ、九針に構う余力はなくなるだろう。それを思えば気に掛ける必要はない。俺はそう思い、それつきりチヨ婆の一件を脳裏から消去した。

八話 【出立準備】

俺を襲った魔法災害が齎したのが時間遡行なのか、世界線移動なのかはまだ判断できない。外州の存在を見れば世界線移動が有力だが、神話に等しい時代なのだ。何があってもおかしくないため、判断は保留しておいた方が賢明だろう。

ともあれ現代ヤマトから当世にやって来て体感5時間が経過した。ここらで情報を纏める。

はじめに俺自身のこと。魔法災害の被災直前、俺の魔力が突如として不随意に消費し出した。そして当世に転移した直後には、恐らく俺は当世で言う超人に変貌していたと思われる。

現代人が失っていたはずの「八咫」を、あっさり取り出させて。俺の魂の姿が青いロボで。簡潔に述べるなら、俺はロボが人間みたいに稼働しているだけだよ、と自分自身に言われたようなものだ。

【八咫】を見た直後はそれなりに動揺したものの、間を置くと正直どうでもよくなった。そんなことよりも俺が魔人ないし超人であるなら、俺は当世で子供にも劣るクソザコではないことになる。これは実に喜ばしい発見だろう。少なくともそこらを歩いてる子供に戯れつかれてしまった際、誤って骨ポキーとかされずに済むと分かったのは幸いだ。

しかし九針の台詞を思い返すに、当世の人間でも【八咫】に目覚めるのは希少な例であることが伺える。これは現代の魔法学とははつきり乖離した事象である。現代だと俺のいる当世では、全ての人間に【八咫】があつたとされているからだ。外州の存在以外にも、ここが過去ではなく別世界ではないかと俺が疑ってしまっている要素の1つである。

その点に関してはまだ捨て置くとして、俺は俺の性能を把握できていない。俺は何が出来るのかを解明するのは急務だろう。明らかに危険人物である葉子は勘弁願いたいので、九針か千景に指導を頼みた

いところだ。——指導役として最も望ましいのは九針だと感じているのは、やはり彼女の魔力の性質による影響だろうか。自己保全の観点から言って、余り望ましい状態とは言えない。

が、この影響を悪くないと感じてしまっている時点で手遅れかもしれない。出来る限り早く九針の魔力の影響を取り除くのも急務だろうが、これに関して実害が出ていない内は後回しにしていいたい。

次に旭日党の件。九針達やこの存在がある時点で、仮にここが別世界だったとしても、元の世界に近似した世界であると予想できる。旭日党が乱を起こすのは天秀131年——西暦換算で1551年だから、もし1年後に旭日党が決起したなら俺の歴史知識に符合する。歴史知識と符合したら、ここは元の世界の過去だという見方を補強する材料になるだろう。

そして、これまでに出会った人達について。

シゲノブ、チヨ婆。この人達の重要度は現在高くない。後者は特に。前者に関しては今後も関わるかもしれないが、九針と千景の態度から見て切り捨てるのに躊躇するほどでもない人物だろう。積極的に友好を深める必要性は特に感じなかった。

九針はよく分からない。苦手ではないが、どう接したら良いか判じかねている。

彼女は星章院賦の少女時代だ。彼女は歴史上の偉人であり、幾つもの伝説を残した英雄である。そうした記録としての彼女が好きでファンだったが、いざ本人を目の前にしても困ってしまう。

俺はアイドルも好きだ。けど舞台の上のアイドルが好きなんであつて、好きなアイドルのプライベートやらなんやらは、全く以てどうでもいいと思うタイプである。見えないところで何をしていようが関知しないし、敢えて自分から暗部を見に行こうとも思わない。俺の見てない所で好きなこととして、勝手に満たされて幸せな人生を送ってくれと思うだけだ。

俺は今、自分の中で九針と『歴史上の星章院賦』を等号で結び付けられずにいる。俺なんかじゃ及ばない凄い子っぽいなあと感じるだけで、今のところ別に好きでも嫌いでもなかった。容姿が人間離れし

て美しすぎるせいで、却って遠い世界の人みたいに感じてしまっている。魔力の性質の影響を抜きにして分析すると、俺からの感情内容はそんな感じで纏まっているはずだ。多分。

対して葉子は、ぶつちやけ怖い。シンプルに怖い。姫カットの和服美少女なのに、佇まいから滲み出る圧力が強かった。あんな拷問の後を見てしまったから、俺が勝手に気圧されているだけなのかもしれない。だが怖いものは怖かった。なんでもないように人を傷つけられる精神性は、例えば見目麗しいお嬢様が対象でも恐怖に値すると思う。俺のグロ適性は低いらしい。ロボなのに。

そして千景だ。

「——そういえば、なんだけど」

「なんでごごるのか？」

またしても何某かの魔法でも使ったのか、葉子が俺に合う小袖や履き物を用立ててくれた。なんでも『お兄さまの身に着けているお召し物、それはお姉さまのものですわよね？ お兄さまも窮屈でしょうしきちんと規格の合った物を取り寄せておきましたわ』とのことだ。

目敏いし、気が利くし、用意が早い。……だけど怖い。目が澱んでて狂氣的に感じる。ああいう何を仕出かすか全く予想できない人種が俺は苦手だった。

そうして彼女のくれた青い小袖を着ることになった俺は、戦支度と称して千景が持って来た鎧を装備しようとしている。今は千景が俺の着装を手伝ってくれていた。

千景も葉子に劣らぬ超級の美少女である。色素の薄い金髪と、人形めいて愛らしい容貌は、大剣豪の卵とは到底思えないものだ。九針の魔力の影響が薄いらしく彼女から寵愛されているが、人柄で言うとも普通だった。まともと言い換えられる。

取ってつけたようなゴザル口調は気になるものの、共にいて不安に駆られることもない。九針に俺の護衛を命じられた以上は俺に危害を加えることはないだろう。今は安心できる存在だった。

そんな千景に、俺は訊ねる。取り留めもない話を振ったのだ。

「千景って、さっきから自分のこと『イロ』って言ってるけど、それは

何？」

ぶつちやけどうでもいい質問だが、話の取っ掛かりに使わせてもらう。両腕を水平に上げて棒立ちする俺の背後で、鎧を着けてくれる千景は俺の意図に気づいた様子もなく答えてくれた。

「え？ ああ……それはイロの名前を縮めた奴ですよ」

「名前を？」

「はい。イロは千景っていうイケてる名前なんですけど、これって姉上に付けてもらったものなんです。千景になる前のイロの名前は『色璃』^{いろり}といまして、イロ、イロ、って小さい頃に呼ばれてたから、つい自分でも言うようになってたんでござるな。謂わば癖です。意識してたら普通に私って言いますよ、イロは」

「へえ……？」

千景になる前は、イロリという名前だった。初耳である。演義だと端折られてるし、正史でも全く語られない千景の幼少期には興味があるが、根掘り葉掘り聞いて好感度を落とすたくない。そういうのもつと仲良くなつてから訊くべきだろう。

円滑な人間関係を築くコツは、とにかく会話すること。コミュニケーションを重ねることだ。初対面での印象は外見が大部分を占めるが、その点で千景は俺に不快感を覚えていない。となると後は会話内容やパーソナルスペースを見誤らない限り嫌われることはない。

適当に相槌を打ち、彼女の雰囲気を探りつつもソツと水を向ける。

「よければ千景って名前の由来を訊いてもいい？」

「いいでござるよ。イロは姉上に『影に通じる、日の光に照らされる千の者』と言われました。由来はそれです。意味は分かりませんが、けど、なんだか格好良かったので気に入ってます」

言い淀んでる様子はない。鬱陶しがって出した嫌そうな声音でも、不必要に話し掛けるなど牽制してくる気配もない。ここら辺は訊いてもいいラインか。少しずつ、踏み込んでいこう。

「なるほど。九針には名付けのセンス……才能もあるみたいだね、確かに格好良い」

「ふふん、そうでしょう。次郎太殿も姉上に名前を付けてもらったら

いいですよ。次郎太殿の名前って平凡ですし、あんまり格好良くありません」

「そ、そっか……考えとくよ」

思ったより酷いこと言うなこの子。だけどまあ、今後は山場って苗字を名乗らないついでに、名前の方も改名するのは全然ありだとは思う。この時代、名前は重要な意味を持つものだからだ。

特に魔法的な意味はないが、名前の響きで相手の立場が分かる、なんてこともある。次郎太という響きは確かに相手から平凡な名前だと思われる可能性は高かった。

面子商売などところがある武家なら、侮られるのは駄目だろう。しかし今は関係ない。

「千景って名前にきちんと由来があるなら、もう少し仲良くなった後に訊ねることにするよ。ちなみに千景が俺に名前付けるとしたらどんな感じがいいと思う?」

「イロが名付けるなら、ですか。うーん、次郎太殿の印象で……泰然、でござるな」

「タイゼン……泰然自若のタイゼン?」

「そうでござる。学問は苦手でござるが、この間姉上から習ったばかりなので覚えてました」

「はは、千景から見た俺って泰然としてるように見えるんだ? 全然そんなことはないと思うんだけど、褒められてるみたいで少し嬉しいよ。……あ、そうだ。ちよつと話は変わるんだけど。千景達ってどれぐらい怪異退治の経験があるんだ?」

「……どうして怪異退治の経験があるって分かるんです?」

やや強引に話を変えてみる。話の流れとしては不自然だが、これから出向く先を考えるとそこまで無理矢理でもない。強引な話題転換で不意を突き、取り繕われていない素の反応を引き出すのだ。

期待通り、千景は不審そうな反応を示した。俺は苦笑いを浮かべ軽く言う。

「ぎっスキの話でさ、明らかに九針は怪異退治の経験があるみたいな言い方してただろ? それで具体的な経験値を知っておきたくなった

んだ。ちよつとでも話を聞いて安心したいってのが本音だよ」

「……まあ、経験はあります。稼業的に荒事は付き物ですし、小鬼とかは頻繁に片付けてますよ。大物だと……大蜘蛛のでっかい奴と、龍神の眷属ぐらいなら殺したことがあります」

小鬼、大蜘蛛、一般的な龍。なるほど、経験豊富だ。まだ四半世紀も生きてない子供なのに。俺も現代基準の未成年だから、当世の皆々様には是非とも手心を加えてほしいものだが……世は乱世だ。物騒な経験値なんて積もうと思えば幾らでも積めるのかもしれない。俺は御免蒙りたいけど、避けては通れないなら万全を期したいものである。

さておき話の受け答えからして、千景の知能レベルはそこまででもなさそうだ。しかし丸つきり馬鹿でもないはずだと思う。

荒っぽい経験値は充分あるようだが、恐らく知恵を磨く気が本人にないのだろう。今の千景は分からないことは九針に聞けばいいとも思っ、甘えているのかもしれない。

良い発見だ、千景の信頼を得られたら最も頼りになる指標になる。九針はどんな顔、目をしていても腹が読めないし、葉子は論外だが今の千景なら取り入り易いだろう。折良く九針の信も厚い。

重要なことは言わないだろうが、そうでないものには口は軽い。単純で、純粹だ。付き合いを持つなら千景みたいに分かりやすい人間が好ましかった。

俺の【知性の輪】を視たのだろう、少女剣士はくすりと微笑んだ。

「なーに考えてるか知りませんが、着装は終わりましたよ」

「ん……ありがとう」

「いえいえ。早く自分だけで着られるようになってくださいね」

ポンと背中を叩かれ、礼を言う。なんとなしに【八咫】を左掌に出現させると、そこに自らの姿を映した。【八咫】は魂の姿を映すが、普通に鏡としても使えることに気づいたのだ。

俺が装備させてもらったのはヤマト式甲冑である。見るからにお高そうな当世具足だ。籠手や佩楯、臍当などの小具足まで揃っている。スマートなフォルムで、全体が真っ黒に染められていた。本具足

は5枚の鉄板を蝶番で縦矧ぎした堅牢な造りである。

「……これ、絶対目玉飛び出るぐらい高い奴だろ」

「姉上が『次郎太に怪我1つさせるな、一番良い魔道鎧をやれ』って言うてたので遠慮なく持ち出したんですよ。色んな機能が付属してるんで、好きに使っていいでござるよ」

にひひ、と笑いながら俺の前に回り込んできた千景を見る。

彼女も防具を纏っているが重装備ではない。日差しを受けて鈍く輝く鉄の胴丸を装着し、赤黒い陣羽織と黒い筒袴を身に着け、顎から目の下までを覆う半頬と漆塗りの陣笠を頭に被っていた。

腰には大小の刀を差し、背に大太刀を背負っており、いずれも緋色の鞘に収められている。

可憐な少女が軽装とはいえ戦装束を纏っているのを見ると、まるでアニメみたいだなという感想を覚えた。しかしコスプレめいたわざとらしさは無い。よく見たら陣羽織は元が白く、何かの血で赤黒く変色しているだけだと判じられるせいで、矢鱈と物々しい印象があった。

そんな千景に対して問う。

「色んな機能って、例えば？」

「えーっと、幻装束、完全装、待機装の3つです。ほら、左籠手の手首の裏部分に入り切り装置があるじゃないですか。それを押してみるでござる」

入り切り装置？ ……ボタンか。確かにある。試しにボタンの1つを押してみると、魔力の霧が噴出して俺の全身を覆い隠した。なんだ、と思う間もなく魔力霧が収まると、黒い小袖姿に逆戻りしているではないか。しかし、鎧を身に着けている感覚はある。

「それは幻装束でござるな。身に着けているものを誤魔化す仕掛けです。イロがブチ殺した狸の妖の血管を仕込んであるので、装着者の魔力を吸って幻を出すことができますよ」

得意げな少女を尻目に理解に努める。狸の妖怪というと妖怪だろう。これはその妖怪の異能による幻の映像で、現実の物体を上書きして見せるものというわけか。

今度は反対のボタンを押す。すると幻装束が解除され、一瞬だけ鎧姿に戻ると黒い鎧が消えていき、左手首に鉄の輪へと縮小された。鎧の重さも全く感じない。これが待機装という奴だろう。真ん中のボタンを押すと、今度は元の鎧姿に立ち返ってしまう。なるほど、と内心舌を巻いた。鎧の装備状態を、ON—OFFで好きに切り替えられる。利便性が半端じゃない。

なんだこれは。凄い魔道具じゃないか。分類で言えば魔道具の鎧、千景の言う通り魔道鎧だ。こんなオーバーパーツをそれと知る前に着させるだなんて……なんだか興奮してしまいそうだった。

「……こんな凄いの、貰っていいんだ？」

感動で声を震わせながら呟くと、千景は自身の左手首を弄って通常衣装姿に変化する。

足元を見ると彼女の足は地面に軽く埋まっていた。柔らかい土だからだろうが、身に着けている装備の重さが加算されているのが分かる。幻装束という機能が千景の装備にも付いているらしい。

「いいですよ。だって姉上が次郎太殿を、イロと同じぐらい大事に守られて命じましたので。イロは気前が良いので、雑魚の次郎太殿が死なないように最大限の配慮はします。貰ってください。でも死んだら返してもらいますからね」

「お、おう……」

微妙に辛辣だが、悪意はない。声のイントネーション的に裏表なく素で言ってきている。

苦笑いをして肩を竦めた。

「俺ってやつぱり、千景から見たら雑魚なんだ？」

「ええ。雑魚も雑魚ですね。だって体捌きが無駄だらけで、視線運びは素人、体の正中線もブレっブレですもん。でも気を落とさないでください、イロが守りますから。……あ、雑魚のままでもいいなら、時間がある時に手ほどきしますよ？ 鍛えてほしいでござるか？」

「……うん。お願いします」

「お願いされました。弟子を取るのは初めてですが、お互い頑張りましょう」

綺麗な歯を見せて笑いかけてくる少女に、ありがとうと言っておく。護身術程度の技術だけでも早急に身に着けたいが、今はまだ単なる付け焼き刃にもならないだろう。後日の訓練に期待だ。

千景に着装してもらってる間、身動きが取れなかったため、ちらりと視線を本堂に向ける。俺の着装は廃寺の軒先でされていたのだ。日が大分傾いてきているので、もうすぐ夕暮れ時になるだろう。

視線を向けた先。本堂には既に鎧姿になっている九針がいた。

纏っているのは純銀に輝く具足である。ヤマト式甲冑はゴテゴテした印象があるが、彼女が着装している具足のフォルムは非常にスマートだ。端的に言うとなりそうに軽装である。

胴体を守る薄い胴丸と、肩から肘までを保護する肩当て。左手のみに装着された籠手。胴丸と一体化している緑の陣羽織。まるでアニメキャラの見ていて不安になりそうな装備だ。

彼女は得物を持っていない。無手のまま、彼女は本堂で無言のまま佇んでいた。

「……………」

不可解である。九針は本堂の中心にある、鬪仙裁仏の仏像の肩に手を置き、瞑目したままずっと沈黙しているのだ。あれは何をしているのだろうか。

ジツと様子をうかがっていると、本堂の地下から着物姿のままの葉子が姿を表す。そのまま何をするでもなしに九針の傍に控えた。

「……………千景。あの2人は何をしてるんだ？」

「ん……………そうですね。なんと言いますか……………」

訊ねると、千景が言い淀む。その反応一つで瞬時に推測できた。

安易に教えられない、つまり秘密がある。九針が触れているのは彼女が彫った仏像。そして先程九針自身が言っていた、『うちの仏様が繁信からの報告を受けているだろう』という台詞。

九針が有するらしい複数の拠点には、必ず鬪仙裁仏があるらしい。このタイミングで仏像に触れたまま離れない時点で、千景が言い淀んだ理由はおおよそ想像がつくはずだ。

「言い辛いなら言わなくていいよ。多分、よその拠点に帰ったシゲノ

ブさんと通信……遠隔で連絡を取り合っているか、彼が別の拠点で入力した情報データを読み込んでるんだろ」

「遠隔通信の線は……ちよつと弱いかな。そんなことをするぐらいなら、最初から口頭で報告を聞けばいいし。ならあの闘仙裁仏は、入力された情報を記録しておくことが出来る代物なのかな。九針だけが使える仕様じゃなくて、多分誰でも使用可能なんだろ。凄い魔道具だ」

「凄いのは……次郎太殿もでござるよ」

そこまで言つて微笑みかけると、金髪の少女剣士は感嘆したようにこちらを見ていた。

正答だつたらしい。簡単な推理だったが、外れてなくてよかつた。こういうアピールを重ね、ゆくゆくは千景に『次郎太殿が言うなら正しいでしょう』と信じ込んでもらいたいものである。

九針は闘仙裁仏からデータを読み込み、今は別のデータを入力しているのだろう。恐らくこれから出掛ける旨と、手下にそれぞれ何をどうしろといった具合に指示を出しているのかもしれない。後で俺も闘仙裁仏に触らせてもらおう。どんな仕様で、どんな使用

感があるのか興味がある。

そんなことを思っていると、漸く仏像から手を離れた九針が葉子を伴つて外に出てきた。

「待たせた。次郎太には道すがら色々教えることがある、早速出るとしよう」

九話 【魔法解説、葉子の秘奥】

「待たせた。次郎太には道すがら色々教えることがある、早速出るとしよう」

彼女は左手首の入り切り装置を弄り、噴出した魔力霧に包まれる。幻影を自らに被せ、浅葱色の小袖姿になったのだ。俺の目から見ると浅葱色は好きな色合いだが、史料によると九針の衣服へのセンスは壊滅的らしい。京の人々には酷評されているのだ。なんでも、センスが田舎臭いらしい。

現代の価値観だと似合ってたなら何でもいいだろうと思うが、当世だと浅葱色は田舎者が着るような安っぽい色と思われているのだ。了見が狭いと思うが、俺は浅葱色を好んでいたという九針にその点を指摘するつもりはない。後に邂逅する星章院賦の宿敵、北条収奪と出会った時、彼女のセンスを馬鹿にした北条収奪へ星章院賦は激怒したというのだ。

実際の九針を見ると、そんなことで激怒するような人物には見えない。しかし怒りを露わにしたという情報があるのだ、理由が定かなくても見えてる地雷を踏みに行くつもりはない。

「ちよつと待った」

九針達が使用したことから、幻装束の機能はスタンダードな代物らしいと察しつつ制止する。急いでいるのかもしれないが、ここで止めないでいつ止めるのだ。小首を傾げる九針に俺は苦言を呈する。

「物乞いしてるみたいで恐縮なんだけど、そろそろ俺も腹が減ってきてるんだよ。飯にするってさつき言ってたから我慢してたけど、何も食わないで出るつもりなのか？ 見た感じ荷物もないのに？」

「ああ……」

栄養補給の目処も立てずに出立するような馬鹿じゃないだろう。腹が減っては戦は出来ぬとも言うのだから。なんらかの意図がある

のは分かる、分かるが情報は共有して欲しい。

そういう意図で訊ねると、九針は苦笑いを浮かべた。

「安心しろ。鬼どものねぐらに着くまで一夜を明かすことになるんだ、寝床と飯のあてはある。なあ葉子」

「はい。わたくしがいる限り、その手の心配は無用ですわ、お兄さま」
お兄さまはやめろ、と言いたくなるのを堪える。

再び歩き出した九針の背を追うと、俺のすぐ傍に千景が、九針の半歩後ろに葉子が付いた。

九針は前を向いたまま歩を進めつつ、にわかにな真剣な声音で告げてくる。

「次郎太。葉子は私達の生命線だ、これから話すことは他言無用だぞ。誤魔化さず返事をしてくれ」

「分かった。他言無用だな」

「……よし。葉子、話してやれ」

「畏まりました。その前にお聞きしたいのですけど、お兄さまは魔法についてどれほどの知識をお持ちなんですか?」

問われ、一瞬どこまで話すか思案する。現代での通説だと、魔法学は過去より現在の方が進んでいると言われている。魔法の技能は衰退しているが、蓄積された魔法の知識の量と、研究された諸々の技法は科学技術に転用され、たった数百年で未曾有の発展を迎えたからだ。

しかしそれが真実だという保証はない。時代を経るにつれて失伝し、失われてしまった知識がどれほどあるか知れたものではないだろう。俺自身はそれなり以上に知識量への自信はあるが、それだって当世で通用するとは確信できずにいる。

とはいえ俺の有用性を示すためなら、ここで知識の出し惜しみはしない方がいいだろう。仮に間違っていたり、当世が別世界線で知識そのものが役に立たなかったとしても弁明はできる。

よし、ひとまずは自信を持って答えよう。間違っていたらごめんないだ。

「先に断っておくけど、知識は学んでも実技はからつきしだからな、

俺は。実際に魔法を使う機会なんて無いと思ってたし、知識の蓄積しかしてこなかった」

「あら……？ まあ……そういうこともある、のでしうか？」

「そういうこともあるんだよ。で、俺がどれぐらい魔法に関して知ってるかって質問に答えると、それなりに知ってると思う。周りにいた奴らと比べたら、俺の方が詳しくはたはずだ」

「なるほど……？ ではお兄さま、魔法の基本属性を教えてくださいませ」

強くはないがブレのない語気で押し切り、葉子の問いに答える。

「魔法使いじゃない人には誤解されがちだけど、魔法の基本属性は2つしかない。外力系、内力系だ。前者が魔力を肉体の外部に放出して使用するのに対して、後者は術者の体内で魔力を使用する。補足すると外力系と内力系の他にも特質系があるけど、その適性を持っている人は極端に少ないらしい。特質系で確認されてる魔法は主に3つ。召喚魔法と空間魔法、そして時間魔法だ。攻撃性能の高い火、水、風、土は外力系魔法で、風の扱いに熟達していくと電気を発生させることもできる。内力系は肉体の強度を向上させたり……神経伝達速度を劇的に跳ね上げたりする強化魔法があつて、傷を癒やしたりする回復魔法も内力系に分類される」

詳しい話をする時のオタクみたいに、淀みのない早口で言ってみる。好きなんだから仕方ないねと思いつつ様子をうかがうと、葉子はおろか九針と千景まで目を剥いてこちらを見ていた。

数瞬の沈黙を挟み、感嘆したように葉子が両手を叩いた。ぱち、ぱち、ぱちと。拍手だ。

「……予想以上ですわ。素晴らしい知見をお持ちですのね。流星はお姉さまに認められた御方。もしお兄さまが『お兄さま』になつていなかったら殺してましたわ」

「……え？」

お兄さまがお兄さまではなかったら？ 九針の配下になつてなかったら殺してたつてこと？

基本知識だけでこれだ。物騒極まる発言に、なんでだと反駁しかけ

て、すぐに察する。

当世だと魔法使い同士であつても知識の共有なんてしないはずだ、魔法は強力な武器だからである。魔法が廃れたせいで無用の長物と化した現代だからこそ、秘されていた魔法知識は流出したのだ。

なんの糧にもならない代物を、子々孫々まで秘匿し続けられる人は決して多くない、ということだろう。一銭の金にもならないなら、自分の先祖はこんな凄い魔法が使えたんだぜ、みたいに自慢話の種にしかならないと考えても不思議ではなかった。

故に多くの魔法知識を持った人間は、魔法にまだ価値がある当世だと危険人物というレッテルを貼られる。味方になるなら生かしておけるが、味方にならなかつた時点で捕らえ、情報を全て吐き出させて殺すのがベストというわけである。

恐らく葉子は、俺が自身の問いに『分からない』と答えると思つていたのだろう。基本属性の話だけでこうまで過剰に反応される理由も察しがついた。

外力内力系に関して詳細を話しても、よく知つてるなという反応に落ち着くはず。火とか水とかは魔法使いにとってポピュラーな攻撃手段だからだ。それと俺がこの廃寺に到着し、地下で見せられたグロ画像男を処理した葉子の魔法を鑑みると、彼女の魔法属性にも察しはついた。葉子は特質系魔法の使い手なのだろう。召喚、空間、時間の3択なら、恐らく空間系だ。

「あうっ……いい、痛いです、お姉さま」

「やかましい。変に身内を脅しつけた罰だ」

嘆息一つ。九針か振り返り、ほんわかとした笑顔で殺害を仄めかした葉子の頭を叩く。すぐに前を向いて歩き出した彼女は、義妹の抗議を切つて捨てた。

「次郎太が魔法に詳しいと知れたのは喜ばしい。元々次郎太に秘密にする気はなかつたんだ、貴様の魔法属性に関して話してやれ」

「はあい。……お兄さま、わたくしが熟達している魔法属性は3つですわ。1つはもう既にお察しのようにですが……」

「空間系だろ？」

「ええ。特質系、と言うんですの？ そうした区分けは初耳ですが、わたくしは呪文ではなく印を結んでの魔法技術、忍術を用いますの。お兄さまは忍術に関してご存知かしら？」

「うん、知ってる」

魔法学における魔法の定義に触れる話だ。一口に魔法とは言っても内容は多岐に渡る。当世ヤマトだと陰陽術、仙術、忍術を一口に纏めて魔法と言っているのだ。

長々と格式張った呪文の詠唱を行なう、儀式系の魔法が陰陽術。両手、あるいは片手で特定の印を複数結び、呪文詠唱の代わりにするのが忍術。印と呪文を併用するのが仙術だ。本質的にはどれも同じ魔法ではあるものの、それぞれ実用的な用途がある。

声を封じられると無力となる陰陽術の弱点を克服するために、手を使って印を結ぶ忍術は開発されて。長つたらしい呪文や印を短縮するために、双方を用いる仙術が開発されたのだ。そして陰陽術、忍術、仙術、それぞれの遣り方でなければ発動できない魔法も多い。

その中で忍術を用いるという葉子に相槌を打つ。

「でしたら話は早いですわね。わたくしが開眼した秘奥は2つ、内1つが空間系忍術で、わたくしはそれに【えまきじんぼう絵巻陣法】と名付けてありますわ」

「絵巻陣法……書物の頁みたい、空間を畳んで仕舞ったりとか、そういうことができる」と

思い起こされるのは、葉子との初対面時の出来事だ。葉子がグロ画像男を掻き消した際に、まるで本の頁を捲ったように空間そのものが動いていたのは記憶に新しい。

「ご明察。わたくしの指定した空間に、わたくしが徴を刻んだ別の空間を開くことができますわ。同様に閉ざすことも。そうすることで例え野外でも室内での寝泊まりが可能ですし、貯蓄しておいた飲食物を口にもすることもできますのよ。この技法の存在に関しては、そのままで秘密にしておきたいわけではないので、今後人目に触れても構わないと考えてますわ」

「という、残り1つの方を他人に対して秘密にしておきたいわけだ」

「はい。こればかりは、わたくし達だけの秘密です。いいですわね？ 如何なる状況下であつても、口外しようものなら草の根分けてでも見つけ出し、必ずや報いを受けていただきます。お姉さまはともかく、チカも例外ではありませんわ」

「言わないってば……」

愛称を出された千景が不貞腐れたように呟く。義妹に対してすら徹底するという方針に、俺は聞くべきかどうか頭を悩ませる。が、選択肢はそもそも無いのだと思ひ至り悩むのはやめた。

だって俺の後ろ盾は九針で、それ以外にあてがないのだ。ここはもう諦めて聞こう。聞いて、九針達の仲間になる。いや、配下か。一蓮托生の関係になりたくはなかったが、こうなると是非もない。割り切ってしまうしかなかった。ここで秘密を聞くのを拒否するのは、彼女達から離れていく可能性を明示するに等しく、そうなると葉子が俺に何をするか分かったものではない。

だが同時に、ここまで言うからには余程凄い魔法なのだろうという期待感が湧く。

「わたくしのもう1つの秘奥。それは土遁と水遁の術の掛け合わせですわ」

「……ん？ それだけ？」

拍子抜けしたように反駁すると、純白の着物姿の少女は微笑んだ。

「ええ。土遁とは土属性魔法、水遁とは水属性魔法です。複数属性の掛け合わせなんて、腕の立つ魔法使いなら誰でもできますわ。そんなものの何が秘奥なのか？ さあ……これをご覧になつて？」

怖い目で笑いながら言つて、着物の袖から葉子が取り出したのは1つの鐘であつた。

それは九針が持っていた鳳翔月影の召喚触媒。無名の魔道具である白銀の鐘だ。製作者は葉子だと聞いてはいたが、そのどこに土遁と水遁の要素があるというのだろう。

——拠点だった廃寺は、もともとタネサト城の外縁部にあつた。故に少し歩くだけで、すぐ城の外に辿り着く。ちょうど見張り櫓からの死角になる地点まで来た俺達は足を止めた。

そこで取り出された白銀の鐘を葉子が鳴らすと、俺たちの傍に4頭の馬が召喚される。

「わたくしの話をもう一度思い出してくださいな」

言われ、あ……と呟く。そうだ、葉子は言っていた。自身は忍術を使う、水と土と空間の3つしか適性がないと。なら……これはなんだ。どう見ても召喚された馬だ。

九針の傍には金毛白馬の鳳翔月影、千景と葉子の馬はそれぞれ栗毛の馬。そして俺には黒馬。鳳翔月影ほどではないが、残り3頭の馬も常軌を逸した名馬であると判別がつく。

土と水を掛け合わせた魔法が秘奥だと彼女は言っていた。このタイミングで見せたということは、これがその秘奥なのだろう。だが……どんな魔法なのか見ただけでは全く分からない。

しかし話を総合して推測することはできる。恐らくこれは——と、思い至った可能性に、俺は強い好奇心を刺激された。どうやっているのだろう、知りたい……是非とも知りたい。

「わたくしに、召喚魔法の適性はないですわ。ではこれはなんなのかな——」

「土と水の複合による、疑似生命の創造」

「——あら。あらあらあら。うふふふ……大正解ですわお兄さま」

推測を口にする、葉子は明らかに俺を見る目を変化させながら拍手した。

危険な色合いの視線。しかしそんなものになど頓着せず、推測を口にする。

抑えきれない知識欲が溢れ出ていた。

「単に土と水を併せただけで生命にはならない。恐らく葉子の【八咫】の影響が多分に現れてるんだと思う。生命再現の特性、土と水、空間の属性を持つなら、葉子の魂の姿は【葬器神天狗^{はふりうつわのてんぐ}】なんじゃないかな。古事記に曰くヤマト人を生み出した神々の1人だ、お似合いだよ」

流石だ。流石は大魔法使いと謳われる家持葉子だ。

彼女が戦場で活躍したという史料がない理由に納得がいく。活躍してなくて当然だ、彼女は星章院家が誇る最強の騎馬軍団【赤備え】の

軍馬を用立てる、縁の下の力持ちだったのだろう。

馬を調達する必要など無い。育て、鍛え、高い金を払って維持費を捻出する必要がない。葉子さえいれば無料で、しかも火縄銃などの銃声にも動じない精強な軍馬を用意できるのだ。

たぶん、葉子が創造できる疑似生命の数は膨大な量になる。もし俺の予測が正しければ、歴史上の葉子の魔法を秘匿して、決して死なないように戦場へ連れて行かなかった理由も納得できた。

「葉子は……この疑似生命の馬を、どれぐらい生み出せるんだ？」

「……そうですね。お姉さまの馬ほどの質では100が限度ですが、一般的な軍馬程度を恒常的に存在させ続けるなら1万ですわね。短期間でよければ10万は創り出せます」

「はっ……九針、この子とんでもないよ。千景は俺を化け物って言っただけど、俺なんかより葉子の方がよっぽど化け物じゃんか」

「葉子は私達の生命線だと言っただろう？ 流石に人間並の知性は再現できないが、馬ぐらいままでなら不自然さもなく創造できる。自律行動も、被造物への命令権の移譲も思うままだ。葉子の魔力量は底なしだからな、鐘コイツを使えば葉子の設定した馬を自在に創れる」

鳳翔月影並の馬は100が限度で、質を落としていいなら1万。この差はなんなのだ。それだけ鳳翔月影は特別なのだろうか。……さらに運用期間を短くしたら10万も生み出せるとか凄過ぎる。

称赞混じりに乾いた笑みを溢し、九針に水を向けると彼女は自慢げに応じてくる。こんな出鱈目な大魔法使いを、彼女は財布役と言っていたが……とんでもない。財布は財布でも天下の懐だ。

「それよりお腹が減ってるので、こちらをどうぞ、お兄さま」

「……あ、ありがとう」

おもむろに袖から竹皮で包んだおにぎりを渡される。葉子の着物の袖は四次元ポケットか何かなのだろうか。……いや、空間魔法で部分的に別空間にアクセスし、取り寄せているのだろうか。随分と器用なことをする……その何気なさが逆に彼女の腕前を表していた。

剣術に自信ありげな千景といい、既に大魔法使い級の葉子といい、

まだ10代も半ばの少女たちがよくもまあそれほどの域に達しているものだ。天才だとしても言えない。

「ところで馬を出してくれたのは嬉しいんだけど、俺……馬に上手く乗れる自信はないんだ。どうしたらいい？ また九針か千景の馬に相乗りさせてもらったらいいか？」

九針たちが葉子の被造物である馬へ跨るのを見て、俺は我ながら情けないことを言った。

すると栗毛の馬の背に横座りをしている葉子が苦笑する。

「1人でお乗りくださいいな。その操作はわたくしが致しますので、お兄さまは振り落とされないようにしているだけで結構ですわ」

「葉子がいる時はそれでもいいでござるが、いない時は自律行動に切り替わるので、早く自分で操れるようになってくださいなね」

葉子と千景に言われ、難しい顔をしつつ頷く。覚えること、やらなはいといけないことが山積みだ。これは当分の間のんびりと過ごす暇はなさそうである。

慣れない動作で黒馬によじ登ると、全員が騎乗したのを確認した九針が言った。

「鬼どものねぐらはフカウラ町の西南、ヨコイソだ。明日の日没頃には着くだろう、それまでにド素人の次郎太を魔法に目覚めさせる。次郎太はどんな魔法を使えるか……楽しみだな？」

十話 【八咫・人形思兼主神】

タネサト城のある盆地から離れ、風を切つて疾駆する四騎の騎兵。先頭に行くのは桃髪の少女、その真後ろに付いているのは亜麻色の髪の少女だ。土塊で出来ているとは思えない芦毛の馬の背に、あろうことか横座りしているというのに全く不安定さを感じない。

当然である。亜麻色の髪の、白い着物の少女——葉子は物理法則をぶつちぎる大魔法使いなのだ。尋常の道理から自身を切り離すぐらい容易いだろう。現によくよく注意深く観察したら、彼女の纏う着物と髪が全くと言つていいほど揺らいでいないのが見て取れた。

九針を追う俺は、黒馬の背にしがみつき、なんとか騎乗の感覚に慣れようと神経を尖らせていた。西南に進むこと体感で1時間45分32秒、傍らに馬を張り付かせてくれている千景のアドバイスもあり、漸く休みなしで全力疾走を続ける馬にも慣れてきた。

普通、それだけ騎乗を続けていたら体力的に保たないものだと思うが、超人になっている恩恵だろう、九針達は元より俺も疲労をほとんど感じていない。しかし体力は余つていても時間は過ぎる。黄昏時を迎え、橙色の日輪が地平線の向こう側へ消えていこうとしていた。「そろそろ日が沈む。今日の移動はここまでにしよう。この調子で行けば、明日の昼には鬼どもの面を拝めるはずだ。仕掛けるのは明日の日没、それまでに英気を養っておけ」

九針が平野の真ん中で止まって言う。すると葉子が操作していた俺の乗る黒馬も止まり、俺が体勢を整えるのを待つて黒馬が露と消える。虚空に放り出された俺は咄嗟に両手をついて着地して、恨みがましく葉子を睨んだ。馬を消すならせめて事前に一言掛けてほしい。

九針と千景は俺とは対象的に華麗に着地した。それが余計に俺の情けなさを浮き彫りにしているようで、なんとも居たたまれない気持ちにさせられる。

「では、ここにわたくし達の部屋を開きますわ。手元が狂うので動か

ないでくださいな」

俺の視線など意にも介さず、ふわりと地に足をつけた葉子が扇子を握る。

移動の疲れで体が怠いが、葉子がどんな印を刻むのかさりげなく盗み見た。

葉子が扇子を振る。印は、結んでいない。にも関わらず周囲の空間が歪むのを見て、俺は密かに驚きの念を覚える。ぱたり、と平野の空間が畳まれ、景色が唐突に切り替わった。

次の瞬間、俺達がいたのはあの廃寺の地下にあつた板の間だ。構わず葉子の扇子を注視する。なんの変哲もない竹製の骨で組まれたその持ち手に、小さな入り切り装置があるのを確かに見た。

葉子は開いていた扇子を閉じるのに、半ば確認の意図を込めて訊ねた。

「それって魔道具……だよな、葉子」

「あら、目敏いですわね。そうですけど、それが何か？」

板の間の部屋に景観が切り替わり、草履を脱いで部屋に上がった葉子が意味深に反駁してくる。

俺にだけ上がるよう促した九針は、千景を伴って部屋の外に出て行った。部屋に上がり座布団の上に正座した忍術使いは、対面に胡座を搔いて座つた俺の目を見据える。

「いや……印を結んでるように見えなかったからさ、魔道具の力で省略したのかなって。それより魔道具を九針たちは沢山持つてるようだけど、どうやって手に入れてるんだ？」

「どうやってても何も……自作ですわよ？」

「自作？　え、魔道具ってそんなお手軽に作れるものなんだ……？」

「お手軽というほどでもないですけど……まあ、物によるとしか言えませんわね。ちなみにわたくし達の下にある魔道具は、軒並みお姉さまが制作してますわ」

九針が魔道具を作ってる？　意外な念に駆られた俺の顔に笑みを投げ、忍術使いの葉子は補足してくれた。

「お姉さまは将来、天下に号令するお殿様になられます。家臣に与え

る恩賞として魔道具を下賜できるなら、これほど便利なものもない、とのことですわ」

「……なるほど？」

「わたくしの扇子は、お姉さまが1年も費やして作り出してくださいました物。わたくしの結べる印を刻印した入り切り装置、わたくしが苦手とする風属性の魔法を放射する機構が仕込まれてますわ。これがある限り、わたくしは印を結ばずとも忍術を扱えますの。出力は落ちてしまうので、実戦だとこの手で印を結ぶ必要も出てくるでしょうけど」

随分と高性能な魔道具らしい。ぶっちゃけ俺も欲しい。今度頼んだら作ってくれるだろうか。

それより、葉子は九針が立身することを信じ切っているらしい。彼女がそう言っていたから信じているんだと、その澱みに澱んで逆に純粹な目は告げている。

「2人は外に出たみたいだけど……どこに行っただ？」

「わたくしはこの部屋の空間を平野に移しただけですよ？ 外は変わらず平野ですわ。よからぬモノが近くに来ないか見張っているはずですよ。そんなことよりお兄さま、早く初めましょう」

何を、と一応訊ねてみる。

「先程お姉さまが仰っていたことをお忘れなんですの？ お兄さまの魔法適性を調べるんです。お姉さまはそのためにわたくし達を残して行かれた。それもこれも、お兄さまのためなんですのよ。愚鈍なことを吐いてないで、しゃきつとしてくださいな」

「ああ……うん、分かった。でもどうやって俺の適性を調べるんだ？」
「簡単です。すぐに済むので動かないで……ほら、こうやるんですよ」

葉子の目に、嫉妬の色はない。ないが……どことなく、九針が俺のために行動しているのが面白くなさそうだった。なんとなく気まずい気分になって聞くと、葉子はまた袖から物を取り出す。

彼女の手握られていたのは短刀だ。抜き身の刃を手に身を乗り出し、俺の右手を取った彼女はサツと短刀の刃を滑らせる。俺の掌を

浅く割き、驚いて手を引こうとするも鋭い視線に射竦められた。

動くなと言ったでしょう、とでも言いたげな目だ。彼女は面倒そうに、掌から滲み出た血を短刀の刃先で掬い取る。短刀もまた魔道具なのだろう、俺の血の滴を乗せた短刀が淡く光った。

「……溶岩？」

刀身の上に付着していた血の滴が、急激に凝固していき石になる。それは火を発して溶岩の如くドロリと滴り落ちた。板の間の床に落ち、ジュウウ、と床が焼ける音がする。

目を見開いた俺の目の前で、葉子は慌てず溶岩の滴へ拳を落としたり。見た目に合わない豪快な鎮火方法である。火傷した様子もなく、彼女はさりりと言った。

「どうやらお兄さまが最も秀でている属性は、火と土のようですね」
「……まさにそんな感じだね。でも驚いたよ。こんな簡単に適性を調べられるものなんだ」

「ええ。お姉さまは実用一点張りで魔道具を作ってきたんですもの。よそ様の遣り方は知りませんが、お姉さまほど簡略化できていないはずですよ。流石お姉さまです」

「そうだね……」

魔道具。これは本来、そう簡単に製造できる代物ではない。そもそも無機物に魔力を込めること自体が困難で、そこから更に特定の用途に応じた機能を具えさせるのは至難の業だという。

魔力を吸い続けた刀や、呪詛を受け続けた日く付きの物品が、長い年月の末に自然と魔道具と化していくのが普通である。それを人工的に作り出せる人間なんて天才的な鍛冶師ぐらいなものだ。

つまり九針は鍛冶師としても突出した才覚を有していた、ということだ。もうあの子は何が出来ないんだと呆れるレベルで万能過ぎる。鍛冶ではなく別の方法で魔道具を作っているのかもしれないが……ともあれ今度、制作工程を見せてほしいものだ。

「さっき九針は魔法を目覚めさせるって言ってたけど、あれってどういう意味なんだ？」

訊ねるとお嬢様は目を光らせた。無論、比喩である。物理的に光つ

たわけではない、ただ邪悪な形に眈を歪めただけだ。だからこそ嫌な予感がした。葉子は無言で短刀を差し出し、俺に押し付ける。

無骨な短刀だ。それを握らされた俺に、彼女はにこやかに告げた。「文字通り、眠っている子を叩き起こすだけですわ」

「……うん。それが俺にコイツを持たせたことにどう繋がるんだ？」
「お兄さまほど魔法に詳しいければご存知でしょう。魔法とは陰陽術、仙術、忍術の3種を総称した呼び名であると。そしてそれを【内外法】と呼ぶように、魔法にはもう1つ別の顔がありますよ」

知っている。魔法学では常識だ。風・火・土・水の4種は外力系、回復魔法や強化魔法が内力系。その2つと特質系3種を含め内外法と呼ぶことぐらい。そしてもう1つの顔とやらにも覚えはある。

「……もしかして【先天外法】のことを言っていたりする？」

その名称を出すと、葉子は首肯した。

先天外法。それは人が生まれ持つ、ゲーム風に言うところの固有魔法という奴だ。

それは生まれた瞬間から誰しもが持つ資質であり、神様由来とされる三種の神器と密接な関係を有するが故に外なる法、外法と称されているものだった。

内外法の方は特質系を除き、努力次第で適性のない属性も扱えるようになれなくもない。しかし先天外法ばかりは、どんなに努力しても他者の真似はできるものではないという。

「わたくしも鬼ではありません、一朝一夕で内外法を一線級で体得しろだなんて無体は言いませんわ。けれど先天外法に関してなら話は別。目覚めた瞬間から使いこなせはしなくとも扱えはします。今すぐ使える武器が手に入るなら躊躇している暇はないのではなくて？」

「……尤もだけど。それで短刀コイツをどうしろってんだよ」

「難しいことはありませんわ。お兄さま——腹を切ってくださいな」

目が点になる。

腹を……切れ？ 腹を切れて言った？ マジかコイツと葉子の

正気を疑ってしまう。

しかし葉子の顔は限りなく真剣^{マジ}だ。

もしやどさくさ紛れに俺を殺そうとしてるんじゃないだろうな、なんて邪推をしてしまう。

動機は分からないが、有り得ないと言い切れない不気味さがこの少女にはあった。

「……マジで言ってる?」

「まじ……? その、まじ、というのはどういう……」

「いや……本気で言ってるの? 本気で俺に、切腹しろつて……」

反問すると葉子は首を傾げる。まるで何を言われたか理解できないといった面持ちだ。

そのリアクションで悟る。マジもマジ、大マジで彼女は切腹を促している。

あくまで印象でしかないが、九針に従順な葉子が俺を殺そうとしているとは思えない。彼女の義姉は俺を身内だと言ったのだ、九針の意向に反してまで俺を殺そうとするはずはなかった。

そんな理性的な判断を葉子がしているのか見分けがつかないのが恐ろしい。

「……2つ質問していいかな」

「どうぞ」

「この短刀は、腹をかつ捌いても傷はつかないとか、そういう力があつたりは……」

「しませんわね。それでお兄さまの掌を切ったのをお忘れですか?」

「……葉子はその、俺が切腹した後、回復魔法を使ってくれる……よな?」

「愚問です。当然治療しますわ。だってお兄さまはお姉さまのものですもの。わたくしが勝手にお姉さまのものに不可逆の傷をつける真似は致しません」

「どうやら、殺す気はないようだ。だが、だからといって切腹は……」

躊躇する俺に、葉子は目を眇めて囁く。小声なのに、耳元で恫喝しているような凄みがあった。

「チカも十全にお兄さまを守れるとは限りませんのよ？ 護身の力を得られると思えば、この程度は安いものでしょう。それとも……お姉さまのためでも、腹をお召しになる覚悟は持てませんか？」

額に汗が浮かんだのを袖で拭う。握らされた短刀に視線を落としだ。

鋭利な刃物だ。錆1つない。ずっしりとした無骨な造りの短刀は、容易く人の肌を割き肉を食い破るだろう。そして血を吸い、汚れるのだ。

葉子の恫喝を受け、萎縮することはない。寧ろ納得がいった。この言い様、彼女は俺を試している。俺が九針のために命を賭けられるのを見るために、無慈悲に切腹しろと言ってきたのだ。

たぶん腹を割く必要はない。体のどこに刺しても効果は変わらないだろう。それでも敢えてこちらが躊躇するであろう言い方をしてるのである。それが分かれば全く怖くなかった。

額に汗は浮かんでいない。躊躇する素振りも、演技だ。俺が切腹に躊躇っているように見せているだけ。俺の感性で言うと、治癒が保証されている事象は恐怖の対象足り得なかった。

それを隠しているのは、ただ俺の自傷行為で葉子の信用を勝ち取るためである。彼女は恐ろしい少女だが、信用さえさせられたら頼れる味方になってくれるだろう。そのはずだ。

故にたっぷり2秒の間を空け、黒い小袖を肌蹴させると短刀を逆手に持ち替える。そして腹部に刃先を突きつけた。

「九針のため、だもんな。主人と定めた人のためなら、腹の1つや2つ割くぐらい訳ないよ。見てるといいさ、気前よく腸をぶちまけてやる……！」

「……………」

短刀を振りかぶる。

驚嘆して目を見開く葉子の目の前で、俺は自らの腹の中心に短刀を突き刺した。

ずぶり、という音がした気がする。錯覚だ。

異物が体内に侵入した感覚に気色悪さを覚える。

次いで灼熱を感じる。肉体が傷の深さを知らしめ、演技ではない脂汗が全身に浮かんだ。顔面が歪み激痛のあまり赤くなる。そして、短刀が体内で魔道具たる由縁を發揮するのを知覚した。

痛みの炎が神経を蹂躪する感覚の中、魔力たる血液が沸騰するかのよう熱され、俺の中の何かのスイツチが入ったのだ。一瞬遠のいた意識の先、真つ暗な世界の中で——青い機体が、そのモノアイを点滅させるのを確かに見た。

「——お兄さま。お兄さま。聞こえていらして？ お兄さま、返事をしてください——」

と、気が遠くなりそうな時間経過の錯覚に身を浸していた俺の肩を、葉子が揺すっているのに気がついた。座ったまま前のめりになり、蹲っていた俺は自意識を覚醒させる。

ふと見ると、俺の腹に短刀は刺さっていなかった。肌蹴た小袖だけそのまま、傷1つない腹筋が晒されている。血糊も何もない。俺が目覚めたのに気づいたのか、葉子は俺の肩に手を置いたまま微笑みかけてきた。心なし、優しげな眼差しである。

しかし反対の手に短刀が握られているので、絵面的に非常に危険な状況に見えた。

「起きましたわね」

「ん……ああ、うん。もしかして、治療は終わった感じ？」

「ええ。お見逸れしましたわ。見事な腹切りでした。よもやあそこまで躊躇なく自らの腸を晒すとは、お兄さまのことを見縊っていたようです。お兄さまが何者が存じませんが、その忠信に疑いがないことを確信しました」

「やらせたのはきみだけどね」

葉子の目は澱んでいても親しげなものに見えた。どうやら俺は『この馬の骨とも知れぬ輩』から『仲間』にランクアップしてもらえらしい。葉子は狂人っぽいのが、狂人には狂人の論理があるように思えたからこそ、こうして腹を切ってみせたがその甲斐はあったようだ。

嘆息して身を起こす。するとすぐに自身の異変を知覚する。なんと形容するか難しいが、俺自身の奥底……バックグラウンド深層心理内に秘められてい

たプログラムが解凍されたかのようにだった。

「白状しますわ。本当は腹を切る必要はありませんでした。わたくしの独断でお兄さまを試すために無茶を言ったに過ぎません。お怒りなら、わたくしも報いを受ける覚悟があります。腹を切れと仰るなら従いましょう」

「……そういうのはいい。貸しつてことにしとく。それより葉子、俺の先天外法なんだけどき」

何やら神妙な面持ちになり、短刀で切腹しそうな雰囲気の葉子を制止する。他人の切腹を見たいとは思わないので、これ幸いと貸しを1つ作りつつ質問した。

意外そうに目を瞬きつつも、葉子は俺の問いに答える。

「先天外法ってどう使うんだ？」

「……短刀の力で【八咫】の名前を思い出したはず。【八咫】が教えてくれますわ」

言われ……瞑目する。名前……名前……確かに分かる。自分の核となる部分の、青い機体の名前が脳裏に浮かんできていた。先天外法はどうやら【八咫】に由来する力のようだった。

機体の名前。それを口に出した。

【人形思兼主神】
ひんなおもいかねぬし

それはヤマト書記と古事記に登場する、カラクリ仕掛けの知恵の神の名だ。大層な名前である。だが失笑する間もなく、かちりと頭の中のピースが嵌まる感覚があり。

俺は、俺の先天外法の全容を思い出した。笑みが自然と浮かぶ。コイツは凄いなと我ながら感心する力だった。全身を巡る血液が粘性を増して、凄まじい活力を与えてくれている。

目線の高さに左手を翳す。そして、脳裏に浮かんだ設計図に従い、結合させた火と土の魔力を掌へ具現化させた。誰に教わらずとも容易く魔法の力を行使できたのだ。

「堪ないね、これは」

果たして現れたのは、創ろうとしていた通りの兵器。

黒光りする銃身が魅力的な、時代を先取りし過ぎな自動拳銃だっ

た。

十一話 【外州からの侵略】

小高く盛り上がった丘に寝そべり、拳銃を握った手を星空に掲げる。

手にしているのは現代ヤマトの銃器メーカー、三矢社が製造した最新のスライカー式自動拳銃である黒練クロク十七式だ。

リボルバー式の方が外見は格好いいと思うが、扱い易さでは自動拳銃の方が上だと小耳に挟んだことがあった。自動拳銃の黒練十七式を造った理由なんてそれだけである。

これの装弾数は複列弾倉の17+1で、銃身長は114ミリメートル、重量は705グラム、口径は9ミリメートルで使用弾薬は完全被甲弾だ。銃全体の6割が強化ポリマーであり、残り4割が金属である。金属部分は主に内部パーツのみで、従来の拳銃より軽量だ。

手に吸い付くようで、実に馴染む。一般人だった俺は銃器なんて触れたこともないのに、まるで長年愛用してきたかのような感覚があった。触ったことはおろか、銃に関しては無知に等しかったはずなのに、完璧にカタログスペックと使用感を熟知している感覚まである。まだ未発砲だが、狙った所に直撃させられる自信があった。射程距離が届きさえすれば月にだって当てられそうだ。

体の一部のように感じる銃口を夜空に浮かぶ三日月に向け、俺は半笑いを浮かべて呟く。

「——たった1日で、変わりすぎだろ……色々」

激動の1日だった。現代から当世に来て。稀代の英雄の無名時代と導かれるようにして出会い。こうして鬼とドラゴン退治に出掛けている。あまつさえ自身は魔人——超人になっていて、現代人には夢物語となった魔法の力に、切腹させられた後に目覚めた。

濃い。あまりに、濃い時間だった。

頭がショートしそうだ。夜気に触れ、冷たい風に髪を攫われなが

ら、ただただ漫然と時間経過に身を浸す。色んなことを考え過ぎて、知恵熱を出しそうな頭を休ませているのである。

体から力を抜く。拳銃を持ったままの手がぱたりと地についた。目を閉じると、五感が鋭敏になっているのを自覚した。風に吹かれ草木が擦れる音、静かな夜を彩る虫の輪唱、それら全ての気配に交じる小さな足音と呼吸音まで、仔細に把握できる。

俺は自身の傍にやって来て、立ったまま見下ろしてくる少女の気配に気づかないふりをした。5秒の沈黙の末、葉子の開いた家屋から足を運んできた九針が、俺に微笑を落とすのを感じる。

「呼吸が浅い、身じろぎしない、意識が私に向いている。狸寝入りは下手くそだな」

「……ちよつと放っておいてほしいんだけど」

狸寝入りを指摘され、嘆息しながら目を開く。弱い星光しかないのに、俺の目は九針の美貌をはつきりと視認できていた。超人になっているお蔭で以前より夜目も効くようになっていたのだ。

浅葱色の小袖姿の九針は、気怠そうな俺の拒絶を無視して隣に座り込む。片膝を立て、肘をそこに乗せたラフな姿勢になった。今までの俺なら鬱陶しく感じるのだろうが、九針相手だと不愉快さは微塵も感じない。寧ろ若干浮足立って嬉色を浮かべてしまいそうである。

彼女と邂逅した直後の状態を思い返すに、どうやら彼女の魔力が生む魅了効果は、相手の精神状態を高揚させてしまうらしい。そのせいで今までの人生で他者に魅力を感じたことがない俺も、健全な青少年らしく異性に反応していたのだ。おまけに自身がそんな状態になっていることを自覚するのも難しくなっている。だが不快でなくても疲れているのは分かるが、本当に放っておいてほしい。

「疲れているのは分かるが、少し付き合ってくれ。そんなに手間は取らさないよ」

無視しようかと思ったが、そういえば俺は九針の配下になってるんだ。些細なことの積み重ねで印象も変わる、疲れているのを言い訳にはせず素直に体を起こした。

九針の声は、実に耳触りがいい。声質もまた対人関係に関わる大き

なフアクターだが、彼女の美声はいつまでも聞いていたくなるものだ。一時はアイドルの追っ掛けをして、アイドル達の声や立ち居振る舞いを見て勝手に学ばせてもらっていたが、九針ほどアイドルに相応しい人はいないだろうと思う。もし九針が現代でアイドルになれば、瞬く間に世界一の看板を手に入れるはずだ。

益体もない空想を捨て、隣の九針を見る。彼女の興味深そうな視線は拳銃に向けられていた。

「付き合えって……明日は日の出から動くんだろ。こっちはもう充分寝たんだし、九針と千景も寝ていた方がいいんじゃないか？」

切腹して気絶していたらしい俺は、たつぷり6時間はそのまま寝ていたらしい。だからか目は冴えている。しかし1日で得た大量の情報処理した頭の疲労はまだ抜けていない。糖分が必要だ。

ともあれ休息は挟んでいる。見張りを交代して葉子は家屋の北側、俺は南側で待機しているのが現状だった。だというのに九針は睡眠を取らずに俺の所に来たのである。

「用が済んだらさっさと寝るさ。——貴様も先天外法を開眼させただろう？ その手にあるのは次郎太の先天外法で創り出した物なのは分かる。それがどんな物なのか聞いておきたかったんだ」

「へえ。じゃあ、なんで千景は俺の後ろに回り込んでるんだ？」

「……千景の隠形に気づいたのか？ やるじゃないか」

苦笑いを浮かべて反駁すると、九針は愉快げに笑みを深める。

息を潜め、ほぼ完全に気配を周囲に溶け込ませていた千景がいるのには今気づいたところだ。

俺の背後に近づくまで全く察知できていなかったが、生憎と俺の耳は嘗てなく鋭敏である。信じ難いことに千景と九針の心音が聞こえるほどだ。流石に夜の静けさがあつて、更に近くまで来られないと気づけないぐらい小さいが、心臓の鼓動が聞こえる以上不意は突かれな
い。

やや驚いたように、俺を九針と挟むようにして現れた千景が、隣に座りながら訊ねてくる。

「——イロも驚きました。雑魚の次郎太殿が、どうやってイロに気づ

いたでござる？ 完璧に気配を溶かしていたはずなんですけど」

「さつきからどうにも五感が冴え渡ってるんだよ。そのお蔭で近くまで来られると心臓の鼓動まで聞こえる。気配は消せても心臓を止められるわけじゃないだろ？ だから分かったんだ」

「ほえー……」

「そんなに耳が良くなったのか？ なら私達が普通に話してるだけでも、無駄に大声に聞こえたりして不便そうだが……」

「それが全然普通に聞こえるんだよな。俺は意識してないけど、聞き取った音量を無意識に調整してるんだと思う。たぶんだけどね」

「ふうん……で、ソイツは結局なんだ？ 武器、なんだろう？」

聴覚について答えると、納得したのかすぐに興味の対象が拳銃に移ったらしい。

真新しい玩具を目にした子供みたいな顔に、俺は苦笑しながら答える。

「拳銃だよ。九針達は火縄銃——種子島って知ってる？ あれよりずっと凄くて強い携行火器だ。例えるなら木の棒と刀の大業物ぐらい差があるよ」

「種子島……ああ、噂に聞くオモチャのことか。以前見たことが一度だけあるが……なあ？」

「ええ。どれだけの代物かと思ったら、意外と大したことはなさそうですね、姉上」

火縄銃と聞いて露骨に失笑した九針に水を向けられ、千景も期待外れだと言わんばかりに肩を竦めた。強い武器を手に入れた気分だった俺は、途端に不安になる。え、そんな反応なの？ と。

不安を隠して訊いてみた。

「……火縄銃って、九針達から見たらどんな武器なんだ？」

「色々と扱いづらい点は無視して、純粹に武器としての性能だけを見ても、吐き出す鉛玉は弓術の達人が放つ矢より遅い。そのうえ整備性と量産性も悪い、金も掛かる、はつきり言ってゴミだな」

「あんなの戦場だと通じないでござる。今後の発展に期待、と葉子は言っていましたけど。……あ、別に次郎太殿を馬鹿にしてるわけじゃない

いです。不快な言い方に聞こえたらごめんね？」

「謝らなくていいよ。けど……そうだね、俺も九針達みたいな超人に、拳銃が通じるのか試してみたくはあるかな」

ゴミ呼ばわりは流石に酷い。半信半疑で挑発気味に言うと、九針はにやりと唇を歪めた。

「いいだろう。千景」

「はあい」

立ち上がった千景が数歩進み、俺の前に立つ。距離はたったの4メートル。腰帯に差している刀の柄に手を置いて、まさかと目を剥く俺に向けて彼女は告げた。

「いつでも撃つて来ていいでござるよ、次郎太殿」

「……正気か？ 幾らなんでもそれは……」

「大丈夫です。仮に当たっても葉子に治してもらいますから」
「……………」

「心配するな。私が許す、撃て」

「ええ……マジかよ。……じゃあ、当たらないように撃つからな」

クレイジーだ。自信満々な千景も、撃つていいという九針も。

こんな至近距離だと適当に撃つても当たる。いいと言われても流石に躊躇ってしまった。

しかし彼女達レベルの超人に、どれほど通用するか興味があるのも確かである。そこで俺は、千景の肩を掠めるぐらいの位置に撃つことにした。どう反応するかを見るためだ。

立ち上がって銃口を向ける。刀を鞘に秘めたまま棒立ちする千景の、右肩の上を掠めるぐらいを狙い発砲した。轟音を奏でて弾丸が射出され、それは俺の狙い通りの軌道を辿って飛翔する。

瞬間、千景の手がブレた。いや、手だけではない。肩、腕、肘、そして腰。それらの実像がブレていた。そして虚空に火花が散り、離れたところに真っ二つになった弾丸が落ちていく。

驚愕し目を見開いた。抜刀から納刀までの動きがまるで見えなかったのだ。

「ぎつと……んなものじゃねえ」

「……もう一回頼む。今度は当てに行くから」

「ふっふっふ」

得意げに小鼻を膨らませる千景に、俺は銃口を向け直した。

狙うのは胴体の真ん中、それから肩、頭、脚、と狙いをバラけさせながら連続で射撃する。

連射された瞬間だけ驚いたようだったが、千景は放たれた銃弾の全てを容易く両断した。秒間3発は撃っていたのに対応されたのだ。驚嘆に値したが、何よりも驚くべきなのは銃弾を放った側である、俺の目にも銃弾が目で追えたことであつた。

呆気にとられた俺に、千景は忌憚のない意見を伝えてくる。

「連続して撃てるのは予想外でした。全部で17発……最初のを含めると18発ですね。これなら雑魚を仕留めることぐらひは能い^{あた}そうです。……ちなみにもつと連射は出来たりしますか？」

「……出来る、かな。弾とか火薬とか……雷管とかも全部俺の魔力で造つてるし。魔力が尽きるまで何発でも連射出来るよ。けど……あれだ、自分で撃つといてなんだけど……弱いねこれ」

「だからゴミだつて姉上も言つてたじゃないですか。ま、イロは評価しますけど。数を揃えられたら、雑魚には通じると思えますよ。たぶんでござるが」

なんだかショックだつた。普通に悔しいとも思う。だつてこのままだと俺は雑魚のままだ。折角この銃火器で俺の利用価値が出ると思っていたのに……なんなら1人でも生きていけるかとも思いかけてもいた。その自信が粉々に砕け散つた心地である。呆然と立ち尽くす俺に、何を思ったのか九針もまた千景の隣に立つた。そして俺に向けて挑発的に言ってくる。

「ほら、今度は私だ。もつと強い武器を創れるならそつちも試してみろ」

「……分かつた」

このままでは終われない。拳銃を投げ捨てた俺は気を引き締めて、今度は別の銃を造る。

新たに造り出すのは同じく三矢社の^{アサルトライフル}突撃銃だ。装弾数は30発だ

が、撃った端から俺の魔力で内部に弾丸を補充できるので、実質壊れるまで連射できる。

当たり前みたいに突撃銃を構える。射撃経験はなかったのに、プロフェツシヨナルみたいに堂に入った射撃体勢だ。そのまま銃口を九針に向けると、彼女はどこからともなく双刀を取り出した。

え？ と困惑したような声を漏らす。

「……なにそれ？」

「そういえばまだ見せてなかったか。コイツは私の【草薙】で、銘は【雌雄陰陽】だよ」

「く、草薙……？」

「いいから撃ってこい。ほら。早く」

「あ、ああ……」

【草薙】ってアレだ。超人の中でも一握りの奴しか発現しなかったという、三種の神器でも特に伝説的な代物である。神話の英雄が【草薙】を使って怪物を討伐した事例は数多く知られていた。

そんなものをこんなところで、こんな場面で見せられると困惑してしまう。何より九針の【草薙】からは想像していたような特別な力を感じない。なんの変哲もない2本の刀にしか見えなかった。

戸惑ってしまっても、催促されて気を持ち直す。

「それじゃ、いくぞ」と一言掛けて、俺は突撃銃のトリガーを引き絞った。

火縄銃と拳銃の弾速は約1100キロメートル毎時から1200キロメートル毎時ほど。翻って突撃銃はおおよそ3400キロメートル毎時だ。弾速は3倍近く優れている。

果たして轟音の乱舞を、九針の双刀は捌いていく。3倍近い弾速に面食らった様子を見せながらも、舞うようにして次々と弾丸を切り裂いた。――夜の暗闇の中、繚乱する火花の中を舞う美少女の姿はひどく幻想的で、異様なまでに華々しく見えてしまう。

ひとまず60発ほど撃ちまくると射撃をやめた。これ以上はテストだとしても無意味だと思ったのだ。アサルトライフルですら効果がないのか……と、そんなふうに意気消沈していると、舞うのをやめ

た九針がこめかみを痙攣させ、怒っている様子で歩み寄ってくる。

「……おい。一発当たったぞ、次郎太。銃の連射性能を上げてるなら、事前に一言ぐらい入れてもよかったんじゃないか？」

「どうやら一発だけ捌き損ねていたらしい。」

「双刀を虚空に溶かすようにして消し去った九針が、痛そうに肩を押さえていた。」

しかし、その割には出血していない。着弾箇所を見せてもらおうと、小袖は丸い穴を空けていたが、肝心の人体——左肩はその肌を赤くしているぐらいだった。

直撃したのに、この程度の効果しかないなんて。つくづく当世の超人はバケモノである。

「……鎧は着けてなかったんだな。幻装束で鎧を隠してると思ってたのに」

「就寝前だぞ、着けてるわけないだろう。寝る時にまで鎧を着ていたから寝付きが悪くなる。胸も苦しいしな。それより謝罪はまだか？」

「小さいのより3倍も弾速が上がるだなんて聞いてないぞ」

「……ごめん。怪我させて悪かった」

「怪我はしてない。こんなの怪我の内に入るか。いいか次郎太、魔力を込めてない武器が超人に効くわけもないとはいえ、次からは事前に注意ぐらいはしろ。些細な行き違いで事故を起こすのは勘弁願いたいからな」

呆れたように身を翻し、九針は俺の拳銃を拾うと千景を伴って家屋へ引き返していった。

「ちゃんと見張りをしろよと言いつ残して。」

やや機嫌を害した九針が立ち去ったのをよそに、彼女からの評価が落ちたかもと心配するよりも——俺は九針の台詞に引つ掛かるものを覚えていた。

「魔力を込めていない武器が……効くわけない？ 九針はそう言ったのか？」

「なら魔力を込めたら効くということだろうか。」

——思案する。ついでに試行する。

どうやったら武器に魔力を込められるのか、まず自分だけで模索してみた。俺の【八咫・人形思兼主神】に接続したら遣り方ぐらい分かる気がする。分からなかったら後で葉子に訊いてみよう。

試行錯誤を繰り返していく。そうして夜が更けていった。

やがて彼方から日輪が顔を出すまでその場を動かなかった俺は、会心の笑みを浮かべた。

「――魔力の込め方とか全然分からん」

時間の無駄だった。葉子先生に遣り方を教えてもらおう。

† † † † † † † †

葉子が創造した疑似生命の黒馬に跨り、今度は自分で操作してみる。

前日で騎乗の感覚に多少慣れていたので、黒馬が自我を持たない機械じみた存在で、命令に忠実だったお蔭で問題なく馬を走らせられた。

これに慣れてしまったら、普通の生物としての馬には満足できない体になってしまいうだろう。

何より機械と同じぐらい素直なのが堪らなく好みだった。葉子の馬に依存してしまいそうだ。

昨日と同じく九針を先頭にして駆けていく中、俺は葉子へと問い掛ける。

「なあ、葉子。自分の魔法で創った武器に、どうやったら魔力を込められるんだ？」

「――あら。わたくしに訊きますの？ てつきりお兄さまは、お姉さまに訊くものと思っていましたが……頼られて悪い気はしませんわね。お答えしましょう」

その物言い……どうやら俺が葉子に苦手意識を持っていたことに気づかれていたらしい。どこで気づいたのだろう。そういう素振りを見せていないと思っていたのだが。

しかし苦手意識の払拭に前向きではいるのだ。でない武器に魔力を込める技術を訊ねたりはしない。今日中に伝説上の怪異、鬼とドラゴンに対面するのだ。最低限の戦力は身に着けておきたいというものもある、そのために葉子とのベストな距離感を探っておきたかった。

「基礎的な話ですけど、魔力とは血であるというのはご存知ですね？」

駆ける馬は時速100キロメートルは出しているのに、相変わらず風圧をまるで感じずにいる葉子は、芦毛の馬の背に横座りして、靡きもしない髪を耳に掛けながら俺に言った。

「もちろん」

「なら話は早いですわ。魔力を得物に込める感覚を掴むには、使用する得物に直接自身の血を流し込み、傷口に密着させ続けてみるとういでしょう。そのうち得物に流れ込む魔力の感覚を掴めるはずですので、感覚を把握したらわざわざ血を流し込む必要もなくなりますわ」「……なるほど？ 分かるような、分からないような……とりあえず試してみるよ」

魔力は血だ。魔力の使い過ぎは多量出血に等しい対価を支払うことになる。逆に血を流し過ぎても魔力が体内から失われるのだ。

葉子のアドバイス通りにしたら魔力を無駄に損なうだけで、メリツトなんか無いと思うのだが、実際に何年も魔法を使ってきた葉子の助言を無視するのも愚かしい。素直に言うことを聞こう。俺は右手の親指の腹を犬歯で切り、流れ出た血をそのままに拳銃を創造する。

拳銃・黒練十七式に、血の出ている親指を押し当て、暫く注意を傾けた。

何秒間、そうしていただろう。無言で意識を尖らせていると、やがて俺の血が拳銃に浸透していく感覚を覚えた。ん、と唸り、眉根を寄せる。ややあって不可思議な感覚に襲われた。

創造した拳銃が、体の延長線上にあるような感覚。手足に付属する部品のよう……後付けの指みたいな感触だ。見ると、親指の傷口から薄い血管が拳銃に伝っている。

拳銃がドクンと鼓動を刻んだ。意識して、拳銃が内蔵している弾丸に魔力を傾けた。そうして銃口を真上に向け、トリガーを引く。

「……………」

轟音が吐き出された。放たれた銃弾は、九針に放った突撃銃の弾丸よりも、倍近い弾速を叩き出している。拳銃の弾がだ。しかも凄まじい威力を感じた。魔力を込めていない時は全く反動を感じていなかったのに、今のは手首に響く重さを感じたのである。

「流石ですわね、お兄さま。こんな短時間で感覚を掴むだなんて」

「…………でも慣れるにはまだ時間が掛かりそうだ。もう少しこつちに集中したいから、馬の操作は任せてもいいかな？」

「畏まりました。頑張ってくださいね、お兄さま」

「ありがとう」

黒馬の制御を葉子に任せ、礼を言って拳銃に意識を向け直す。

魔力が体外の無機物に流れ込む感覚に、違和感や不快感はない。しかし未知の感覚だ、可及的速やかに対応しこの新感覚に慣れてしまわないといけなかった。

集中、集中だ。

何も見ない、何も聞かない、何も感じない。拳銃に魔力が流れる感覚以外。

この力は今後生きていく中で必須になる。是が非でも習得する。

集中力を極限まで研ぎ澄ます。それに伴い視界がモノクロになり、聴覚が閉ざされていった。

無音の白黒世界。

現代にいた頃でも同様のことは出来ていたが、超人になっっている今だと更に精度が増している気がする。その只中で拳銃に張り巡らされる血管と、そこに流れる魔力血液の感覚を強烈に意識した。

よし、と内心呟く。覚えた、と自己に言い聞かせる。間違いなく覚えた、今後は流血しなくても、無機物に魔力を叩き込むことができる

はずだ。試しに一度集中を解いて、拳銃に魔力を流してみよう。

その後に、千景と九針のどちらかへ、銃器の性能が脅威足り得るか見てもらおうと思った。

——その時だ。

「うわっ」

不意に全身を包み込んでいた風圧が弱まり、堪らず黒馬の首に上体を倒してしまった。何事だと思って前を見ると九針が鳳翔月影を止まらせて、自身は片手を上げ後続を制止しているではないか。

俺の真隣にいる千景も、馬上で険しい顔をしている。少し前にいる葉子の横顔も固かった。視線を前に向ける。彼女達がそれほど緊迫した様子を見せる原因を確かめたかったのだ。

そうして、俺も固まった。目の前の光景が、現実のものとは思えなかったのである。

「……なんだ、これ」

なんとか捻り出したのは、呻き声。明らかな異常現象を前に、絶句してしまう。

小山の上に来ていた俺達の眼前にあったもの。それは——毒々しい紫の帳だ。

大気に充満する猛毒の空気の層。それが目的地のヨコイソを汚染している。

草木は枯れ落ち、大地は真っ黒に染まっていた。

海に面した長閑な現代ヨコイソと比して、まるで原型を留めていない。全く別の土地になっている。何より海が全く見えないのも我が目を疑わせる要因であった。

ただ1人、九針だけが楽しげだった。

「ふうん……コイツは魂消た。ヤマト本州が、外州に侵食されているとはな。どうやら話題の鬼は余程の大怪異らしい、楽しくなってきたなあ」

現代には情報が一欠片すら残っていない外州という存在。曰く怪異の楽園。それがヤマトの大地を侵している。俺の生物としての本能が警鐘を鳴らしているのが分かった。

逃げろ、逃げろ、逃げろと本能が叫んでいる。

だって。この毒々しい紫の帳、猛毒の空気の層は——魔力そのものだった。

溢れ出た魔力が目に見えるほど溜まっている。しかもそれは、一個の生物の魔力なのだ。

「……なあ、九針。これ……手に負えなくない？」

正直に畏怖の念を伝える。回れ右をして帰りたくて堪らなかった。しかし、そんな俺の弱腰を、稀世の霸王は一笑する。

「手に負えない？ 馬鹿め、だからといって逃げてどうする。そもそも逃げ場はないぞ。この調子だと1か月後にはタネサトも侵される。拠点を捨てて流浪するにはまだ早いんだ」

「……たぶんシゲノブさんが此処の様子を見てから4日も経ってないだろ。その前にはまだ、ヨコイソはこんなことにはなってなかったはずだ。たったそれっぽっちの間に、これだけの異常現象を起こすような奴がいるってのに、わざわざ自分から突っ込んで行く気なのかよ？」

「無論。これだけの規模だ、どうせ大名の耳にもこの件は届いているだろう。対応するために軍を編成している最中だ、半月としない内に乗り込んでくるのは目に見えている。3ヶ月も過ぎると全国から武功欲しさに腕つき共がやって来かねん。そうなれば折角の大物を殺り逃す羽目になるぞ。是が非でも私達でこの「帳の主」をブチ殺さないと後悔することになる」

俺は今、九針に付いて来たことを後悔してるんですけど？

そう言いたくなるのを堪え、葉子と千景を見た。九針を止めてくれと念じながら。

しかし、無駄だと悟った。

2人とも覚悟を決めた顔をしている。九針が行くなら自分も行くとその目が言っていた。

「早速行くぞ。だが気をつけろ、外州に侵されている地には、怪異が自然発生してくる。くれぐれも気を抜くな」

「帰りたいんだけど。帰っていい？」

「駄目だ。私達の中で死ぬとしたら貴様が最後になる、逃げるなら1人になってから逃げろ」

一蹴されて嘆息した。しかし、一応は守ってくれる意思はあるようなので絶望はしない。

鳳翔月影の馬腹を腿で締め上げ、馬蹄を鳴らして駆けていく九針の背を、諦めて追っていた。

こうして俺は、知られざる歴史の裏側に突入していったのだ。

当世にやって来て、僅か2日目。

十二話 【竜気蓋世の戦絵巻（上）】

明らかに人体に有害そうな紫の空気層。しかしそこへ突入した俺の体に異変は起きなかった。

臭いはない。無臭だ。吸い込んだ空気で気道や肺臓が痛みもしない。

むしろ深い森の中にいるかのように空気が澄んでいると感じる。

無意識に左掌を開いてそこに視線を向けると、青い【勾玉】の中に【八咫】が映っていた。俺の魂の姿である青い機体【人形思兼主神】がホログラムを虚空に投影する。何事かとも思うも、どうやら空気中の含有成分を分析しグラフ化しているらしい。

俺が気にしてきた不安要素を解明していたのだ。自律行動したのか、と自問する。しかしすぐにそうではないと思った。深層心理内バックグラウンドで無意識に、反射行動として解析したのである。

まるで自分の体ではないかのようだ。例えるなら一世代前の携帯端末だった体が、知らない間に数世紀先の端末へアップグレードされていたようなもの。自身の性能を扱いきれていないのである。

疾走する馬の動きに合わせ、上下する視界の中で舌打ちした。

紫の帳の中にある空気の成分は、酸素が約21パーセント、窒素約78パーセント、その他約1パーセント。合計で100パーセントだ。これは人間が呼吸できる空気だが、しかし空気中には他の成分も漂っていた。通常の機器では計測できない成分があるのである。

それは血だ。ただの血液ではない。高濃度の魔力を内包している故に、酸素などと混じり合うことなく虚空に漂って魔力の霧になっている。つまりこの紫の帳の正体は、魔力そのものということだ。

誰の魔力なのかは不明だが、結論を急ぐ必要はない。九針に付いて行けば自ずと判明するだろう。今はとにかく帳の只中を疾駆する。

——と、その時だ。俺の視界の隅にヨコイソの集落が掠めた。

「——っ？ 九針、右を！」

高速で過ぎ去る景色の中、俺は反射的に反応して九針に声を掛ける。

なんとその集落——名も知らない村の中に、人が倒れているのを見かけたのだ。

「人が倒れてる！ 救助は!?」

「捨て置けッ」

こちらを見ず、村にも一瞥をくれることすらなく九針は即答する。

俺は目を見開いて九針の背中を見て、次いで再び通り過ぎていく村を見た。

倒れているのは男と女、それから幼児だ。夫婦とその子供だろう。襤褸の小袖を着ている。

超人になっっている恩恵か、俺は見ようとした対象へ焦点を合わせ、克明にその姿を識別した。

——まだ生きている。仰向けに倒れているが胸は上下し、息は浅いが呼吸している。見たところ外傷はない、急げば助けられるかもしれない。

そう思うも、冷酷に吐き捨てた九針の言葉に、俺は瞠目した。

「奴らはなんの力もない百姓だ、それが外州の空気を装備もなしに吸っているんだぞ。どうせ遠からず死ぬ、無駄な荷物を抱える趣味はない」

超人だったらなんら痛痒を覚えない紫の帳も、そうでない人間には毒になるらしい。

どんな症状を起こすのか。この外州の空気とやらが魔力の霧なら、恐らく現代人が大量の魔力にあてられた際に起こすという魔素中毒だろう。軽度なら失神程度で済むが、重度になると脳と心臓の血管が破裂し死に至るといふ。なら確かに助けられない、既に手遅れだ。

助けられないなら仕方ない。すっぱり視線を切って諦める。俺は自分が跨っている黒馬の手綱を握り締めながら、聞き忘れていたことを訊ねた。

「ヨコイソの人達を助けないのは承服したよ。でもそれとは別に、九

針に1つ聞いておきたいことがあるんだ」

「なんだ？」

「俺達はどこに向かつてるんだ？ この帳に入る前ヨコイソを遠目に見た時、俺の目だと鬼とドラゴンの姿を視認出来なかった。九針は目標の位置を把握してるんだろ？ 目標がどこにいるかぐらい前もつて教えてくれ」

「知らん！」

「またもや即答され、俺は頭を抱えた。つまりノープランで危険地帯に突入したってことだ。」

「馬鹿か？ 馬鹿じゃん。向こう見ずにも程がある。なんでそうも無鉄砲なんだ。」

「呆れ混じりに怒鳴り声を上げた。」

「知らないならどうやって目標を見つけるんだ!？」

「適当に走っていたらその内見つけられる、黙って付いて来い！」

「ふざけんなバカ！ 一旦止まれ、俺に手がある！」

「バカと罵られた九針は、驚いたように背後の俺を振り返ってきた。」

「俺が手綱を操り黒馬を止めているのを見て、彼女も鳳翔月影を停止させる。葉子が凄い目で睨みつけてくるのにはビビったが、九針はそんな義妹の胸に軽く拳骨を押し当てて制止してくれる。」

「手があるだど？ 何をする気だ」

「こうするんだよ」

「馬を寄せてくる九針に目を向けず、先天外法を発動する。俺のそれは、単に銃火器を創造することしか能がないわけではない。【人形思兼主神】が教えてくれた通りに先天外法を行使した。」

「右人差し指の腹を犬歯で噛み皮膚を破る。出血させた人差し指を左掌に押し当て、【勾玉】の上を横切る形で五芒星を描き、中に『機』と『空』とだけ血文字を書いた。そして自身の喉に横一文字の血の線を横切らせて、脳裏に浮かんだ呪文を唱える。」

「【宿りし者の力と念を、我が下に於いて此れへと移す。天機・霊機・人機・神機、急急如律令。我が力に従いて、其の力、此処に聞こし召し給え。急急如律令】」

語りかけ、命じるのは自分自身に、だ。

全身から血が失せていく感覚は軽微。魔力消費は殆ど無い。俺が火と土の属性を持つ魔力で形成したのは小型の無人航空機だ。ドローン・ラジコンカメラを内蔵したそれを左手に掴む形で創造した。

九針は興味深げに覗き込んできて、白い機体のドローンについて訊ねてくる。

「それは……なんだ？」

「ドローン。コイツを今から飛ばして周りを偵察する。それで帳の中の様子を見渡すんだ」

「ふうん……飛ばして、か。飛ぶのか、これが？ 鳥みたいに？」

「そ。鳥みたいに飛ぶんだ。カメラを内蔵してるから、リアルタイムで周辺環境を見ることができる。本当なら他にも色んな設備が必要になるんだけど、このドローンは俺が創った式神みたいなものだから、脳内に直接映像を届けてくれるんだよ」

『かめら』とか『りあるたいむ』とか、訳の分からん単語を並べるな。分かるように言え」

「こういうことだよ」

疑わしけな九針達に明確な返答はせず、ドローンに魔力を送り込んで上空へ投げ放った。解説しなかったのは、今回の件に関して説明不足な九針への意趣返しでもある。

2対のプロペラを回して飛んだドローンを見て、九針達が感心と驚き混じりの声を漏らす。それを無視して俺は目を閉じた。脳内には、あのドローンが内蔵するカメラを通して映像が送られてきていた。まるで自分の体を残して、魂が幽体離脱していったかのように、視界だけが天高く昇っていく感覚はひどく頼りない。が、それに恐怖心を覚える質でもなかった。

どんどんドローンは上昇していく。周りを見渡す前に把握したいことがあったからだ。果たしてこの外州の空気、帳とやらは、どこまでの範囲を覆っているか知っておきたかったのである。

やがて式神であるドローンは上空13000メートルまで達する。空に浮かぶ雲の高さだ。これ以上は上げられそうにない。ここが俺

の限界らしい。現代で作られていたドローンは、果たしてどこまで上昇できるのだろうか。ちよつと気になるが、今更知りようもなかった。

「マジか……」

そこまで高く飛ばした甲斐あって、外州の空気層がどこまでを覆っているか把握できた。

外州から立ち上る紫の帳は、成層圏にまで達している。宇宙から地球を見下ろしたなら、恐らく外州の上空だけ紫色に染まっていることだろう。

驚嘆に値する光景に唾然としながら、ドローンを降下させていく。ついでに外州が本当に存在するのも確かめるために四方を見渡す。

——本当に、ヨコイソから西を見ても海がない。陸地だ。

紫の空気に充満する陸地で、大華大陸と昼鮮半島がヤマト列島と地続きになっている。だから九針はヤマトを『列島』ではなく『本州』と言ったのだろう。

事実確認をして、九針からの情報が誤りではないことを認める。元々疑ってはいなかったが、彼女は信用できると改めて思った。そうして地表に降下させていく最中、俺は向かって10時の方向に、一際高く盛り上がっている山を見つける。不自然な地形だった。

地上にいる俺達から、距離にして約4キロメートル。空中からは他に目につくものはない。それが逆に不自然さを煽っている。俺は眉根を寄せ、胸の前で手印を組む。左人差し指と中指を合わせ、他の指は畳んだ形だ。解、と呟いてドローンを掻き消す。

使っていて気づいたが、俺の先天外法は魔法で言うところの仙術に属するようだ。手印と呪文を組み合わせて使うのが証拠である。先天外法のタイプからして、俺は内外法だと仙術の方が性に合っているのかもしれない。内外法を学べるなら、このことは覚えておこう。

頭の片隅でそんなことを考えつつ、閉じていた目を開いた。

「向かって北西の方角、距離4キロメートルほど先に山がある。皆には山が見える?」

「きろめーとる?」

「え? あー……えつと、1里つて言えばいいんだっけ?」

オウム返しに呟いた千景の様子に、面倒だなと思いつながら当世での距離の単位を口にする。

3人とも北西を見た。そして平野が広がっているのを確かめ、3対の視線が俺に戻ってくる。訝しむように葉子が言った。

「何も見えませんわ。どれぐらいの大きさの山なんですの？」

「でかい。富士山って分かる？ 目算だけどそれぐらいの大きさだ」
「……………」

超人ではなく、現代人のクソザコ視力でも4キロメートル先にあるデカイ山は見えるだろう。

なのに何も見えない。これは明らかに異常だった。

普通なら俺の目がイカれてるか、ドローンの故障を疑うところだが、生憎とここにいるのは普通じゃない人間たちだ。九針がいつものように「ふうん」と吐息を溢し、義妹に目をやる。

義姉の意を受けて葉子は下馬すると、左人差し指を立て、親指を残りの指で包む。反対の右手で左人差し指を握り、右親指で左人差し指の先に触れる手印を結んだ。智拳印と呼ばれる印だ。

半眼となって1秒の間を置く。印の効力を確かめているのだろう。葉子は智拳印を解くと、右手の指全てで地面に触れた。触地印だ。すると地に触れていた葉子の右手の指全てから、5つの魔力の波紋が広がっていく。湖面に小石を落としたように。

効果は瞭然だった。

肉眼では捉えられなかった巨大な山が、際限なく広がっていく波紋に触れ、忽然とその姿を表したのである。「うわっ」と声を漏らした千景を尻目に、九針は唇を歪めた。

「次郎太。あれほどの山を築き、隠蔽してのける業も、貴様に掛かれれば形無しだな。お手柄だよ、次郎太を連れてきてよかった。貴様がいなければあれを見つけないでどれだけ走り回っていたか」

「うん。褒めてくれるのは嬉しいんだけど、それより前見てほしいかなって」

乾いた笑みを浮かべて前方を指差す。

俺が見つつけ、葉子が暴いた名も無き巨山。緑のない禿げた地層を覗

かせる山頂に——居た。

キリンのように長い首は太く、刺々しい鱗に覆われた体躯は巨大。岩石を掘り起こしたような腕には隆々とした筋肉が浮き上がり、3本の指には分厚い鉤爪が付いている。

蝙蝠の如き1対の羽は畳まれて、2本の捻れた角は片方が半ばから折れており、城門のような目蓋は重く閉ざされていた。見るからに筋肉の塊である尾に頭を乗せ、山頂にて眠っているのは——典型的な西洋竜——ドラゴンだ。悪魔的な禍々しさが見ただけで伝わってくる。

暴力的な魔力の奔流を感じる。どうして今まで何も感じなかったのか不思議なほどだ。

4キロメートルも離れているのに、はつきりとその巨体が見て取れる。余りに巨きい、恐らくだが余裕で全長30メートルは超えていそうだ。体重なんて何トンあるのか想像したくもない。

空中からドローンであるの山を見た時に気づかなかったのは、あのドラゴンが途轍もなく大き過ぎる上に、岩石のような体色だったからだ。あの山の一部に見えていたのである。

だが肉眼で見ると、カメラ越しでは認識できない生物の存在感を痛いほど感じた。

葉子の術により、巨山を覆っていた結界らしきものの消失を察知したのか、ドラゴンは訝しげに目を開き——こちらを見た。ゾツと背筋が粟立つ感覚に襲われる。上体を起こしたドラゴンが、じろりと九針を、葉子を見て、千景を見て。最後に俺を見た。

「——!!」

岩石の如き悪魔竜が、世界そのものを振動させているかのような咆哮を上げた。

規格外の声量で、地響きすらしている。

顔を引き攣らせて、俺はドラゴンを見ながら言った。

「これ……ヤバくない?」

「うん、ヤバイ」

九針は笑っているが、若干冷や汗を浮かべている。

見れば千景は能面のような無表情になっていた。何事もなさそう

なのは葉子だけだ。

ヤバいと返してきた我らが頭領に訊ねる。

「どれぐらいヤバいの？」

「滅茶苦茶ヤバい」

「……どうヤバい？」

「龍神の眷属が目じゃないぐらいヤバい」

「それは……ヤバいね」

「ああ……正直舐めてた。あのどらごんとやらは、龍神達の末端ぐら
いにはヤバそうだ」

「つまり？」

ヤバいやバいと連呼するだけだと分からないので、彼我の戦力比に
ついて訊ねているというのに、九針は要領を得ない返答を寄越すばか
りだった。焦れて端的に問う。

すると九針は覇気を溢し、俺に一瞥を向けてくる。

その顔は猛々しく、怯懦の一片もない、凜猛な獣の欲望を湛えてい
た。

「殺し甲斐がある」